



PUBLIC (公開)

SAP BusinessObjects

ドキュメントバージョン: 4.3 Support Package 4 – 2023-12-07

SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP 管理者ガイド

目次

1	ドキュメント履歴.....	6
2	SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP の概要.....	7
2.1	Analysis, edition for OLAP のコンポーネント.....	7
	Analysis クライアント.....	7
	Analysis Multi-Dimensional Analysis Service.....	7
2.2	このガイドについて.....	8
	ドキュメンテーション.....	8
	このガイドの対象読者.....	9
3	アーキテクチャ.....	10
3.1	Analysis アーキテクチャ図.....	10
3.2	SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームデプロイメントモデル.....	11
3.3	Multi-Dimensional Analysis Service.....	12
	サーバフェールオーバー.....	12
4	インストールと設定.....	13
4.1	管理ツール.....	13
	セントラル管理コンソール(CMC).....	13
	セントラル設定マネージャ (CCM).....	13
4.2	インストールに関する注意事項.....	13
4.3	データソース.....	14
4.4	Web アプリケーションサーバの設定.....	14
4.5	インストール後のフォントの設定.....	15
4.6	Essbase OLAP 接続のために BI プラットフォームを設定する.....	17
4.7	ファイアウォールポートの使用.....	18
4.8	Analysis サーバデプロイメントの複製.....	18
4.9	階層メタデータの事前ロード設定.....	18
4.10	プロンプト確認.....	19
4.11	Quirks モードでのワークスペースの表示.....	20
	すべてのワークスペースを Quirks モードで実行するように設定する.....	20
	個々のワークスペースを Quirks モードで実行するように設定する.....	21
4.12	エクスポートの制限.....	21
4.13	メンバーセレクトタのキャッシュ制限.....	21
4.14	セッションのタイムアウト設定.....	22
4.15	アクセシビリティ.....	23
4.16	必要な SAP ノート.....	24
4.17	Oracle OLAP Data Provider for SAP BusinessObjects Business Intelligence.....	24

	Oracle OLAP Data Provider のソフトウェア要件.	25
	Oracle OLAP Data Provider のインストールパッケージ.	26
	Oracle OLAP Data Provider の設定.	28
	JVM メモリ使用量の設定.	32
	Web サーバおよび XMLA サービスの実行.	33
	インストールのテスト.	36
	JConsole を使用した Oracle OLAP Data Provider の監視.	37
	Analysis に対して Oracle OLAP Data Provider を有効にする.	39
	Oracle OLAP Data Provider のアンインストール.	40
	ログを使用した MDX および SQL の問題のトラブルシューティング.	41
5	セキュリティ.	43
5.1	MDAS の Secure Sockets Layer(SSL)の設定.	43
5.2	データの保護とプライバシー.	43
6	アクセス権の管理.	44
6.1	アクセス権およびアクセスレベルの概要.	44
6.2	Analysis ワークスペースアクセス権の作成.	44
	Analysis ワークスペースの作成権限を付与する.	44
6.3	Analysis オブジェクトのアクセス権.	45
	Analysis オブジェクトのアクセス権を設定する.	46
6.4	Analysis オブジェクトのアクセスレベル.	47
	Analysis オブジェクトのアクセスレベルを設定する.	48
6.5	データアクセス.	49
	OLAP 接続フォルダにアクセス権を設定する.	49
6.6	Analysis ワークスペースへのアクセス権の変更.	50
	ワークスペースへのアクセス権を変更する.	50
6.7	カスタムグループの権限の設定.	51
	カスタムグループの編集権限または削除権限を設定する.	51
	カスタムグループの共有権限を設定する.	52
6.8	分析アプリケーションへのエクスポート権限.	53
	ワークスペースを分析アプリケーションとしてエクスポートする権限を付与する.	53
6.9	PDF、Excel、または CSV 形式にエクスポートする権限を付与する.	53
7	MDAS メンテナンス.	55
7.1	Server Intelligence Agent の起動と停止.	55
7.2	Multi-Dimensional Analysis Service の起動および停止.	55
7.3	Multi-Dimensional Analysis Service の再起動.	55
7.4	MDAS インスタンスの有効化および無効化.	56
7.5	MDAS インスタンスの追加と削除.	56
7.6	MDAS サーバの設定ファイル.	56
	MDAS 設定ファイル — mdas_default.properties.	57

	MDAS 設定ファイル (mdas.properties)	57
	MDAS クライアント設定ファイル (mdaclient.properties)	61
7.7	MDAS プロパティおよびメトリクス	62
	プロパティページ[プロパティページ]	62
	[メトリクス] ページ	63
8	データソース接続	64
8.1	OLAP データソース接続の作成	64
	データソースシステムの新規接続オブジェクトを作成する	65
	キューブまたはクエリの新規接続オブジェクトを作成する	66
	キューブまたはクエリの検索	66
	接続オブジェクトをコピーする	68
	[データソースを開く] ダイアログボックスでタブビューを変更する	69
	認証	69
8.2	接続設定を変更する	71
	接続設定を変更する	71
8.3	接続の削除	72
	接続を削除する	73
8.4	別のフォルダへの接続の移動	73
	接続オブジェクトを移動する	73
8.5	データソース接続設定	73
	SAP Business Warehouse データソースの接続設定	74
	Microsoft Analysis Services データソースの接続設定	75
	SAP BusinessObjects Profitability and Cost Management データソースの接続設定	76
	SAP BusinessObjects Extended Analytics データソースの接続設定	77
	SAP BusinessObjects Planning and Consolidation データソースの接続設定	77
	SAP HANA データソースの接続設定	78
	SAP HANA HTTP の接続設定	80
	Teradata データソースの接続設定	82
	Oracle Essbase データソースの接続設定	83
	Oracle OLAP データ ソースの接続設定	83
8.6	Analysis データソース接続の管理	84
	Analysis データソース接続のタイトルおよび説明の編集	84
	データソース接続を使用するワークスペースの一覧の表示	85
	Analysis データソース接続へのアクセス権の変更	85
	Analysis データソース接続の置換	86
8.7	レポート間インタフェースの接続の設定	87
	レポート間インタフェースの SAP BW クエリターゲットの有効化	87
	RRI のシングルサインオンの有効化	88
9	ワークスペースの管理	89
9.1	概要	89

9.2	Analysis ワークスペースのタイトル、説明、およびキーワードの編集.	89
	CMC で Analysis ワークスペースのタイトル、説明、およびキーワードを編集する.	89
	BI 起動パッドで Analysis ワークスペースのタイトル、説明、およびキーワードを編集する.	90
9.3	ワークスペースとリンクした接続の一覧の表示.	90
	ワークスペースとリンクした接続オブジェクトの一覧を表示する.	90
10	ワークスペースの共有.	91
10.1	OpenDocument URL を使用したワークスペースの共有.	91
	パラメータ付き OpenDocument URL を使用したプロンプト値の設定.	91
	パラメータ付き OpenDocument URL の作成.	91
11	スケーリングとパフォーマンス.	93
11.1	MDAS インスタンスのクラスタ化.	93
11.2	負荷分散.	93
11.3	パフォーマンスの最適化.	93
11.4	Essbase 11 データソースに対するスケーラビリティを確保するための Analysis の設定.	94
	使用可能なエフェメラルポートの増加.	94
	TIME_WAIT 状態の削減.	95
	接続再試行回数の増加.	95
12	モニタリングとロギング.	96
12.1	監査.	96
12.2	トレースログ[トレースログ].	96
12.3	SAP BW サーバで Analysis の統計を有効にする.	97
12.4	Analysis ワークスペースによって使用される接続、キューブ、およびクエリの識別.	98
13	Microsoft Analysis Services の考慮事項.	99
13.1	MSAS 接続用の IIS 設定.	99
	必要なファイルのコピー.	99
	アプリケーションプールの作成.	100
	仮想ディレクトリの作成.	100
	セキュリティの設定.	100
	Web サービス拡張の設定.	101
13.2	Analysis, edition for OLAP および Analysis Services のセキュリティ.	101
	Analysis Services のロールセキュリティ.	101
	より詳しい情報の検索.	102
13.3	リレーショナルデータのドリルスルーを設定する.	103
14	Analysis へのワークスペースの変換.	104
14.1	Voyager から Analysis, edition for OLAP へのワークスペースの変換.	104
15	ワークスペースの翻訳.	105
15.1	翻訳のための Analysis ワークスペースの準備.	105

1 ドキュメント履歴

下の表は、最も重要なドキュメント変更の概要です。

バージョン	日付	説明
SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP 4.3	2020 年 4 月	認証 [69 ページ] に OLAP データソース接続の作成 [64 ページ] 認証情報マッピングの SAP HANA HTTP データプロバイダに関する情報が追加されました。
SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP 4.3 SP2	2021 年 12 月	新規トピック「 認可サーバの設定 」が追加されました。

2 SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP の概要

2.1 Analysis, edition for OLAP のコンポーネント

SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP は、組織内のビジネスアナリストが組織の多次元データの分析に使用できるクエリおよび分析ツールです。ユーザは、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム ("BI プラットフォーム") の BI 起動パッドから Analysis にアクセスしてから、BI プラットフォームリポジトリで分析ワークスペースを作成、保存、および共有します。ワークスペースがリポジトリに保存されると、他のアナリストまたはビジネスユーザは任意の Web 接続を通じてそれらの分析を操作できます。

Analysis 管理者は、Multi-Dimensional Analysis Service (MDAS) の設定および管理、アクセス権の管理、OLAP データソースへの接続のセットアップ、BI プラットフォームリポジトリ内のワークスペースやデータソースオブジェクトの管理、およびその他の多くの管理タスクを実行します。

SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP は、以下のコンポーネントで構成されます。

- [Analysis, edition for OLAP のコンポーネント \[7 ページ\]](#)
- [Analysis Multi-Dimensional Analysis Service \[7 ページ\]](#)

① 注記

SAP BusinessObjects Analysis, edition for Microsoft Office は、SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP と密接に関連していますが、管理者ガイドなどの独自のドキュメンテーションがあります。

2.1.1 Analysis クライアント

Analysis クライアントアプリケーションは、SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP のエンドユーザコンポーネントです。SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームと一緒にインストールされ、BI 起動パッドからアクセスします。

データアナリストは Analysis クライアントアプリケーションを使用して、データ分析作業を実行し、その分析を BI プラットフォームに保存します。

ユーザはインターネット接続、Web ブラウザソフトウェア、および必要な権限があれば、BI プラットフォームシステムにアクセスして、Analysis ワークスペースを作成または表示できます。

2.1.2 Analysis Multi-Dimensional Analysis Service

Analysis には、Multi-Dimensional Analysis Service (MDAS) という Java BI プラットフォームサービスが含まれています。MDAS は SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームと一緒にインストールされ、BI プラットフォームセントラル管理コンソール (CMC) で管理されます。

MDAS は Analysis クライアントからの分析要求を処理し、OLAP サーバから OLAP データを取得し、情報のフォーマット化、フィルタ処理、強調表示をデータに追加して、処理済みデータをクライアントアプリケーションに戻して表示します。

MDAS は Adaptive Processing Server (APS) 内のサービスです。APS はセントラル管理コンソール (CMC) で設定および管理できます。APS および CMC の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

2.2 このガイドについて

2.2.1 ドキュメンテーション

ドキュメンテーションは、次のガイドおよびオンラインヘルプ情報から構成されます。

SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP ユーザガイド

このガイドには、Analysis を使用するために必要な概念情報、手順、および参考資料が含まれています。

SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP オンラインヘルプ

オンラインヘルプは、Analysis の日常業務に対する迅速な回答を提供できるように最適化されます。

SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP 管理者ガイド

このガイドでは、システム管理者が Analysis をインストール、構成、および管理する際に役立つ詳細情報について説明します。

この管理者ガイドは、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドおよび *SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォームインストールガイドの補足資料で、Analysis インストールの管理についての情報を提供します。BI プラットフォームの各種ガイドの情報は、Multi-Dimensional Analysis Service を含め、すべての SAP BusinessObjects サーバおよびサービスに適用されます。このガイドで必要な情報が見つからない場合は、BI プラットフォームガイドを参照してください。

BI プラットフォームコンポーネントおよびインストール手順の説明、および Analysis のインストール手順については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォームインストールガイドおよび *SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

パフォーマンス最適化の詳細については、*SAP BusinessObjects BI Sizing Companion Guide* を参照してください。

① 注記

このガイドでは、"UNIX" という用語は、UNIX 関連のプラットフォームの総称として使用しています。

① 注記

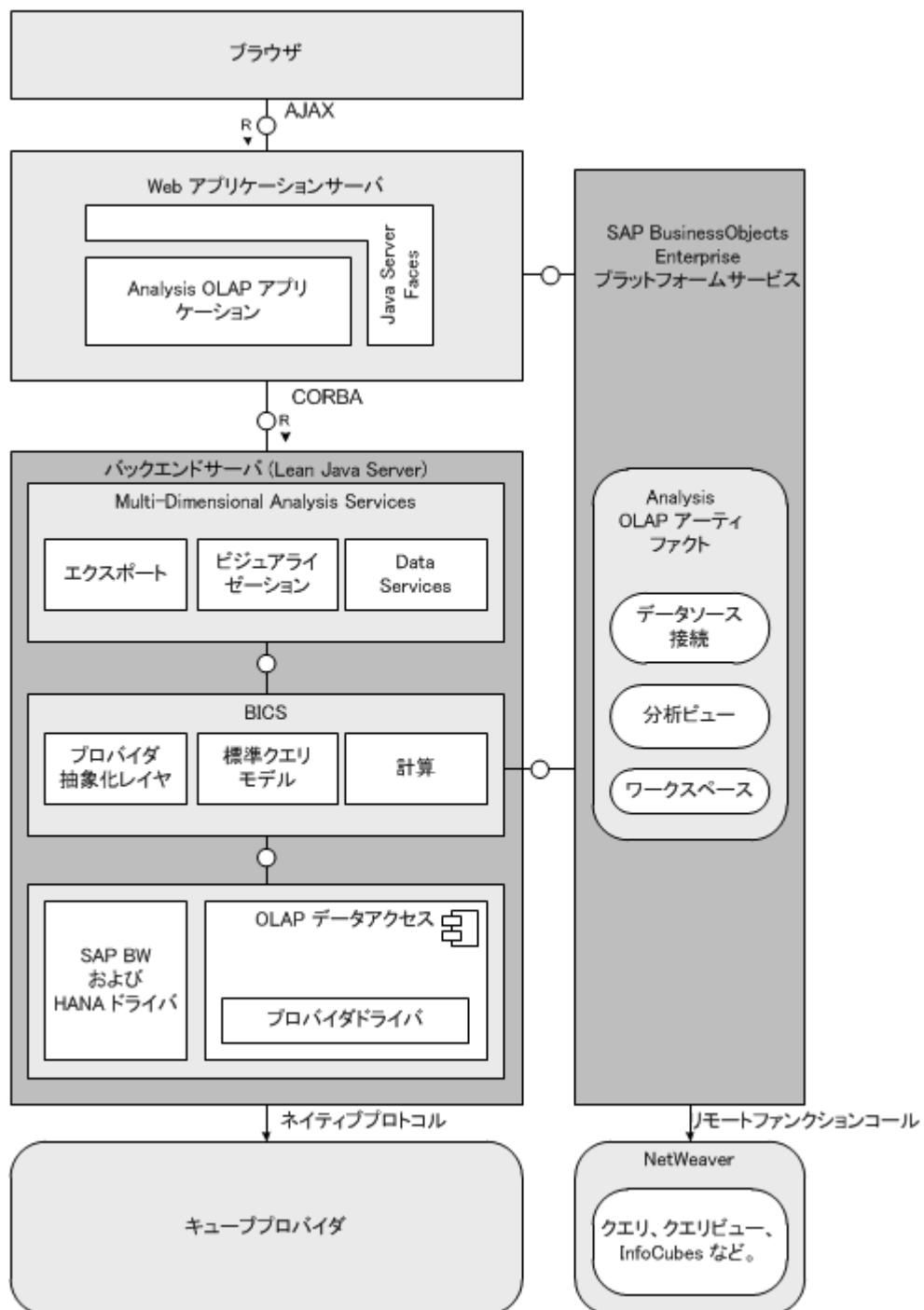
SAP BusinessObjects Analysis, edition for Microsoft Office は、SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP と密接に関連していますが、管理者ガイドなどの独自のドキュメンテーションがあります。

2.2.2 このガイドの対象読者

このガイドは、システム管理者を対象としています。SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP および SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームを管理するには管理者権限が必要です。

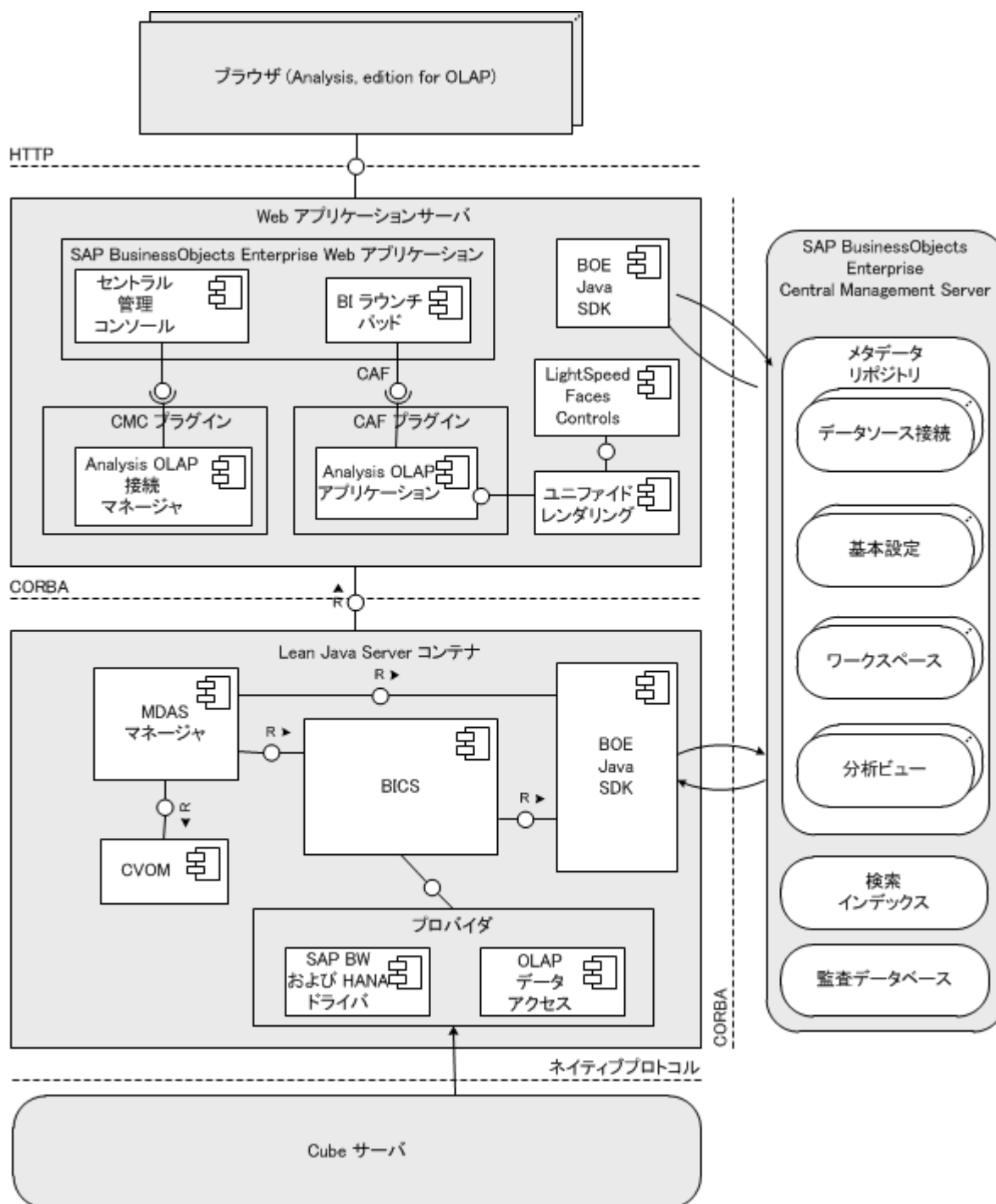
3 アーキテクチャ

3.1 Analysis アーキテクチャ図



3.2 SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームデプロイメントモデル

SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP は、より広範な BI プラットフォームアーキテクチャに、サーバレベルおよびデータベースレベルでその他の BI プラットフォームサーバに接続するクライアントサーバセットアップとして組み込まれます。



3.3 Multi-Dimensional Analysis Service

Multi-Dimensional Analysis Service は、BI プラットフォームと完全統合されています。他の BI プラットフォーム サーバおよびサービスと同様、Central Management Server (CMS) に登録されます。登録すると、Analysis Web クライアントで使用することができます。

MDAS は、多次元の (OLAP) データにアクセスするための拡張可能で効率的なフレームワークを備えた Analysis, edition for OLAP などの、BI プラットフォームクライアントアプリケーションを提供します。これは多次元データにアクセスできるだけでなく、未処理のデータをさまざまな XML パッケージに変換し、リクエストしたクライアントアプリケーションはそれを固有のプレゼンテーション形式 (Excel スプレッドシート、PDF、または Analysis のクロスタブおよびチャートなど) で表示します。

3.3.1 サーバフェールオーバー

多数のユーザが利用できるように、または、何らかの理由で MDAS に障害が発生した場合に冗長性を提供できるように、複数の MDAS インスタンスを実行することができます。MDAS に障害が発生すると、障害が発生した MDAS のユーザは自動的に別の使用可能な MDAS に移動します。可能な場合、失敗したユーザセッションは修復され、他の MDAS に復元されます。アクションが完了する前にサーバに障害が発生し、セッションが新しい MDAS に移動されると、ユーザは最後のアクションをやり直す必要があります。

MDAS で障害が発生し、他の MDAS サービスに障害が発生した MDAS からのユーザセッションを受け入れる十分な残余能力がない場合、障害が発生したワークスペースは BI プラットフォームの受信ボックスフォルダに自動保存され、これらのユーザには通知が送信されます。ユーザは後でワークスペースを再ロードし、分析を続行できます。

4 インストールと設定

4.1 管理ツール

4.1.1 セントラル管理コンソール(CMC)

セントラル管理コンソール (CMC) とは、Analysis のデータソースおよびワークスペース、ユーザアカウント、アクセス権、フォルダ、およびサーバ設定を管理する Web ベースの管理ツールです。CMC を使用して、すべての MDAS 管理タスクをすることもできます。CMC にアクセスするためには、BI プラットフォーム管理者である必要があります。

4.1.2 セントラル設定マネージャ (CCM)

セントラル設定マネージャ (CCM) とは、Windows 上で SAP BusinessObjects 製品のサーバの設定を行うサーバ管理ツールです。Analysis では、CCM を使用して Server Intelligence Agent (SIA) を起動および停止します。他のすべての管理タスクについては、セントラル管理コンソールを使用します。

関連情報

[Server Intelligence Agent の起動と停止 \[55 ページ\]](#)

[セントラル管理コンソール\(CMC\) \[13 ページ\]](#)

4.2 インストールに関する注意事項

Analysis, edition for OLAP は SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム製品スイートの一部としてインストールされます。Analysis, edition for OLAP など、その製品スイートのインストールの詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォームインストールガイドを参照してください。

Analysis でサポートされるプラットフォームの詳細については、製品出荷マトリクスを参照してください。このドキュメントへのリンクは、Analysis の SAP Help Portal ページ (<http://help.sap.com/boalapl41>) の追加情報セクションで提供されています。

Adaptive Processing Server インスタンスは、インストール中に自動的に作成されます。本稼働環境にデプロイする場合の推奨デプロイメント方法は、MDAS、監査、モニタリングサービスのみを含む別の Adaptive Processing Server インスタンスを作成するという方法です。詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

SAP HANA データソースへの接続を作成できる SAP HANA クライアントは、BI プラットフォームのインストール時に自動的にインストールされます。

Microsoft Analysis Services データソースに接続するための IIS の設定の詳細については、[MSAS 接続用の IIS 設定 \[99 ページ\]](#)を参照してください。

Essbase データソースに接続するための BI プラットフォームの設定の詳細については、[Essbase OLAP 接続のために BI プラットフォームを設定する \[17 ページ\]](#)を参照してください。

① 注記

Analysis での作業を開始する前に、少なくともデータソースオブジェクトを1つ作成する必要があります。Analysis データソースオブジェクト作成の詳細については、[OLAP データソース接続の作成 \[64 ページ\]](#)を参照してください。

① 注記

Analysis をインストールしたら、`fonts.xml` ファイルを設定してチャートを正しく表示できるようにする必要があります。この操作方法に関する詳しい説明は、[インストール後のフォントの設定 \[15 ページ\]](#)を参照してください。

① 注記

Web アプリケーションサーバの設定も必要になる場合があります。詳細については、[Web アプリケーションサーバの設定 \[14 ページ\]](#)を参照してください。

4.3 データソース

Analysis では、SAP BW または Microsoft Analysis Services など、サポートされている OLAP データソースに接続する必要があります。そのため、少なくともデータソースオブジェクトを1つ作成し、アナリストが Analysis を使用してデータを分析できるようにしておく必要があります。

4.4 Web アプリケーションサーバの設定

サポートされている Web アプリケーションサーバでは、以下の例外を除き、Analysis を正常に機能させるための特別な設定は不要です。

- Sun Java System Application Server 9.1
追加オプションとして `-Xmx1024m -XX:MaxPermSize=256m` を JVM に追加します。
- JBoss Application Server 4.2.3 & 5.0 GA
`run.conf` ファイルに以下の行を追加します。
`JAVA_OPTS="-server -Xmx1024m -XX:MaxPermSize=512m
-Dsun.rmi.dgc.client.gcInterval=3600000 -Dsun.rmi.dgc.server.gcInterval=3600000"`

4.5 インストール後のフォントの設定

日本語などの Unicode フォントを使用する必要がある場合、または UNIX プラットフォームを実行している場合、チャートおよびエクスポートされた PDF ファイルを正しく表示するには、手動で変更する必要があります。使用するフォントを変更するには、fonts.xml を編集します。

fonts.xml ファイルは以下の場所にあります。

- Windows の場合:
`<BOE_INSTALL_DIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI
4.0%java%pjs%services%MDAS%resources%com%businessobjects%multidimensional%servic
es%`
ここで、`<BOE_INSTALL_DIR>` は、インストールディレクトリのファイルパスです (デフォルトでは
`C:%Program Files (x86)%SAP BusinessObjects%`)。
- UNIX の場合:
`<BOE_INSTALL_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/pjs/services/MDAS/resources/com/
businessobjects/multidimensional/services/`

新しいフォント定義を fonts.xml に追加します。フォント定義で、以下のプロパティを指定します。

プロパティ	説明
name	フォントの名前。この名前は、MDAS が動作しているオペレーティングシステムのフォントパスにあるフォントの名前と一致している必要があります。
caption	フォントのキャプション。チャートの [プロパティ] パネルの [フォント] リストに表示する名前を入力します。
resourceURL	<p>フォントの URL。</p> <p>非 TrueType コレクションフォントの場合、URL は以下の形式になります。</p> <p><code>file:///<ファイルシステム上のフォントのパス名></code></p> <p>TrueType コレクションフォントファイルには、複数のフォントが含まれており、それぞれがゼロを基準とするインデックス番号によって識別されます。TrueType コレクションフォントの場合、resourceURL に適切なインデックス番号を追加する必要があります。URL は以下の形式になります。</p> <p><code>file:///<ファイルシステム上のフォントのパス名>,<インデックス番号></code></p> <p>TrueType コレクションフォントの resourceURL の例を以下に示します。</p> <ul style="list-style-type: none">Windows の MingLiU: <code>WINDOWS/Fonts/ mingliu.ttc,0</code>Windows の PMingLiU: <code>WINDOWS/Fonts/ mingliu.ttc,1</code>

プロパティ	説明
type	フォントの種類。たとえば、TrueType または TrueTypeCollection です。
locale	このフォントが割り当てられるロケール。

fonts.xml ファイルでフォントが指定されていないすべてのロケールに対してデフォルトとして新しいフォントを設定するには、フォント名に universalFontName 属性を設定します。

Windows ファイルリストの例を以下に示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!--
  MDAS Font Configuration
  Replace paths to font with the correct path for the installed system
  example of some locale mapping
  =====
  English   - "en"
  French    - "fr"
  German    - "de"
  Italian   - "it"
  Japanese  - "ja"
  Korean    - "ko"
  Chinese   - "zh"
-->
<fon:ServerFonts
  universalFontName="Arial"
  xmlns:fon="http://www.businessobjects.com/xml/schema/analysis/
multidimensional/services/fonts/server">
  <fon:Font
    name="Arial"
    caption="Arial"
    resourceUrl="file://C:/WINDOWS/Fonts/ARIAL.TTF"
    type="TrueType"
    locale="en" />
  <fon:Font
    name="MS Mincho"
    caption="MS Mincho"
    resourceUrl="file://C:/WINDOWS/Fonts/MSMINCHO.TTC,0"
    type="TrueTypeCollection"
    locale="ja" />
  <fon:Font
    name="MingLiU"
    caption="MingLiU"
    resourceUrl="file://C:/WINDOWS/Fonts/mingliu.ttc,0"
    type="TrueTypeCollection"
    locale="zh" />
  <fon:Font
    name="Batang"
    caption="Batang"
    resourceUrl="file://C:/WINDOWS/Fonts/batang.ttc,0"
    type="TrueTypeCollection"
    locale="ko" />
</fon:ServerFonts>
```

→ ヒント

チャートの表示に使用されるフォントが目的のフォントと一致しない場合、fonts.xml ファイルの name プロパティが正しいことを確認してください。このフォントが、MDAS が動作しているオペレーティングシステムのフォントパスにあるフォントと一致しない場合、チャートの表示には内部のデフォルトフォントが使用されます。

→ ヒント

PDF ドキュメントの生成に使用されるフォントが目的のフォントと一致しない場合、`fonts.xml` ファイルの `resourceURL` プロパティが正しいことを確認してください。URL が無効な場合、PDF ドキュメントの生成には内部のデフォルトフォントが使用されます。URL が無効であることを確認するには、MDAS のログで `MalformedURLException` または `FileNotFoundException` を確認します。

4.6 Essbase OLAP 接続のために BI プラットフォームを設定する

以下の手順を実行するには、Oracle Essbase クライアントのインストールディレクトリにアクセスできる必要があります。手順の完了後は、クライアントが Essbase サーバに接続する必要はありません。

1. `<ORACLE_ESSBASE_DIR>%JavaAPI%lib` に移動します。ここで、`<ORACLE_ESSBASE_DIR>` は、Oracle Essbase クライアントインストールの場所です (例: Windows の場合は、`C:%Hyperion%products\Essbase\EssbaseClient%JavaAPI%lib%`)。
2. Essbase インストールの JAR ファイルをコピーします。ファイルは、Essbase のバージョンによって異なります。ファイル名については、Oracle Essbase のドキュメントを参照してください。

たとえば、Essbase バージョン 11.1.1.0 の場合は、以下の JAR ファイルをコピーします。

- `cp1d14.jar`
- `ess_es_server.jar`
- `ess_japi.jar`

Essbase バージョン 11.1.2.0 の場合は、以下の JAR ファイルをコピーします。

- `cp1d.jar`
- `ojd1.jar`
- `ess_es_server.jar`
- `ess_japi.jar`
- `log4.jar`

① 注記

`log4.jar` ファイルは、SAP BusinessObjects Business Intelligence Suite でも使用されます。異なるバージョン間の競合を防ぐために、BI プラットフォームディレクトリ (例: SAP BusinessObjects BI プラットフォームのデフォルトインストールの場合は、`C:%Program Files (x86)%SAP BusinessObjects%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%java%lib%external`) からファイルをコピーすることをお勧めします。

3. Multi-Dimensional Analysis Service のインスタンスをホストするそれぞれのマシンの以下のフォルダに JAR ファイルを貼り付けます。`<BOE_INSTALL_DIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%java%pjs%services%MDAS%lib%mdas-external%`。ここで、`<BOE_INSTALL_DIR>` はインストールディレクトリのファイルパスです (例: `C:%Program Files (x86)%SAP BusinessObjects%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0`)。
4. セントラル管理コンソールを開いて、MDAS のインスタンスをホストするそれぞれの Adaptive Processing Server を再起動します。

OLAP 接続を CMC で作成している場合は、`[Oracle Essbase]` が `[プロバイダ]` リストに表示されます。

関連情報

[OLAP データソース接続の作成 \[64 ページ\]](#)

4.7 ファイアウォールポートの使用

次の表に Analysis が使用するサーバとポート番号を示します。

サーバ	ポートの要件	デフォルト値
CMS	CMS ネームサーバポート	6400
Multi-Dimensional Analysis Service (MDAS)	MDAS リクエストポート	自動割り当て
Input File Repository Server(FRS)	Input File Repository Server(FRS)リクエストポート	自動割り当て

詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの「BI プラットフォームのセキュリティ保護」の節を参照してください。

4.8 Analysis サーバデプロイメントの複製

Multi-Dimensional Analysis Service は、Adaptive Processing Server (APS) でホストされます。既存の APS を複製、または MDAS およびその他のサービスを含む新しい APS を作成できます。分散 MDAS デプロイメント全体を複製することもできます。たとえば、テスト環境を設定した後、実稼動環境に移行する場合に便利です。

Analysis サーバおよびデプロイメントの複製方法の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの「サーバの管理」の節を参照してください。

4.9 階層メタデータの事前ロード設定

`mdas.properties` ファイルの `multidimensional.services.preload.metadata` パラメータで、SAP BW または SAP HANA の階層のメタデータを事前ロードするかどうかを指定できます。

デフォルトでは、このパラメータは `true` に設定されており、ユーザが Analysis のデータソースに接続したときにメタデータが事前ロードされます。このパラメータ値を `false` に設定すると、ユーザがそのデータを必要とするワークフローを実行するまで、Analysis でメタデータのロードが遅延されます。これを遅延ロードともいいます。この設定により、多くのディメンションや階層を含むデータソースに接続する場合の Analysis のパフォーマンスが向上することがあります。

ただし、このパラメータを `false` に設定すると、[交換リスト](#)および[次をピボットリスト](#)にも影響します。[交換リスト](#)および[次をピボットリスト](#)で階層を選択できるようにするには、メタデータエクスプローラでその階層の親ディメンションを展開する必要があります。

関連情報

[MDAS サーバの設定ファイル \[56 ページ\]](#)

4.10 プロンプト確認

mdas.properties ファイルの multidimensional.services.variable.validation.enabled プロパティで、SAP BW および SAP HANA のプロンプト値の自動確認を有効または無効にすることができます。

mdas.properties ファイルは以下の場所にあります。

- Windows の場合:
`<BOE_INSTALL_DIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%java%pjs%services%MDAS%resources%com%businessobjects%multidimensional%services%`
ここで、<BOE_INSTALL_DIR> は、インストールディレクトリのファイルパスです (デフォルトでは C:%Program Files (x86)%SAP BusinessObjects%)。
- UNIX の場合:
`<BOE_INSTALL_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/pjs/services/MDAS/resources/com/businessobjects/multidimensional/services/`

デフォルトでは、multidimensional.services.variable.validation.enabled プロパティは true に設定されています。この設定の場合、[プロンプト] ダイアログボックスで指定されたプロンプト値は、ユーザがこの値を入力したときに自動的に確認されます。プロンプト値が無効な場合、赤色の X アイコンがプロンプトの横に表示され、ユーザはデータソースに接続できません。ただし、プロンプトの自動確認が、データソース接続時のパフォーマンス低下の原因になることがあります。

プロンプト値の確認を無効にするには、mdas.properties ファイルを開いて、このプロパティを false に設定します。

```
multidimensional.services.variable.validation.enabled=false
```

この設定により、プロンプトを使用するデータソース接続時のパフォーマンスが向上する可能性があります。この設定の場合でも、プロンプト値は、ユーザが [OK] をクリックして値を送信するときに確認されます。また、[確認] ボタンが [プロンプト] ダイアログボックスに表示されます。必要に応じてこのボタンを使用して、[OK] をクリックする前にすべてのプロンプト値を確認することもできます。

関連情報

[MDAS サーバの設定ファイル \[56 ページ\]](#)

4.11 Quirks モードでのワークスペースの表示

SAP Enterprise Portal に埋め込まれている Analysis ワークスペースを、Internet Explorer 9 以上を使用して表示する必要がある場合は、Analysis, edition for OLAP を Quirks ドキュメントモードで実行するように設定する必要があります。

Quirks モードは、特定の Web ページを表示するために Internet Explorer で使用される方法です。このリリースでは、Analysis はデフォルトで標準モードで実行され、標準モードでは HTML5 標準に準拠します。

ただし、SAP Enterprise Portal は Quirks モードを使用します。Internet Explorer 9 以上では、Quirks モードと標準モードを同じウィンドウで使うことはできません。SAP Enterprise Portal に埋め込まれている Analysis ワークスペースを Internet Explorer 9 以上で表示するには、Analysis を Quirks モードで実行するように設定する必要があります。

次の 2 つのうちいずれかの方法により、Analysis ワークスペースを Quirks モードで実行することができます。

- すべてのワークスペースを Quirks モードで実行するように設定: `opendoc.quirks.mode` グローバルプロパティを `true` に設定すると、すべての Analysis ワークスペースが Quirks モードで表示されます。
- 個々のワークスペースを Quirks モードで実行するように設定: `opendoc.quirks.mode` グローバルプロパティは `false` に設定する必要があります。 `quirks=true&` パラメータを、個々のワークスペースの OpenDocument リンクに追加できます。ユーザがこのリンクを使用してワークスペースを表示すると、ワークスペースは Quirks モードで開きます。それ以外の場合、ワークスペースは標準モードで開きます。

4.11.1 すべてのワークスペースを Quirks モードで実行するように設定する

`opendoc.quirks.mode` プロパティでは、すべての Analysis ワークスペースを Quirks モードで実行するように設定することができます。

1. セントラル設定マネージャを開いて、Tomcat Web アプリケーションサーバを停止します。
2. BI プラットフォームサーバで、`mdaclient.properties` 設定ファイルを開きます。
デフォルトでは、このファイルは以下の場所にあります。

Windows の場合: `C:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\tomcat\webapps\BOE\WEB-INF\config\default`

UNIX の場合: `<BOE_INSTALL_DIR>/tomcat/webapps/BOE/WEB-INF/config/default`。ここで、`<BOE_INSTALL_DIR>` はインストールディレクトリのファイルパスです。

3. `opendoc.quirks.mode` プロパティを `true` に設定します。

```
opendoc.quirks.mode=true
```

4. `mdaclient.properties` ファイルを保存して閉じます。
5. セントラル設定マネージャで、Tomcat Web アプリケーションサーバを起動します。

この変更後、ユーザは SAP Enterprise Portal または Quirks モードで実行される別のアプリケーションに埋め込まれているすべての Analysis ワークスペースを表示できるようになります。

ユーザが別のウィンドウやタブ、または標準モードで実行されているアプリケーションで Analysis ワークスペースを開くと、以下のメッセージが表示されます。

このアプリケーションは重大なレンダリングエラーによって停止されました。IE 互換表示はサポートされていません (SAP ノート 1586993)。

[無視] をクリックすると、ワークスペースを正常に表示することができます。

4.11.2 個々のワークスペースを Quirks モードで実行するように設定する

quirks=true& パラメータを Analysis ワークスペースの OpenDocument リンクに追加すると、そのリンクを使用して、SAP Enterprise Portal などの Quirks モードで動作するアプリケーションにワークスペースを埋め込むことができます。

1. SAP Enterprise Portal の [コンテンツ管理](#) タブで、適切なワークスペースの iView テンプレートを開きます。
2. [カテゴリの表示一覧](#) で、[SAP BusinessObjects](#) を選択します。
3. [アプリケーションパラメータ](#) 行の [値列](#) に、quirks=true& と入力します。
4. iView テンプレートを保存して閉じます。

4.12 エクスポートの制限

Excel、CSV、および PDF への大規模なエクスポートを回避するために、デフォルトのエクスポートのデータ値の制限は 100,000 に設定されています。

デフォルトの制限で不十分な場合、MDAS で使用されるメモリ量に応じて、この値を安全に増やすことができます。値を変更するには、mdas.properties ファイルの以下のプロパティを変更します。

```
multidimensional.services.export.cells.limit=100000
```

mdas.properties ファイルは以下の場所にあります。

- Windows の場合:
`<BOE_INSTALL_DIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%java%pjs%services%MDAS%resources%com%businessobjects%multidimensional%services%`
ここで、`<BOE_INSTALL_DIR>` は、インストールディレクトリのファイルパスです (デフォルトでは `C:%Program Files (x86)%SAP BusinessObjects%`)。
- UNIX の場合:
`<BOE_INSTALL_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/pjs/services/MDAS/resources/com/businessobjects/multidimensional/services/`

4.13 メンバーセレクトアのキャッシュ制限

Analysis で操作する値の一覧が大規模な場合に、[\[メンバーセレクトア\]](#) ダイアログボックスが開いていると、パフォーマンスが低下することがあります。使用する値の一覧が大規模な場合のパフォーマンスを向上させるため

に、mdas.properties ファイルの multidimensional.services.member.selector.cache.limit プロパティの設定値を大きくすることができます。

```
multidimensional.services.member.selector.cache.limit=2000
```

mdas.properties ファイルは以下の場所にあります。

- Windows の場合:
`<BOE_INSTALL_DIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%java%pjs%services%MDAS%resources%com%businessobjects%multidimensional%services%`
ここで、`<BOE_INSTALL_DIR>` は、インストールディレクトリのファイルパスです (デフォルトでは `C:%Program Files (x86)%SAP BusinessObjects%`)。
- UNIX の場合:
`<BOE_INSTALL_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/pjs/services/MDAS/resources/com/businessobjects/multidimensional/services/`

デフォルトでは、multidimensional.services.member.selector.cache.limit プロパティは 2000 に設定されています。この設定を使用すると、[\[メンバーセレクト\]](#) ダイアログボックスのメンバー数が 2000 以下のとき、メンバーが MDAS にキャッシュされ、パフォーマンスが向上します。この設定値を大きくして、キャッシュ可能なメンバー数を増やすことができます。このプロパティはフラット特性にのみ適用されます。

① 注記

multidimensional.services.member.selector.cache.limit 設定は、セントラル管理コンソールの [\[フィルタ処理時に返される最大メンバー数\]](#) 設定を超えることはできません。最高のパフォーマンスを得るため、[\[フィルタ処理時に返される最大メンバー数\]](#) 設定を 5000 以下に指定することをお勧めします。

関連情報

[MDAS 設定ファイル \(mdas.properties\) \[57 ページ\]](#)

4.14 セッションのタイムアウト設定

クライアント側のタイムアウト設定

Analysis クライアントは Web サーバコンテナ内で実行される BI ラウンチパッド内で実行されるため、常に Web サーバのタイムアウトは BI ラウンチパッドのタイムアウト以上になるようにしてください。

web.xml ファイルで、以下の XML ブロックを検索し、必要に応じてタイムアウト値 (分単位) を変更します。

```
<session-config>
<session-timeout>20</session-timeout>
</session-config>
```

変更は、古い Web サーバの作業ディレクトリを削除し、Web サーバを再起動した後に有効になります。

デプロイメントで Tomcat Web サーバを使用しているとする、クライアント側のタイムアウト設定は以下のファイルに含まれています。

- Windows の場合:
 - Web サーバ: `<BOE_INSTALL_DIR>%tomcat%conf\web.xml`
セッションのタイムアウト設定は、Default Session Configuration セクションにあります。
 - BI ラUNCHパッド: `<BOE_INSTALL_DIR>%tomcat%webapps\BOE\WEB-INF\web.xml`
ここで、`<BOE_INSTALL_DIR>` は、インストールディレクトリのファイルパスです (デフォルトでは `C:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\`)。
- UNIX の場合:
 - Web サーバ: `<BOE_INSTALL_DIR>/sap_bobj/tomcat/conf/web.xml`
セッションのタイムアウト設定は、Default Session Configuration セクションにあります。
 - BI ラUNCHパッド: `<BOE_INSTALL_DIR>/sap_bobj/tomcat/webapps/BOE/WEB-INF/web.xml`

サーバ側のタイムアウト設定

サーバ側のタイムアウト値が、クライアント側のタイムアウト値よりも大きいことを確認します。

サーバ側のタイムアウト設定は以下のファイルに含まれています。

- Windows の場合:
`<BOE_INSTALL_DIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%java\pjs\services\MDAS\resources\com\businessobjects\multidimensional\services\mdas.properties`
ここで、`<BOE_INSTALL_DIR>` は、インストールディレクトリのファイルパスです (デフォルトでは `C:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\`)。
- UNIX の場合:
`<BOE_INSTALL_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/pjs/services/MDAS/resources/com/businessobjects/multidimensional/services/mdas.properties`

4.15 アクセシビリティ

Analysis には、視覚障害または運動障害を持つユーザのためのアクセシビリティモードがあります。アクセシビリティモードをオンにする方法の詳細については、*Analysis ユーザガイド*を参照してください。

4.16 必要な SAP ノート

SAP BW データソースを使用する際の更新

SAP BW データソースを使用する際のパフォーマンスを最大化するには、SAP ノート 1498007 を参照してください。ここには、システムに必要な更新の詳細が示されています。これらの更新はいくつかの既知の問題を解決すると同時に、Analysis クライアントにおける大文字小文字を区別しない検索など、新しい機能を追加します。

【レベルの表示】と【お気に入りフィルタの作成】

パフォーマンス上の理由により、“レベルの表示”および“お気に入りフィルタの作成”は、BW サーバ 7.0.1 以上でのみ使用可能です。

SAP BW 7.0.1 SP3 または SP4 については、SAP ノート 1436426 が必要となります。

4.17 Oracle OLAP Data Provider for SAP BusinessObjects Business Intelligence

Oracle OLAP Data Provider は、Analysis を Oracle OLAP データベースに直接接続するため、多次元データの強力なクエリおよび分析を実行できます。この中間層のデータプロバイダは、Analysis からの XMLA 要求を処理し、Oracle OLAP データベースからデータを取得します。

次の節には、Windows または Linux オペレーティングシステムおよびサポートされているいずれかの Web アプリケーションサーバ (JBoss Application Server または Apache Tomcat) を実しているコンピュータで Oracle OLAP Data Provider をインストールおよび設定する方法について記載されています。

プロバイダをインストールして、BI プラットフォームの Oracle OLAP データソースを有効にしたら、セントラル管理コンソールで Oracle OLAP データソースへの接続を作成できます。

接続する Oracle OLAP データベースのインストール、設定、およびトラブルシューティングの詳細については、<http://www.simba.com/resources/product-documentation> にある *Simba XMLA for Oracle OLAP: Administrator Guide* を参照してください。

関連情報

[Oracle OLAP データ ソースの接続設定 \[83 ページ\]](#)

4.17.1 Oracle OLAP Data Provider のソフトウェア要件

Oracle OLAP Data Provider をインストールするには、次のソフトウェアが必要です。

- Windows Server 2008 R2 Service Pack 1 または SUSE Linux Enterprise Server 11 (x86_64) Service Pack 2
- Oracle Instant Client ODBC Driver バージョン 11.2 (64 ビット)
- Java SE Development Kit (JDK) 6 Update 35 以降 (64 ビット)
- JBoss Application Server 7.1.1 または Apache Tomcat 7.0.37 以降

① 注記

JBoss と Tomcat のどちらも、Java Runtime Environment (JRE) の代わりに JDK をインストールする必要があります。

4.17.1.1 ODBC ドライバをインストールする

Oracle OLAP Data Provider は、Open Database Connectivity (ODBC) インタフェースを使用してデータベースと通信します。推奨ドライバは、64 ビットの Oracle Instant Client バージョン 11.2 です。

① 注記

Oracle OLAP Data Provider は 64 ビットアーキテクチャを使用するため、ODBC ドライバでも 64 ビットアーキテクチャを使用する必要があります。

1. Web ブラウザで、次の URL に移動します。

- Windows の場合: <http://www.oracle.com/technetwork/topics/winx64soft-089540.html>
- Linux の場合: <http://www.oracle.com/technetwork/topics/linuxx86-64soft-092277.html>

2. 最新バージョンの *Instant Client Package - Basic* および *Instant Client Package - ODBC* をダウンロードします。

3. *Instant Client Package - ODBC* パッケージの readme ファイルを開きます。次に、その指示に従って Oracle ODBC Instant Client をインストールします。

Windows パッケージの場合、readme ファイルは [ODBC_IC_Readme_Win.html](#) です。Linux パッケージの場合、readme ファイルは [ODBC_IC_Readme_Unix.html](#) です。

Oracle ODBC Instant Client をインストールしたら、Analysis で接続する Oracle データベースの DSN を追加して、環境変数を設定する必要があります。

unixODBC の使用については、<http://www.unixodbc.org/> を参照してください。

4.17.1.2 Oracle ODBC ドライバのデータソース名 (DSN) を作成する

Windows の場合、次の手順を実行して Oracle データベースの DSN を作成します。Linux の場合は、`odbc_update_ini.sh` ファイルを使用して DSN を作成する必要があります。詳細については、Oracle ODBC Instant Client インストールパッケージに含まれるドキュメントを参照してください。

1. [ODBC データ ソース アドミニストレータ] ダイアログボックスを開きます。たとえば、**スタート** > **コントロールパネル** > **管理ツール** > **データソース (ODBC)** をクリックします。
2. [システム DSN] タブをクリックします。
3. [追加] をクリックします。
4. [データ ソースの新規作成] ダイアログボックスで、[Oracle in instantclient_11_2] をクリックし、[完了] をクリックします。
5. [Oracle ODBC Driver Configuration] ダイアログボックスで、次の情報を入力します。
 - **データソース名**: データソースの名前を入力します。
 - **説明**: オプションで、データソースの説明を入力します。
 - **TNS サービス名**: **<host>:<port>/<SID>** と入力します。**<host>** はデータベースが接続するサービス名または IP アドレス、**<port>** はデータベースが受信待機するポート、**<SID>** はデータベースインスタンスの一意の名前です。たとえば、**192.168.100.101:1521/ORCL** や **dbhost:1521/ORCL** のようになります。または、フィールドの右側にある矢印をクリックし、適切な Oracle サーバのデータベースサービス名を選択することもできます。
 - **ユーザ ID**: Oracle データベースへのログオンに使用するユーザ名を入力します。
6. **接続テスト** をクリックします。
7. [Oracle ODBC ドライバ接続] ダイアログボックスの [パスワード] フィールドに、Oracle データベースへのログオンに使用するユーザ名のパスワードを入力します。[OK] をクリックします。
8. 接続に成功したら、[Oracle ODBC ドライバ構成] ダイアログボックスで、[OK] をクリックします。

① 注記

接続に失敗したら、指定した DSN の設定を確認します。

4.17.2 Oracle OLAP Data Provider のインストールパッケージ

Oracle OLAP Data Provider は、次の zip ファイルで提供されます。**<Version>** はプロバイダのバージョン番号です。

- Windows の場合: M4OXmlaWebService_**<Version>**_windows.zip
- Linux の場合: M4OXmlaWebService_**<Version>**_linux.zip

このアーカイブには、次のファイルが含まれています。

- M4OXmlaWebService.war
このファイルは、Web アーカイブファイル (Web アプリケーションを配布するために使用される圧縮アーカイブ) です。
- M4OXmlaWebService.war.dodeploy
このファイルは、M4OXmlaWebService.war Web アプリケーションをデプロイするように JBoss に指示する空のテキストファイルです。Web サービスを Tomcat にインストールする場合、このファイルは使用されません。
- sxo¥DatasetSchema.xml
- sxo¥DataSources.xml
- sxo¥tracesettings.conf
- Utils¥Logging¥Windows_Logging_Off.reg

- Utils¥Logging¥Windows_Logging_On.reg

4.17.2.1 JBoss を使用して Oracle OLAP Data Provider をインストールする

1. Oracle OLAP Data Provider をインストールするマシンで、JBoss インストールの deployments フォルダに移動し、そこに webapps フォルダが存在していることを確認します。たとえば、C:¥Program Files (x86)¥jboss-as-7.1.1.Final¥standalone¥deployments¥webapps などです。まだ存在していない場合は、webapps フォルダを作成します。
2. webapps フォルダで、M4OXmlaWebService.war というフォルダを作成します。
3. インストールパッケージを開き、M4OXmlaWebService.war アーカイブを抽出します。
4. M4OXmlaWebService.war アーカイブファイルの名前を M4OXmlaWebService.zip に変更し、M4OXmlaWebService.zip アーカイブのコンテンツを standalone¥deployments¥webapps¥M4OXmlaWebService.war フォルダに抽出します。
5. インストールパッケージを開き、M4OXmlaWebService.war.dodeploy ファイルを JBoss インストールの ¥standalone¥deployments¥webapps フォルダに抽出します。
6. インストールパッケージを開き、sxo フォルダとそのコンテンツを抽出します。
 - Windows の場合、コンピュータが Windows を起動するドライブのルートディレクトリ (通常は c:¥) に sxo フォルダを抽出します。
 - Linux の場合、/etc フォルダで、mdxprovider という名前のフォルダを作成し、sxo フォルダを /etc/mdxprovider に抽出します。次に、/etc/mdxprovider/sxo フォルダで、logs という名前のフォルダを作成します。

4.17.2.2 Apache Tomcat を使用して Oracle OLAP Data Provider をインストールする

1. Oracle OLAP Data Provider をインストールするマシンで、インストールパッケージを開き、M4OXmlaWebService.war アーカイブファイルを Tomcat インストールの webapps フォルダに抽出します。たとえば、C:¥Program Files (x86)¥SAP BusinessObjects¥tomcat¥webapps などです。
2. インストールパッケージを開き、sxo フォルダとそのコンテンツを抽出します。
 - Windows の場合、コンピュータが Windows を起動するドライブのルートディレクトリ (通常は c:¥) に sxo フォルダを抽出します。
 - Linux の場合、/etc フォルダで、mdxprovider という名前のフォルダを作成し、sxo フォルダを /etc/mdxprovider に抽出します。

4.17.2.3 Oracle OLAP Data Provider の既存のインストールをアップグレードする

次の手順を実行して、Oracle OLAP Data Provider をバージョン 2.0.0.1 以上から最新バージョンにアップグレードします。

1. Web サーバを停止します。
2. Oracle OLAP Data Provider をインストールした `webapps` フォルダで、次のファイルまたは存在するフォルダをすべて削除します。
 - `M4OXmlaWebService.war`
 - `M4OXmlaWebService.war.deployed`
 - `M4OXmlaWebService`
3. `sxo` フォルダの名前を `sxo_old` に変更します。
Windows の場合、このフォルダは通常 `C:\¥sxo` にあります。Linux の場合、この場所は `etc¥mdxprovider¥sxo` になります。
4. 適切な手順を実行して、最新バージョンの Oracle OLAP Data Provider をインストールします。
5. `sxo_old` フォルダの `DataSources.xml` ファイルの設定に基づいて、`sxo` フォルダの `DataSources.xml` ファイルを更新します。
この手順を実行したら、`sxo_old` フォルダを削除できます。
6. `sxo` フォルダをデフォルトの場所に抽出していない場合、`xmla.properties` ファイルを設定し直す必要があります。
7. Web サーバを開始します。

関連情報

[Web サーバおよび XMLA サービスの実行 \[33 ページ\]](#)

[JBoss を使用して Oracle OLAP Data Provider をインストールする \[27 ページ\]](#)

[Apache Tomcat を使用して Oracle OLAP Data Provider をインストールする \[27 ページ\]](#)

[DataSources.xml ファイルを設定する \[29 ページ\]](#)

[xmla.properties ファイルを設定する \[29 ページ\]](#)

4.17.3 Oracle OLAP Data Provider の設定

Oracle OLAP Data Provider for SAP BusinessObjects Business Intelligence を設定するには、いくつかの設定を指定する必要があります。

- データソース設定
- XMLA サービスのプロパティ
- 環境変数
- メモリオプション

4.17.3.1 DataSources.xml ファイルを設定する

DataSources.xml ファイルでは、Oracle OLAP Data Provider が使用するデータソース名 (DSN) を指定します。

1. テキストエディタで、sxo フォルダにある DataSources.xml ファイルを開きます。
2. <DataSourceName> 要素に、データソースの名前を入力します。
3. <DataSourceDescription> 要素に、データソースに関連する詳細情報を入力します。
4. <DataSourceInfo> 要素に、次の構文を使用してデータソースの接続文字列を入力します。

```
<DataSourceInfo>Data Source=<DataSourceName>;User  
ID=<UserID>;Password=<Password></DataSourceInfo>
```

この例の <DataSourceName> はデータプロバイダ用に作成した Oracle ODBC ドライバデータソースの名前で、<UserID> はデータベースに接続するために使用するユーザ名で、<Password> はユーザ名に対応するパスワードです。

① 注記

ユーザ ID とパスワードは、Analysis からデータベースへの接続を作成するときに指定するため、これらの認証情報を入力する必要はありません。

5. <URL> 要素に、Oracle OLAP Data Provider の仮想フォルダの URL を入力し、Web サーバがサービスのデプロイ済みファイルにアクセスする方法を指定します。たとえば、Web サーバインストールでデフォルトポートを使用して、それをデフォルトの IP アドレス 127.0.0.1 にバインドする場合、<URL>http://localhost:8080/M4OXmlaWebService/</URL> という URL を入力します。

① 注記

IP アドレスは、Web サーバの設定によって異なります。

6. DataSources.xml ファイルを保存して閉じます。

XMLA サービスが実行されているときに Oracle OLAP Data Provider を設定する場合、変更を適用するには、このサービスを停止して開始する必要があります。

関連情報

[Web サーバおよび XMLA サービスの実行 \[33 ページ\]](#)

4.17.3.2 xmla.properties ファイルを設定する

Oracle OLAP Data Provider をデフォルトの場所にインストールしない場合、xmla.properties ファイルを設定する必要があります。

1. M4OXmlaWebService.war アーカイブファイルを抽出したフォルダに移動し、Oracle OLAP Data Provider をインストールします。

2. このフォルダから、テキストエディタで
¥M40XmlaWebService.war¥WEBINF¥classes¥com¥customer¥xmla.properties ファイルを開きます。
3. DatasourcesURI プロパティを DataSourcees.xml ファイルの絶対パスに設定します。
 - Linux の場合の例: DatasourcesURI=/etc/mdxprovider/sxo/DataSourcees.xml
 - Windows の場合、Uniform Resource Identifier (URI) 構文を使用します。例: DatasourcesURI=sxo/DataSourcees.xml
4. DatasetSchemaURI プロパティを DatasetSchema.xml ファイルの絶対パスに設定します。
 - Linux の場合の例: DatasetSchemaURI=/etc/mdxprovider/sxo/DatasetSchema.xml
 - Windows の場合、URI 構文を使用します。例: DatasetSchemaURI=sxo/DatasetSchema.xml
5. xmla.properties ファイルを保存して閉じます。

4.17.3.3 環境変数の設定

Java Development Kit をインストールするフォルダ (JBoss や Tomcat がインストールされるフォルダ) を指定するには、環境変数を設定する必要があります。

→ 注意

環境変数への変更を有効にするには、オペレーティングシステムからログアウトし、ログインし直す必要があります。

4.17.3.3.1 Windows の環境変数設定

4.17.3.3.1.1 Windows で JAVA_HOME 環境変数を設定する

1. [システムプロパティ] ダイアログボックスを開きます。たとえば、**スタート** > **コントロールパネル** > **システムとセキュリティ** > **システム** をクリックし、[システムの詳細設定] をクリックします。
2. [システムのプロパティ] ダイアログボックスで、[詳細設定] タブをクリックし、[環境変数] をクリックします。
3. [システム環境変数] 領域で、JAVA_HOME 変数を設定します。
 - JAVA_HOME 変数が存在しない場合、[新規] をクリックします。[新しいシステム変数] ダイアログボックスの [変数名] フィールドに、「**JAVA_HOME**」と入力します。[変数値] フィールドに、コンピュータの Java Development Kit インストールのルートフォルダへのパスを入力します。たとえば、このパスは C:¥Program Files¥Java¥jdk1.6.0_37 のようになります。[OK] をクリックします。

① 注記

JAVA_HOME 環境変数の値を /bin サブフォルダのパスに設定しないでください。

- JAVA_HOME 変数が存在する場合、コンピュータの JDK インストールのルートフォルダへのパスとして変数値が正しく設定されていることを確認します。

4.17.3.3.1.2 Windows で JBOSS_HOME 環境変数を設定する

Windows オペレーティングシステム上で JBoss Application Server を使用している場合、次の手順を実行して JBOSS_HOME 環境変数を設定し、JBoss がインストールされているフォルダを指定します。

1. [システムプロパティ] ダイアログボックスを開きます。たとえば、**スタート > コントロールパネル > システムとセキュリティ > システム** をクリックし、[システムの詳細設定] をクリックします。
2. [システムのプロパティ] ダイアログボックスで、[詳細設定] タブをクリックし、[環境変数] をクリックします。
3. [システム環境変数] 領域で、JBOSS_HOME 変数を設定します。
 - JBOSS_HOME 変数が存在しない場合、[新規] をクリックします。[新しいシステム変数] ダイアログボックスの [変数名] フィールドに、「**JBOSS_HOME**」と入力します。[変数値] フィールドに、コンピュータの JBoss Application Server インストールのルートフォルダへのパスを入力します。[OK] をクリックします。
 - JBOSS_HOME 変数が存在する場合、コンピュータの JBoss インストールのルートフォルダへのパスとして変数値が正しく設定されていることを確認します。

4.17.3.3.1.3 Windows で CATALINA_HOME 環境変数を設定する

Windows オペレーティングシステム上で Tomcat を使用している場合、次の手順を実行して CATALINA_HOME 環境変数を設定し、Tomcat がインストールされているフォルダを指定します。

1. [システムプロパティ] ダイアログボックスを開きます。たとえば、**スタート > コントロールパネル > システムとセキュリティ > システム** をクリックし、[システムの詳細設定] をクリックします。
2. [システムのプロパティ] ダイアログボックスで、[詳細設定] タブをクリックし、[環境変数] をクリックします。
3. [システム環境変数] 領域で、CATALINA_HOME 変数を設定します。
 - CATALINA_HOME 変数が存在しない場合、[新規] をクリックします。[新しいシステム変数] ダイアログボックスの [変数名] フィールドに、「**CATALINA_HOME**」と入力します。[変数値] フィールドに、コンピュータの Tomcat インストールのルートフォルダへのパスを入力します。[OK] をクリックします。
 - CATALINA_HOME 変数が存在する場合、コンピュータの Tomcat インストールのルートフォルダへのパスとして変数値が正しく設定されていることを確認します。

4.17.3.3.2 Linux の環境変数設定

4.17.3.3.2.1 Linux で JAVA_HOME 環境変数を設定する

1. テキストエディタで、/etc/profile.local ファイルを開きます。

① 注記

/etc/profile.local ファイルが存在しない場合、このファイルを作成します。

2. profile.local ファイルに以下の行を追加します。

```
export JAVA_HOME="<JDKRootFolder>"
```

<JDKRootFolder> は、コンピュータの Java Development Kit インストールのルートフォルダへのパスを表します。たとえば、このパスは /usr/java/jdk1.7.0_17 のようになります。

① 注記

JAVA_HOME 環境変数の値を /bin サブフォルダのパスに設定しないでください。

3. profile.local ファイルを保存して閉じます。

4.17.3.3.2 Linux で JBOSS_HOME 環境変数を設定する

Linux オペレーティングシステム上で JBoss Application Server を使用している場合、次の手順を実行して JBOSS_HOME 環境変数を設定し、JBoss がインストールされているフォルダを指定します。

1. テキストエディタで、/etc/profile.local ファイルを開きます。
2. profile.local ファイルに以下の行を追加します。

```
export JBOSS_HOME="<JBossRootFolder>"
```

<JBossRootFolder> は、コンピュータの JBoss インストールのルートフォルダへのパスを表します。

3. profile.local ファイルを保存して閉じます。

4.17.3.3.2.3 Linux で CATALINA_HOME 環境変数を設定する

Linux オペレーティングシステム上で Tomcat を使用している場合、次の手順を実行して CATALINA_HOME 環境変数を設定し、Tomcat がインストールされているフォルダを指定します。

1. テキストエディタで、/etc/profile.local ファイルを開きます。
2. profile.local ファイルに以下の行を追加します。

```
export CATALINA_HOME="<TomcatRootFolder>"
```

<TomcatRootFolder> は、コンピュータの Tomcat インストールのルートフォルダへのパスを表します。

3. profile.local ファイルを保存して閉じます。

4.17.4 JVM メモリ使用量の設定

Web サーバの Java 仮想マシン (JVM) のメモリを割り当てるには、次のパラメータを設定する必要があります。

パラメータ	説明
-Xms64M	ヒープ領域の最小メモリ要件を 64 MB に設定します。
-Xmx4096M	最大ヒープサイズを 4 GB に設定します。
-XX:MaxPermSize=512M	最大永続世代メモリを 512 MB に設定します。
-Xss256k	最大スタックフレームサイズを 256 KB に設定します。

これらのパラメータの設定手順は、Web サーバによって異なります。

4.17.4.1 JBoss の JVM メモリ使用率を設定する

1. テキストエディタで、JBoss インストールの bin フォルダの `standalone.conf.bat` ファイルを開きます。Linux の場合、このファイル名は `standalone.conf` になります。
2. `JAVA_OPTS` 変数を定義するコード行を追加または更新して、適切なメモリ使用率のパラメータを設定します。
たとえば、次の行を追加します。

```
set "JAVA_OPTS=-Xms64M -Xmx4096M -XX:MaxPermSize=512M -Xss256k"
```

3. `standalone.conf.bat` ファイルを保存して閉じます。

4.17.4.2 Tomcat の JVM メモリ使用率を設定する

1. テキストエディタで、Tomcat インストールの bin フォルダの `startup.bat` ファイルを開きます。Linux の場合、このファイル名は `startup.sh` になります。
2. `CATALINA_OPTS` 変数を定義するコード行を追加または更新して、適切なメモリ使用率のパラメータを設定します。
たとえば、次の行を追加します。

```
set "CATALINA_OPTS=-Xms64M -Xmx4096M -XX:MaxPermSize=512M -Xss256k"
```

3. `startup.bat` ファイルを保存して閉じます。

4.17.5 Web サーバおよび XMLA サービスの実行

テスト中に、コマンドラインを使用して Web サーバの開始と停止を行うことで、Oracle OLAP Data Provider を開始および停止できます。本稼働システムでは、Web サーバで提供されるツールを使用して Web サーバを管理することで、Web サーバを停止することなく Oracle OLAP Data Provider を管理できます。

詳細については、Web サーバのマニュアルを参照してください。

- JBoss Application Server 7.1.1 の管理については、<https://docs.jboss.org/author/display/AS71/Documentation> の JBoss マニュアルを参照してください。

- Tomcat の管理については、<http://tomcat.apache.org/tomcat-7.0-doc/> を参照してください。

4.17.5.1 Windows での JBoss の開始と停止

4.17.5.1.1 Windows で JBoss を開始する

1. 新しいコマンドプロンプトウィンドウを開きます。たとえば、**スタート** > **すべてのプログラム** > **アクセサリ** をクリックし、**[コマンド プロンプト]** を右クリックして **[管理者として実行]** をクリックします。

① 注記

新しいコマンドプロンプトウィンドウを開いて、Oracle OLAP Data Provider の設定時に環境変数に行った変更を把握する必要があります。

2. コマンドプロンプトウィンドウで、JBoss がインストールされているルートフォルダを参照します。
3. 「cd bin」 と入力して **Enter** キーを押します。
4. 「standalone.bat」 と入力して **Enter** キーを押します。

① 注記

パラメータを指定せずに standalone.bat を実行すると、JBoss は localhost の IP アドレス 127.0.0.1 にバインドされます。その結果、リモートコンピュータから XMLA サービスにアクセスできなくなります。テストのために、「standalone.bat -b 0.0.0.0」 と入力してすべての IP アドレスにバインドし、JBoss を開始することができます。これにより、すべてのリモートコンピュータから XMLA サービスにアクセスできるようになります。セキュリティが不十分になるため、本稼働システムで JBoss をすべての IP アドレスにバインドすることはお勧めできません。詳細については、JBoss マニュアルを参照してください。

通常、JBoss は 30 秒以内に開始します。

4.17.5.1.2 Windows で JBoss を停止する

1. JBoss を開始したコマンドプロンプトウィンドウを選択し、**Ctrl + C** キーを押します。
2. バッチジョブを終了するように求められたら、「y」 と入力して **Enter** キーを押します。

4.17.5.2 Linux での JBoss の開始と停止

4.17.5.2.1 Linux で JBoss を開始する

root ユーザとして次のコマンドを実行します。

```
$JBOSS_HOME/bin/standalone.sh
```

① 注記

パラメータを指定せずに `standalone.sh` を実行すると、JBoss は `localhost` の IP アドレス `127.0.0.1` にバインドされます。その結果、リモートコンピュータから XMLA サービスにアクセスできなくなります。テストのために、「`standalone.sh -b 0.0.0.0`」と入力してすべての IP アドレスにバインドし、JBoss を開始することができます。これにより、すべてのリモートコンピュータから XMLA サービスにアクセスできるようになります。セキュリティが不十分になるため、本稼働システムで JBoss をすべての IP アドレスにバインドすることはお勧めできません。詳細については、JBoss マニュアルを参照してください。

通常、JBoss は 30 秒以内に開始します。

4.17.5.2 Linux で JBoss を停止する

JBoss を開始したターミナルウィンドウで、**Ctrl + C** キーを押します。

次のコマンドを実行して JBoss を停止することもできます。

```
$JBoss_HOME/bin/jboss-cli.sh --connect --command=:shutdown
```

4.17.5.3 Windows での Tomcat の開始と停止

4.17.5.3.1 Windows で Tomcat を開始する

この手順では、Windows Service Installer を使用して Tomcat をインストールしていないことを前提としています。Windows Service Installer を使用して Tomcat をインストールしている場合、グラフィカルユーザインタフェース (GUI) を使用して Tomcat を開始します。

1. 新しいコマンドプロンプトウィンドウを開きます。たとえば、**スタート** > **すべてのプログラム** > **アクセサリ** をクリックし、**[コマンド プロンプト]** を右クリックして **[管理者として実行]** をクリックします。

① 注記

新しいコマンドプロンプトウィンドウを開いて、Oracle OLAP Data Provider の設定時に環境変数に行った変更を把握する必要があります。

2. コマンドプロンプトウィンドウで、JBoss がインストールされているルートフォルダを参照します。
3. 「`cd bin`」と入力して **Enter** キーを押します。
4. 「`startup.bat`」と入力して **Enter** キーを押します。

① 注記

デフォルトでは、Tomcat はすべての IP アドレスにバインドされます。セキュリティが不十分になるため、本稼働システムで Tomcat をすべての IP アドレスにバインドすることはお勧めできません。Apache Tomcat サーバの設定の詳細については、<http://tomcat.apache.org/tomcat-7.0-doc/config/index.html> を参照してください。

4.17.5.3.2 Windows で Tomcat を停止する

この手順では、Windows Service Installer を使用して Tomcat をインストールしていないことを前提としています。Windows Service Installer を使用して Tomcat をインストールしている場合、グラフィカルユーザインタフェース (GUI) を使用して Tomcat を停止します。

Tomcat を開始したコマンドプロンプトウィンドウで、「shutdown.bat」と入力して **Enter** キーを押します。

4.17.5.4 Linux での Tomcat の開始と停止

4.17.5.4.1 Linux で Tomcat を開始する

root ユーザとして次のコマンドを実行します。

```
$CATALINA_HOME/bin/startup.sh
```

① 注記

デフォルトでは、Tomcat はすべての IP アドレスにバインドされます。セキュリティが不十分になるため、本稼働システムで Tomcat をすべての IP アドレスにバインドすることはお勧めできません。Apache Tomcat サーバの設定の詳細については、<http://tomcat.apache.org/tomcat-7.0-doc/config/index.html> を参照してください。

4.17.5.4.2 Linux で Tomcat を停止する

root ユーザとして次のコマンドを実行します。

```
$CATALINA_HOME/bin/shutdown.sh
```

4.17.6 インストールのテスト

インストールをテストして、Web サーバおよび XMLA サービスが実行されていることを確認できます。

Web サーバのテスト

Web サーバを起動した後、Web ブラウザを使用して以下の構造を持つ URL に移動することで、Web サーバが実行中であることを確認できます。http://<IP Address>:<port> (<IP Address> は Web サーバがバインドされた IP アドレス、<port> は Web サーバが受信待機しているポート)

たとえば、Web サーバでデフォルトポートを使用して、Web サーバを IP アドレス 127.0.0.1 にバインドする場合、「http://localhost:8080/」と入力します。

Web サーバが正常にインストールされている場合、Web サーバが実行されていることを通知するページがブラウザに表示されます。

XMLA サービスのテスト

Web サーバが実行中である場合、以下の構造を持つ URL に移動することで、XMLA サービスが実行中であることを確認できます。http://<IP Address>:<port>/M4OXmlaWebService/ (<IP Address> と <port> は Web サーバのテストに使用した値と同じ値が含まれる)

最後のスラッシュ文字 (/) は必要です。

Web サーバで XMLA サービスが正常にデプロイされている場合、*XmlaWebService* という見出しの下に **Execute** および **Discover** メソッドが一覧表示される XMLA サービスの開始ページがブラウザに表示されます。

4.17.7 JConsole を使用した Oracle OLAP Data Provider の監視

JConsole 監視ツールでは、Java プラットフォームで実行されているアプリケーションのパフォーマンスおよびリソース使用量に関する情報が提供されます。

詳細については、Web サーバまたは JDK のマニュアルを参照してください。

4.17.7.1 JBoss で属性を監視する

JBoss には、クライアントで XMLA サービスを監視するために使用できる JConsole のバージョンがあります。JBoss で XMLA サービスを監視するには、このバージョンの JConsole を使用する必要があります。JDK に付属する JConsole ツールは使用しないでください。

XMLA サービスを監視するクライアントごとに、JBoss がローカルコンピュータにインストールされている必要があります。また、正しいクラスパスが構成されるように、jconsole.bat または jconsole.sh を実行して、JConsole を開始してください。

1. ターミナルウィンドウ (Linux の場合) またはコマンドプロンプトウィンドウ (Windows の場合) を使用して、JBoss インストールの bin フォルダを参照します。
2. 次のコマンドを入力して、**Enter** キーを押します。
 - Windows の場合: jconsole.bat
 - Linux の場合: sh jconsole.sh
3. [*JConsole: 新規接続*] ダイアログボックスで、[リモートプロセス] を選択します。
4. [リモートプロセス] ラジオボタンの下にあるフィールドに、service:jmx:remotingjmx://<Host>:<Port> という構造で URL を入力します。ここで、<Host> は、JBoss を実行しているコンピュータの IP アドレスで、<Port> は、JBoss ネイティブ管理インタフェースのリスニングポートです。デフォルトのポートは 9999 です。

5. [ユーザ名] フィールドに、JMX エージェントにログインするためのユーザ名を入力します。
6. [パスワード] フィールドに、ユーザ名に対応するパスワードを入力します。
7. [接続] をクリックします。
8. [Java Monitoring & Management Console] ウィンドウで、[MBean] をクリックします。
9. 左のペインで、▶ MDX Provider for Oracle XMLA ▶ XMLA ▶ 属性 ▶ をクリックします。
10. 属性詳細を表示する属性を選択します。

4.17.7.2 Tomcat で属性を監視する

クライアントは、JDK に付属する JConsole ツールを使用して、Tomcat で XMLA サービスを監視できます。

XMLA サービスを監視するクライアントごとに、JDK がローカルコンピュータにインストールされている必要があります。

1. ターミナルウィンドウ (Linux の場合) またはコマンドプロンプトウィンドウ (Windows の場合) を使用して、JDK インストールの bin フォルダを参照します。
2. 次のコマンドを入力して、**Enter** キーを押します。
 - Windows の場合: `jconsole.exe`
 - Linux の場合: `jconsole`
3. [JConsole: 新規接続] ダイアログボックスで、[リモートプロセス] を選択します。
4. [リモートプロセス] ラジオボタンの下にあるフィールドに、<Host>:<Port> という構造で URL を入力します。ここで、<Host> は、Tomcat を実行しているコンピュータの IP アドレスで、<Port> は、監視用に設定されたポートです。
5. [ユーザ名] フィールドに、JMX エージェントにログインするためのユーザ名を入力します。
6. [パスワード] フィールドに、ユーザ名に対応するパスワードを入力します。
7. [接続] をクリックします。
8. [Java Monitoring & Management Console] ウィンドウで、[MBean] をクリックします。
9. 左のペインで、▶ MDX Provider for Oracle XMLA ▶ XMLA ▶ 属性 ▶ をクリックします。
10. 属性詳細を表示する属性を選択します。

4.17.7.3 JConsole 属性のリファレンス

次の表に、JConsole で監視する Oracle OLAP Data Provider の属性を示します。

属性	説明
CurrentSessionCount	現在開いているセッションの合計数。
TotalSessionCreated	ユーザがデータソースに接続してから作成されたセッションの合計数。
CellDataQueryCount	ビジネスデータにアクセスしているクエリの合計数。

属性	説明
CellDataQueryAvgSecond	セルデータクエリの実行に費やされた平均時間 (秒)。
CellDataQueryMaxSecond	セルデータクエリの実行に費やされた最長時間 (秒)。
ConnectionQueryCount	セキュリティ、ユーザアカウントおよび接続プロセスに関連するクエリの合計数。
ConnectionQueryAvgSecond	接続クエリの実行に費やされた平均時間 (秒)。
ConnectionQueryMaxSecond	接続クエリの実行に費やされた最長時間 (秒)。
DrillThroughQueryCount	メジャーの集計データにアクセスしているクエリの合計数。
DrillThroughQueryAvgSecond	ドリルスルークエリの実行に費やされた平均時間 (秒)。
DrillThroughQueryMaxSecond	ドリルスルークエリの実行に費やされた最長時間 (秒)。
MetaDataQueryCount	Business Intelligence リポジトリのデータに対するクエリの合計数。
MetaDataQueryAvgSecond	メタデータクエリの実行に費やされた平均時間 (秒)。
MetaDataQueryMaxSecond	メタデータクエリの実行に費やされた最長時間 (秒)。
TotalQueryCount	Oracle OLAP Data Provider をインストールしてから処理されたすべてのクエリの合計数。
TotalQueryAvgSecond	クエリの実行に費やされた平均時間 (秒)。
TotalQueryMaxSecond	クエリの実行に費やされた最長時間 (秒)。
XmlaExecuteCount	XMLA Execute 関数が呼び出された合計回数。
XmlaExecuteAvgSecond	XMLA Execute 関数に費やされた平均時間 (秒)。

4.17.8 Analysis に対して Oracle OLAP Data Provider を有効にする

BI プラットフォームインストールの `mdas_oda.properties` ファイルでプロパティを設定し、Oracle OLAP データベースへのデータソース接続を作成する必要があります。

- 以下のファイルを開きます。<BOE_INSTALL_DIR> は、BI プラットフォームのルートインストールフォルダです。<BOE_INSTALL_DIR>\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\java\pjs\services\MDAS\resources\com\businessobjects\multidimensional\services\mdas_oda.properties
- Oracle OLAP のプロパティ設定が `true` に設定されていることを確認します。

```
ENABLE_ORACLE_OLAP = true
```

3. ファイルを保存して閉じます。
4. セントラル管理コンソールを開いて、MDAS のインスタンスをホストするそれぞれの Adaptive Processing Server を再起動します。

CMC で OLAP データソース接続を操作する場合、[\[Oracle OLAP\]](#) が [\[プロバイダ\]](#) リストのオプションとして表示されます。これで、Oracle OLAP サーバへの OLAP データソース接続を作成することができます。

関連情報

[OLAP データソース接続の作成 \[64 ページ\]](#)

[Oracle OLAP データ ソースの接続設定 \[83 ページ\]](#)

4.17.9 Oracle OLAP Data Provider のアンインストール

4.17.9.1 Windows で Oracle OLAP Data Provider をアンインストールする

1. Oracle OLAP Data Provider 以外の Web サービスが実行されていない場合、Web サーバを停止します。
2. [\[ODBC データ ソース アドミニストレータ\]](#) ダイアログボックスを開きます。たとえば、[▶ スタート ▶ コントロール パネル ▶ 管理ツール ▶ データ ソース \(ODBC\) ▶](#) をクリックします。
3. [\[システム DSN\]](#) タブをクリックします。
4. Oracle OLAP Data Provider をデータベースに接続するために作成した DSN を選択し、[\[削除\]](#) をクリックします。
5. [\[OK\]](#) をクリックします。
6. コンピュータが Windows を起動するドライブのルートディレクトリ (通常は C:¥) で、sxo フォルダを削除します。
7. 次のファイルおよびフォルダを削除します。
 - JBoss の場合、M4OXmlaWebService.war および M4OXmlaWebService.war.deployed を JBoss インストールの ¥standalone¥deployments¥webapps¥ フォルダから削除します。
 - Tomcat の場合、M4OXmlaWebService.war および M4OXmlaWebService フォルダを Tomcat インストールの ¥webapps¥ フォルダから削除します。

関連情報

[Web サーバおよび XMLA サービスの実行 \[33 ページ\]](#)

4.17.9.2 Linux で Oracle OLAP Data Provider をアンインストールする

1. Oracle OLAP Data Provider 以外の Web サービスが実行されていない場合、Web サーバを停止します。
2. Oracle OLAP Data Provider をデータベースに接続するために作成した DSN を削除します。
3. `/etc/mdxprovider` フォルダを削除します。
4. 次のファイルおよびフォルダを削除します。
 - JBoss の場合、`M4OxmleWebService.war` および `M4OxmleWebService.war.deployed` を JBoss インストールの `/standalone/deployments/webapps` フォルダから削除します。
 - Tomcat の場合、`M4OxmleWebService.war` および `M4OxmleWebService` フォルダを Tomcat インストールの `/webapps` フォルダから削除します。

関連情報

[Web サーバおよび XMLA サービスの実行 \[33 ページ\]](#)

4.17.10 ログを使用した MDX および SQL の問題のトラブルシューティング

エラーメッセージの情報が不十分で問題をトラブルシューティングできない場合、必要に応じて Oracle OLAP Data Provider のログをオンにします。ログが有効になったら、エラーを発生させる手順をもう一度実行します。

① 注記

問題をキャプチャできる十分な長さのログのみを有効にします。ログによって、データプロバイダが遅くなり、大量のディスクを消費する可能性があります。

4.17.10.1 Windows でログをオンにする

この手順を実行する前に、MDAS および Oracle OLAP Data Provider を停止します。

1. Oracle OLAP Data Provider インストールパッケージで、`¥Utils¥Logging` サブフォルダに移動し、`Windows_Logging_On.reg` という名前のレジストリファイルをダブルクリックします。

`Windows_Logging_On.reg` ファイルには、ログファイルを保存するパスが含まれています。デフォルトのパスは、`C:¥Logs` です。パスを変更するには、テキストエディタでファイルを開いて、“`Path`”= の値を更新します。

バックスラッシュ文字 (¥) は、2 番目のバックスラッシュでエスケープする必要があります。

例:

```
"PATH"="C:¥¥Users¥¥Administrator"
```

2. Oracle OLAP Data Provider を再起動します。
3. MDAS を再起動します。

ログファイルは OracleMdxProvider.<timestamp>.log のようなファイル名で保存されます。ログファイルは、自動的に 5 MB のファイルに分割されるため、多数の連続ファイルが存在する場合があります。

4.17.10.2 Windows でログをオフにする

この手順を実行する前に、MDAS および Oracle OLAP Data Provider を停止します。

1. Oracle OLAP Data Provider インストールパッケージで、¥Utils¥Logging サブフォルダに移動し、Windows_Logging_Off.reg という名前のレジストリファイルをダブルクリックします。
2. Oracle OLAP Data Provider を再起動します。
3. MDAS を再起動します。

4.17.10.3 Linux でログをオンにする

この手順を実行する前に、MDAS および Oracle OLAP Data Provider を停止します。

1. テキストエディタで、/etc/mdxprovider/sxo/tracesettings.conf 設定ファイルを開きます。
この設定ファイルで、ログファイルを保存するパスを設定します。デフォルトのパスは /etc/mdxprovider/sxo/logs です。パスを変更するには、設定ファイルの LogEx.LogWriter.LogFile.Path= で始まる行の値を更新します。
2. LogEx.Enabled=false 行を LogEx.Enabled=true に変更してファイルを保存します。
3. Oracle OLAP Data Provider を再起動します。
4. MDAS を再起動します。

ログファイルは OracleMdxProvider.<timestamp>.log のようなファイル名で保存されます。ログファイルは、自動的に 5 MB のファイルに分割されるため、多数の連続ファイルが存在する場合があります。

4.17.10.4 Linux でログをオフにする

この手順を実行する前に、MDAS および Oracle OLAP Data Provider を停止します。

1. テキストエディタで、/etc/mdxprovider/sxo/tracesettings.conf 設定ファイルを開きます。
2. LogEx.Enabled=true 行を LogEx.Enabled=false に変更してファイルを保存します。
3. Oracle OLAP Data Provider を再起動します。
4. MDAS を再起動します。

5 セキュリティ

5.1 MDAS の Secure Sockets Layer(SSL)の設定

MDAS は、他の BI プラットフォームサーバや CORBA (Common Object Request Broker Architecture) と呼ばれる通信メカニズムを使用する Web サーバと通信します。CORBA は SSL を使用するように設定できます。SSL は、CORBA 上で機密データを送信する場合に暗号化された接続を構築するために使われるセキュリティプロトコルです。

MDAS を含め、BI プラットフォームサーバおよびサービスの SSL 設定の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの「サーバの SSL 設定」の節を参照してください。

5.2 データの保護とプライバシー

SAP BusinessObjects Business Intelligence Suite でのデータ保護およびプライバシーに関するすべての情報については、*Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドでこのトピックを参照してください (<https://help.sap.com/viewer/2e167338c1b24da9b2a94e68efd79c42/4.2.5/en-US/9da114546bb54d11b7ee34419825b5a3.html>)。

6 アクセス権の管理

6.1 アクセス権およびアクセスレベルの概要

Analysis でタスクを実行するには、ユーザに特定のアクセス権が必要です。たとえば、ワークスペースを変更する場合は、ユーザに [編集] アクセス権を付与する必要があります。ローカルのフォルダやネットワーク上のフォルダにワークスペースを保存する必要があるユーザには、ワークスペースを保存するフォルダに対する十分なアクセス権を付与する必要があります。

新しいワークスペースを作成するには、セントラル管理コンソール (CMC) で、ユーザに Analysis アプリケーションに対する “Analysis ワークスペースの作成” 権限を付与する必要があります。ユーザにこの権限が付与されていなくても、[表示] および [編集] アクセス権がある場合は、既存のワークスペースを表示および編集することができます。ただし、既存のワークスペースにある新しいデータソースに接続することや、既存のワークスペースから OLAP 接続を削除することはできません。

特定のアクセス権を許可または拒否する以外に、ユーザまたはグループにアクセスレベルを割り当てることができます。アクセスレベルを使用すると、共通するセキュリティレベルをすばやく一律に設定することができます。個別のアクセス権を 1 つずつ設定する必要はなくなります。

セントラル管理コンソールを使用して、ユーザおよびグループを追加し、Analysis ワークスペースおよび接続など、製品スイートのさまざまなコンポーネントに対するアクセス権およびアクセスレベルを設定することができます。

6.2 Analysis ワークスペースアクセス権の作成

新規ワークスペースを作成できるようにするには、ユーザに “Analysis ワークスペースの作成” 権限を付与する必要があります。

“Analysis ワークスペースの作成” 権限では、ユーザが既存のワークスペースにデータソース接続を追加する機能も制御します。ユーザにこの権限がない場合は、ワークスペースで [データソースへの接続](#) ボタンを使用できません。

6.2.1 Analysis ワークスペースの作成権限を付与する

1. セントラル管理コンソール (CMC) を起動します。

たとえば、Windows Server 2008 の場合、[▶ スタート ▶ すべてのプログラム ▶ SAP Business Intelligence ▶ SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4 ▶ SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール](#)  をクリックします。

2. CMC にログインします。

3. CMC の [管理] エリアで、[アプリケーション] を選択します。
4. [Analysis edition for OLAP] を右クリックし、[ユーザセキュリティ] を選択します。
[ユーザセキュリティ] ダイアログボックスが表示されます。
5. ユーザまたはグループを選択し、[セキュリティ割り当て] をクリックします。
6. [詳細] タブで、[権限の追加/削除] をクリックします。
7. [アプリケーション] を展開し、[Analysis edition for OLAP] をクリックします。
8. [Analysis edition for OLAP の特定の権限] で、["Analysis ワークスペースの作成"] 権限を付与します。

6.3 Analysis オブジェクトのアクセス権

Analysis ワークスペースおよびデータソースオブジェクトは、セントラル管理コンソールの一般的なオブジェクトアクセス権をサポートしていますが、すべての一般的なアクセス権が Analysis オブジェクトに関連するわけではありません。たとえば、スケジュール権限は、Analysis オブジェクトが BI プラットフォームでスケジュールされないため、Analysis オブジェクトに関係ありません。

OLAP 接続フォルダのアクセス権

- 表示権限は、新しい Analysis ワークスペースの作成時に、ユーザがセントラル管理コンソールまたは使用可能なデータソースの一覧に、データソースを表示できるかどうかを制御します。
- 編集 権限は、ユーザが CMC でデータソースオブジェクトを編集できるかどうかを制御します。
- 特定のユーザに対して OLAP 接続フォルダの表示権限を拒否すると、そのユーザは Analysis で OLAP 接続を表示または使用することはできません。
- 特定の OLAP データソースオブジェクトの表示権限を拒否すると、ユーザはそのデータソースに基づく Analysis ワークスペースを表示できません。

Analysis ワークスペースアクセス権の作成

ユーザが既存のワークスペースでワークスペースを作成して新しいデータソースに接続できるようにするには、セントラル管理コンソールでユーザにこの権限を付与する必要があります。

ワークスペースの表示権限

特定のワークスペースに対する 表示 権限が拒否されると、ユーザはそのワークスペースを開けません。さらに、ワークスペースで使用される OLAP データソースがそのユーザに対して拒否されると、ワークスペースはロードされません。

ワークスペースを受信ボックスに送信する権限

ユーザが Analysis ワークスペースを他の BI プラットフォームユーザの受信ボックスに送信するには、ユーザにその受信ボックスに対する“表示”および“フォルダへのオブジェクト追加”権限が付与されている必要があります。

カスタムグループの編集、削除、共有権限

ユーザは、OLAP 接続で、その接続に基づいたカスタムグループの編集、削除、または共有のための権限を持つ必要があります。詳細については、[カスタムグループの権限の設定 \[51 ページ\]](#)を参照してください。

分析アプリケーションへのエクスポート権限

ユーザがワークスペースを分析アプリケーションとしてエクスポートできるようにするには、セントラル管理コンソールでユーザにこの権限を付与する必要があります。個別の Design Studio Runtime 権限で、ユーザが分析アプリケーションを表示できるかを指定します。

アクセスレベル

アクセス権の割り当ての他に、定義済みのアクセスレベルのいずれかを使用して、ユーザに一連のアクセス権を付与したり、組織のユーザに適切なアクセスレベルを定義することができます。アクセスレベルの詳細については、[Analysis オブジェクトのアクセスレベル \[47 ページ\]](#)を参照してください。アクセス権を個別に許可および拒否する場合は、[詳細]アクセスレベルを選択します。

① 注記

セントラル管理コンソールを使用して、Analysis オブジェクトなど、製品セットの各種のコンポーネントのアクセスレベルと権限を設定する方法については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドの「アクセス権の設定」の節を参照してください。

6.3.1 Analysis オブジェクトのアクセス権を設定する

1. セントラル管理コンソールを起動します。
たとえば、Windows の場合、**スタート** ➤ **すべてのプログラム** ➤ **SAP Business Intelligence** ➤ **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** ➤ **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。
2. プロンプトが表示された場合は、ユーザ名とパスワードを入力します。
3. アクセス権を割り当てるオブジェクトの種類をクリックします (たとえば、**[フォルダ]** または **[サーバ]**)。
4. 表示されたオブジェクトの一覧から、アクセス権を割り当てるオブジェクトを 1 つクリックします。



5. [\[ユーザセキュリティの管理\]](#)をクリックします。
6. そのオブジェクトに対してアクセス権を持つユーザの一覧にユーザまたはグループを追加する場合は、[\[主体の追加\]](#)をクリックします。
7. アクセス権を設定するユーザまたはグループを選択し、[\[セキュリティの割り当て\]](#)をクリックします。
8. [\[詳細\]](#)タブをクリックします。
9. [\[権限の追加/削除\]](#)をクリックします。
10. アクセス権を選択してから、[\[適用\]](#) または [\[OK\]](#) をクリックして変更を保存します。

① 注記

セントラル管理コンソールを使用して、Analysis オブジェクトなど、製品セットの各種のコンポーネントのアクセスレベルと権限を設定する方法については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの「“アクセス権の設定”」の節を参照してください。

6.4 Analysis オブジェクトのアクセスレベル

アクセスレベルによって、一連のオブジェクト権限を付与します。大抵のユーザのアクセス要件は、アクセスレベルを正しく選択することで満たすことができます。

例

たとえば、[\[表示\]](#) アクセスレベルは、Analysis ワークスペースを表示、編集し、[\[編集\]](#) アクセス権のあるフォルダ ([\[お気に入り\]](#) フォルダなど) に保存できるが、元のフォルダには保存できないようにするための適切な一連の権限をユーザに付与します。したがって、[\[表示\]](#) アクセスレベルでは、元のワークスペースが上書きされません。

また、ワークスペースを表示し、さらに元のフォルダにその変更を保存するアクセス権をユーザに付与する場合は、[\[オブジェクトを表示する\]](#) および [\[オブジェクトを編集する\]](#) の両方のアクセス権を明示的に付与する代わりに、[\[フルコントロール\]](#) アクセスレベルを割り当てることができます。

→ 注意

ユーザは、[\[Analysis ワークスペースの作成\]](#) 権限、および適切なデータソースとワークスペースの権限を持つ場合にのみ、ワークスペースにデータソース接続を追加することができます。

Analysis オブジェクトはセントラル管理コンソールで標準アクセスレベルをサポートしていますが、すべてのアクセスレベルが Analysis オブジェクトに関連しているわけではありません。

- **アクセス権なし:** ユーザはオブジェクトにアクセスできません。
- **表示:** ユーザはオブジェクトを表示、変更し、[\[編集\]](#) アクセス権を持っているフォルダに保存できますが、元のフォルダには保存できません。ユーザはオブジェクトを作成すること、および接続を追加または削除することはできません。
- **スケジュール:** Analysis オブジェクトは BI プラットフォームではスケジュールされないため、このアクセスレベルは Analysis オブジェクトに影響しません。

- オンデマンド表示: [表示] アクセスレベルに似ています。一部の SAP BusinessObjects アプリケーションでは、[オンデマンド表示] アクセスレベルで提供されるアクセス権のセットが、[表示] アクセスレベルで提供されるアクセス権のセットと異なる場合がありますが、Analysis では、[表示] アクセスレベルと [オンデマンド表示] アクセスレベルは同じです。

① 注記

Crystal Reports など、その他の SAP BusinessObjects アプリケーションのオブジェクトは、更新済みデータソースに対して "最新表示" または "オンデマンド表示" を行うことができます。Analysis に表示されるデータは常に最新データであるため、Analysis オブジェクトを最新表示する必要はありません。

- フルコントロール: オブジェクトに対して完全な管理権限を持ちます。

① 注記

分析者が保存した元のバージョンのワークスペースをユーザが誤って上書きする可能性があるため、[フルコントロール] アクセスレベルはあまりユーザに付与しないようにします。代わりに、[表示] アクセスレベルを使用します。

6.4.1 Analysis オブジェクトのアクセスレベルを設定する

1. セントラル管理コンソールを起動します。

たとえば、Windows の場合、**スタート** > **すべてのプログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。

2. プロンプトが表示された場合は、ユーザ名とパスワードを入力します。
3. アクセスレベルを設定するオブジェクトの種類をクリックします(たとえば、[フォルダ]や[サーバ])。
4. 表示されたオブジェクトの一覧で、アクセスレベルを設定するオブジェクトを1つクリックします。



5. [ユーザセキュリティの管理]をクリックします。
6. そのオブジェクトに対してアクセス権を持つユーザの一覧にユーザまたはグループを追加する場合は、[主体の追加]をクリックします。
7. アクセスレベルを設定するユーザまたはグループを選択し、[セキュリティの割り当て]をクリックします。
8. [利用可能なアクセスレベル]一覧で、ユーザまたはグループのアクセスレベルを選択し、[割り当てられたアクセス]一覧に移動します。
ユーザの詳細なアクセス権を設定する場合は、[詳細]タブをクリックします。
9. [適用]または[OK]をクリックして、変更を保存します。

① 注記

セントラル管理コンソールを使用して、Analysis オブジェクトなど、製品セットの各種のコンポーネントのアクセスレベルと権限を設定する方法については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドの「アクセス権の設定」の節を参照してください。

6.5 データアクセス

Analysis では、どのユーザがワークスペースを表示または作成できるか、また、どのデータを表示できるかなどを柔軟に管理できます。OLAP サーバ本来のデータセキュリティに、こうした管理機能が追加されます。データへアクセスできるようにするには、OLAP 接続フォルダおよびサブフォルダ、または特定のデータソースオブジェクトに対する適切な権限をユーザに付与する必要があります。

デフォルトでは、OLAP 接続フォルダに対する“Everyone”グループのアクセスレベルは、“アクセス権なし”に設定されます。この設定により、管理者以外の Analysis エンドユーザには、以下のような影響があります。

- 新規 Analysis ワークスペースを作成できない。
- エンドユーザが Analysis データソースを使用できないため、既存の Analysis ワークスペースを開くことができない。
- セントラル管理コンソールの [OLAP 接続] ページを使用できない。

エンドユーザが特定の Analysis データソースにアクセスできるようにするには、ユーザにそのデータソースのみに対する“表示”アクセスレベルを付与します。

子オブジェクトに割り当てられた権限によって継承権限は無効になるため、エンドユーザに個々のデータソースに対する“表示”アクセスレベルが付与されている場合は、そのデータソースが含まれるフォルダに対するアクセス権が“アクセス権なし”に設定されていても、エンドユーザは Analysis データソースにアクセスすることができます。

エンドユーザに OLAP 接続フォルダに対する“表示”アクセスレベルを付与すると、フォルダ内の Analysis データソースオブジェクトに対する“表示”アクセスレベルが継承されます。エンドユーザが特定のデータソースにアクセスできないようにするには、そのデータソースオブジェクトに“アクセス権なし”アクセスレベルを割り当てることができます。

これらの組み合わせにより、どのユーザが新規 Analysis ワークスペースおよび Analysis データソースオブジェクトを作成できる、または作成できないかを制御し、さらにどの Analysis 関連データを誰が表示することができるかを制御することもできます。

① 注記

OLAP 接続に関するフォルダ管理およびセキュリティは、CMC の OLAP 接続ページおよび接続ページのどちらからも管理できます。したがって、特定のフォルダに割り当てられたセキュリティは、接続が OLAP データではなくリレーショナルデータに対するものであっても、そのフォルダのすべての子に影響します。たとえば、ルートレベルで権限を制約すると、その制約には OLAP 接続だけでなく、ルートフォルダ内のすべてのサブフォルダおよび接続が含まれます。

セントラル管理コンソールを使用して、ワークスペースおよびデータソースオブジェクトなど、Analysis 要素を含めた製品スイートの各種コンポーネントに対するアクセスレベルを設定する方法については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドの「“アクセス権の設定”」の節を参照してください。

6.5.1 OLAP 接続フォルダにアクセス権を設定する

1. セントラル管理コンソールを起動します。

たとえば、Windows の場合、**スタート** > **すべてのプログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。

2. セントラル管理コンソールにログインします。

3.  CMC の **[整理]** エリアで、**[OLAP 接続]** を選択します。

4. **管理** > **最上位セキュリティ** > **すべての接続** をクリックします。

5. 一覧でユーザまたはグループを選択し、**[セキュリティの割り当て]** をクリックします。

6. 適切なアクセスレベルを割り当てるか、**[詳細]** タブをクリックして特定の権限を割り当てます。(アクセスレベルは権限のグループです。)

Analysis ワークスペースを作成するには、少なくとも OLAP 接続フォルダへの "表示" アクセス権が必要です。

7. **[適用]** または **[OK]** をクリックして、変更を保存します。

関連情報

[アクセス権およびアクセスレベルの概要 \[44 ページ\]](#)

6.6 Analysis ワークスペースへのアクセス権の変更

ワークスペースを公開したら、CMC を使用してそのアクセス権を変更できます。

6.6.1 ワークスペースへのアクセス権を変更する

1. セントラル管理コンソールを起動します。

たとえば、Windows の場合、**スタート** > **すべてのプログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。

2. セントラル管理コンソールにログインします。

3.  CMC の **[整理]** エリアで **[フォルダ]** または **[個人用フォルダ]** を選択します。

4. 必要に応じてフォルダー一覧を展開し、プロパティを編集するワークスペースを検索します。

5. ワークスペースを選択し、**管理** > **ユーザセキュリティ** をクリックします。

6. アクセス権を変更するユーザ名またはグループ名をクリックして、次に **[セキュリティの割り当て]** をクリックします。

7. 適切なアクセスレベルまたはアクセス権を割り当て、**[OK]** をクリックします。

① 注記

いずれかの継承チェックボックスがオンになっている場合には、割り当てたアクセスレベルまたはアクセス権よりも継承アクセス権が優先されます。アクセス権およびアクセスレベルの割り当ての詳細について

ては、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドの「アクセス権の設定」の節を参照してください。

6.7 カスタムグループの権限の設定

Analysis では、MSAS および Essbase データソースのカスタムグループをサポートしています。カスタムグループの編集、削除、および共有の権限は、OLAP 接続レベルで割り当てます。

たとえば、公開カスタムグループの編集や削除が可能なユーザおよびグループを制限して、BI コンテンツに対する想定外の変更を防ぐことができます。また、カスタムグループを組織の他のメンバーと共有できるユーザおよびグループを制限して、Analysis 内の不要なオブジェクト数を削減し、BI コンテンツのナビゲーションを簡略化することもできます。OLAP 接続のフォルダに権限を設定することも、個々の OLAP 接続に権限を設定することもできます。

6.7.1 カスタムグループの編集権限または削除権限を設定する

1. セントラル管理コンソールを起動します。

たとえば、Windows の場合、**スタート** > **すべてのプログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。

2. プロンプトが表示された場合は、ユーザ名とパスワードを入力します。

3.  CMC の **[整理]** エリアで、**[OLAP 接続]** を選択します。

4. 以下のオプションのいずれかを選択します。

- すべての OLAP 接続の権限を設定するには、**管理** > **ユーザセキュリティ** をクリックします。
- OLAP 接続のフォルダの権限を設定するには、フォルダを右クリックして **[ユーザセキュリティ]** をクリックします。

5. 一覧でユーザまたはグループを選択し、**[セキュリティの割り当て]** をクリックします。

6. **[詳細設定]** をクリックします。

7. **[権限の追加/削除]** をクリックします。

8. **アプリケーション** > **OLP.CustomGroup** をクリックします。

9. 特定の権限を割り当てるには、**[一般的なグローバルの上書き]** をクリックし、該当する権限の横の **[許可]** または **[拒否]** を選択します。

オプション	説明
ユーザが所有するオブジェクトを削除する	ユーザが作成した個人用カスタムグループおよび共有カスタムグループの削除を許可します。

オプション	説明
オブジェクトを削除する	ユーザがアクセスできる個人用カスタムグループまたは共有カスタムグループの削除を許可します。
ユーザが所有するオブジェクトを編集する	ユーザが作成した個人用カスタムグループおよび共有カスタムグループの編集を許可します。
オブジェクトを編集する	ユーザがアクセスできる個人用カスタムグループまたは共有カスタムグループの編集を許可します。


セントラル管理コンソールを使用して、ワークスペースおよびデータソースオブジェクトなど、Analysis 要素を含めた製品スイートの各種コンポーネントに対するアクセスレベルを設定する方法については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドの「アクセス権の設定」の節を参照してください。

6.7.2 カスタムグループの共有権限を設定する

1. セントラル管理コンソールを起動します。

たとえば、Windows の場合、**スタート** > **すべてのプログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。

2. プロンプトが表示された場合は、ユーザ名とパスワードを入力します。

3.  CMC の **[整理]** エリアで、**[OLAP 接続]** を選択します。

4. 以下のオプションのいずれかを選択します。

- すべての OLAP 接続の権限を設定するには、**管理** > **ユーザセキュリティ** をクリックします。
- OLAP 接続のフォルダの権限を設定するには、フォルダを右クリックして **[ユーザセキュリティ]** をクリックします。
- 特定の OLAP 接続の権限を設定するには、OLAP 接続を右クリックして **[ユーザセキュリティ]** をクリックします。

5. リストでユーザまたはグループを選択します。 **セキュリティの割り当て** をクリックします。

6. **[詳細設定]** をクリックします。

7. **[権限の追加/削除]** をクリックします。

8. **システム** > **OLAP 接続** をクリックします。

9. **[カスタムグループの共有]** 権限を割り当てるには、権限の横の **[許可]** または **[拒否]** を選択します。

カスタムグループの共有 (所有者の権限) オプションは、カスタムグループの共有権限には影響しません。

セントラル管理コンソールを使用して、ワークスペースおよびデータソースオブジェクトなど、Analysis 要素を含めた製品スイートの各種コンポーネントに対するアクセスレベルを設定する方法については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドの「アクセス権の設定」の節を参照してください。

6.8 分析アプリケーションへのエクスポート権限

Analysis, edition for OLAP ワークスペースを分析アプリケーションとしてエクスポートするには、ユーザが“分析アプリケーションへのエクスポート”権限を保持している必要があります。

① 注記

個別の権限で、ユーザが分析アプリケーションを表示できるかを指定します。この Design Studio Runtime 権限は AAD.Plugin と呼ばれます。この権限の設定の詳細については、SAP ヘルプポータル (<http://help.sap.com>) にある『管理者ガイド: SAP BusinessObjects Design Studio』を参照してください。

6.8.1 ワークスペースを分析アプリケーションとしてエクスポートする権限を付与する

1. セントラル管理コンソール (CMC) を起動します。
たとえば、Windows Server 2008 の場合、▶ **スタート** ▶ **すべてのプログラム** ▶ **SAP Business Intelligence** ▶ **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** ▶ **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** ▶ をクリックします。
2. CMC にログインします。
3. CMC の [管理] エリアで、[アプリケーション] を選択します。
4. [Analysis edition for OLAP] を右クリックし、[ユーザセキュリティ] を選択します。
[ユーザセキュリティ] ダイアログボックスが表示されます。
5. ユーザまたはグループを選択し、[セキュリティ割り当て] をクリックします。
6. [詳細] タブで、[権限の追加/削除] をクリックします。
7. [アプリケーション] を展開し、[Analysis edition for OLAP] をクリックします。
8. [Analysis edition for OLAP の特定の権限] で、[“分析アプリケーションへのエクスポート”] 権限を付与します。

6.9 PDF、Excel、または CSV 形式にエクスポートする権限を付与する

ユーザがクロstabおよびチャートコンポーネントを PDF、Excel、または CSV 形式にエクスポートできるようにすることができます。

1. SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームのセントラル管理コンソールにログインします。
2. CMC の [管理] エリアで、[アプリケーション] を選択します。
3. [Analysis edition for OLAP] を右クリックし、[ユーザセキュリティ] を選択します。
[ユーザセキュリティ] ダイアログボックスが表示されます。
4. アクセス権を割り当てるユーザまたはグループを選択し、[セキュリティの割り当て] をクリックします。

5. [詳細] タブをクリックし、[権限の追加/削除] をクリックします。
6. [アプリケーション] を展開し、[*Analysis edition for OLAP*] をクリックします。
7. [*Analysis edition for OLAP* の特定の権限] で、ユーザに付与する権限を選択します。
8. 変更を保存するには、[適用] をクリックします。

7 MDAS メンテナンス

7.1 Server Intelligence Agent の起動と停止

Server Intelligence Agent (SIA) は、MDAS を含め、すべての BI プラットフォームサーバおよびサービスを管理します。BI プラットフォームを起動すると、SIA は自動的に起動します。どの BI プラットフォームサーバも、SIA の起動時に起動するよう設定されています。

また、SIA プロパティ(ログオン名アカウントや起動タイプなど)は、SIA で実行されているすべてのサーバに伝播されます。

Windows では、セントラル設定マネージャ(CCM)を使用して SIA を起動および停止します。サポートされるすべての UNIX プラットフォームで SIA を起動および停止するには、コマンドプロンプトでスクリプト `startservers.sh` および `stopservers.sh` を実行する必要があります。

Server Intelligence Agent の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

7.2 Multi-Dimensional Analysis Service の起動および停止

MDAS を手動で起動または停止する必要がある場合があります。

たとえば、MDAS インスタンスのクラスタを設定した場合は、負荷の条件に応じて個々のインスタンスを起動または停止する必要があります。

MDAS を含め、BI プラットフォームサーバおよびサービスの開始と停止の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

7.3 Multi-Dimensional Analysis Service の再起動

MDAS を再起動する必要がある場合があります。

例:

- 設定ファイルを変更し、再ロードする必要がある場合。
- 管理者がポートとインタフェース名を変更し、変更を有効にするために再起動する必要がある場合。
- MDAS が修復できないエラー状態を検出した場合。

MDAS を含め、BI プラットフォームサーバおよびサービスの再起動の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

7.4 MDAS インスタンスの有効化および無効化

BI プラットフォームサーバを無効にすると、新しいリクエストの受け付けおよび応答が停止されますが、実際にはサーバプロセスは停止していません。これは、処理中の要求をすべて完了してから完全にサーバを停止させたい場合に特に便利です。

MDAS インスタンスを無効にすると、サービスはサービスとして実行が継続されますが、Analysis またはセントラル管理コンソール (CMC) からの新規リクエストは受け付けません。

実行中の MDAS インスタンスを有効にすると、その MDAS インスタンスは Analysis または CMC から、接続の作成などの新規リクエストを受け入れます。

MDAS を含め、BI プラットフォームサーバおよびサービスの有効化と無効化の詳細については、SAP *BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

7.5 MDAS インスタンスの追加と削除

実行中の MDAS インスタンスを複数作成することができます。新しい MDAS サーバはそのパラメータを指定して作成するか、既存の MDAS サーバから作成できます。新しい MDAS インスタンスを追加したら、それを起動して有効にする必要があります。

MDAS を含め、BI プラットフォームサーバおよびサービスの追加と削除の詳細については、SAP *BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

関連情報

[Analysis サーバデプロイメントの複製 \[18 ページ\]](#)

[Multi-Dimensional Analysis Service の起動および停止 \[55 ページ\]](#)

[Multi-Dimensional Analysis Service の再起動 \[55 ページ\]](#)

[MDAS インスタンスの有効化および無効化 \[56 ページ\]](#)

7.6 MDAS サーバの設定ファイル

`mdas.properties` および `mdaclient.properties` 設定ファイルを編集して Analysis デプロイメントをカスタマイズすることができます。

`mdas.properties` 設定ファイルは、以下の場所にあります。

- Windows の場合:
`<BOE_INSTALL_DIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI
4.0%java%pjs%services%MDAS%resources%com%businessobjects%multidimensional%servic
es%`

ここで、<BOE_INSTALL_DIR> は、インストールディレクトリのファイルパスです (デフォルトでは C:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\)

- UNIX の場合:

<BOE_INSTALL_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/pjs/services/MDAS/resources/com/businessobjects/multidimensional/services/

mdaclient.properties 設定ファイルは、以下の場所にあります。

- Windows で Apache Tomcat Web サーバのデフォルトインストールを使用している場合:

<BOE_INSTALL_DIR>\tomcat\webapps\BOE\WEB-INF\config\default。ここで、

<BOE_INSTALL_DIR> は、インストールディレクトリのファイルパスです (デフォルトでは C:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\)

- UNIX の場合:

<BI プラットフォームインストールディレクトリ>/tomcat/webapps/BOE/WEB-INF/config/default

7.6.1 MDAS 設定ファイル — mdas_default.properties

Mdas_default.properties は設定パラメータを含むデフォルトファイルです。

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームのインストール時には、mdas_default.properties ファイルが BI インストーラによってインストールされます。SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームの更新インストール時には、mdas_default.properties が上書きされます。

更新インストール時に mdas_default.properties を上書きする利点 - マイナーリリースやサポートパッケージリリースで導入される新しいパラメータを更新するために、mdas_default.properties が BI インストーラによって上書きされます。

7.6.2 MDAS 設定ファイル (mdas.properties)

個々の MDAS サーバインスタンスの動作は、対応する mdas.properties ファイルのパラメータを修正して設定することができます。パラメータには、サーバのタイムアウト、Excel にエクスポートするセルの最大数に加え、開発やテストのために使用されるさまざまなパラメータ(実稼働環境では変更も参照もできない)が含まれます。

各パラメータが MDAS サーバの運用に与える影響を十分に理解してから、mdas.properties ファイルを編集するようにしてください。

この設定ファイルに対する変更は、次回 MDAS サーバを再起動するまで有効になりません。

7.6.2.1 mdas.properties パラメータ

パラメータ	説明
<code>multidimensional.services.server.xml.use_validation=false</code>	デプロイ済み環境では、このパラメータの値を <code>false</code> に設定して、サーバで XML 検証が使用されないようにします。開発環境では <code>true</code> に設定します。
<code>multidimensional.services.server.xml.prettyprint=false</code>	このフラグは、MDAS によって返された xml データをプリティプリントで表示するかどうかを示します。値を <code>true</code> に設定すると、デバッグに役立ちますが、パフォーマンスが低下します。
<code>multidimensional.services.transport.trace.level=none</code>	このパラメータにより、MDAS アクティビティをトレースできます。使用可能な値は、 <code>none</code> 、 <code>verbose</code> 、および <code>info</code> です。
<code>multidimensional.services.server.session.monitor.idle.timeout=180000</code>	<p>このパラメータは MDAS タイムアウトに対応します。この期間はミリ秒単位です (デフォルトの時間は 30 分に設定されています)。この期間には、BI ラUNCHパッドのセッションタイムアウト (デフォルトは 20 分) よりも大きい値を設定する必要があります。</p> <p>BI ラUNCHパッドのセッションタイムアウトは、<code>web.xml</code> (<code><BOE_INSTALL_DIR>%tomcat%webapps%BOE%WEB-INF%</code>) に、タグ <code><session-timeout>20</session-timeout></code> で設定されていることに注意してください。</p> <p>BI ラUNCHパッドのセッションタイムアウトの詳細については、セッションのタイムアウト設定 [22 ページ]を参照してください。</p>
<code>multidimensional.services.export.cells.limit=10000</code>	<p>このパラメータにより、Excel、CSV、および PDF への大規模なエクスポートを防止できます。ユーザが 10000 を超えるセル数を含むワークスペースをエクスポートしようとすると、エラーメッセージが表示されます。このしきい値を増やすと、サーバがメモリ不足になる可能性があります。メモリ設定および想定されるユーザ負荷に合わせてこの値の変更を調整することができます。</p> <p>詳細については、エクスポートの制限 [21 ページ]を参照してください。</p>
<code>multidimensional.services.bics.profiling.enabled=false</code>	<p><code>true</code> に設定した場合、このパラメータを使用して SAP BW サーバで統計を有効にします。</p> <p>詳細については、以下を参照してください。 SAP BW サーバで Analysis の統計を有効にする [97 ページ]。</p>
<code>multidimensional.services.asymmetric.autodrilling.enabled=true</code>	このフラグは、ドリルが非対称なデータプロバイダに対して自動ドリルを有効にするかどうかを示します。
<code>multidimensional.services.mde.alphabetic.sorting=true</code>	このフラグは、メタデータアイテム (つまり、特性および階層) をアルファベット順に並べ替えるかどうかを示します。
<code>multidimensional.services.prompt.dialog.show.all=false</code>	このフラグは、 [プロンプト] ダイアログボックスに、デフォルトで常にすべてのプロンプトを表示するか、それとも必要なプロンプトが存在する場合に表示するかを示します。
<code>multidimensional.services.variable.validation.enabled=true</code>	このパラメータを <code>true</code> に設定すると、ユーザが [プロンプト] ダイアログボックスに入力した値は自動的に検証されます。
<code>multidimensional.services.preload.metadata=true</code>	このパラメータでは、SAP BW または SAP HANA の階層および属性のメタデータをすべて一度に事前ロードするか、またはディメンションが展開されたときに遅延ロードするかを指定することができます。

パラメータ	説明
<code>multidimensional.services.member.selector.cache.limit=2000</code>	このパラメータを使用すると、 [メンバーセレクト] ダイアログボックスのメンバー数が2000以下のとき、メンバーが必ず MDAS にキャッシュされ、パフォーマンスが向上します。この設定値を大きくして、キャッシュ可能なメンバー数を増やすことができます。このプロパティはフラット特性にのみ適用されます。ただし、このパラメータは、セントラル管理コンソールの [フィルタ処理時に返される最大メンバー数] 設定を超えることはできません。
<code>multidimensional.services.enable.hana.http.connections=true</code>	このフラグは、HANA http 接続 (InA) が表示されるかどうかを示します。
<code>multidimensional.services.drillthrough.maxrows=10000</code>	このパラメータで、ドリルスルー結果に含まれる最大行数が定義されます。
<code>multidimensional.services.variable.support.single.wildcard.match=false</code>	<p>このフラグで、単一ワイルドカードマッチパターン "%+" が変数エントリでサポートされるかどうかを制御されます。</p> <p>バックエンド BW サーバーバージョンが 7.3 以降の場合のみ、値を true に設定してください。</p> <p>単一ワイルドカードマッチパターンがサポートされると、複数ワイルドカードマッチ文字 "*" がダブルエスケープになり、ダブルエスケープされた "*" 文字 (たとえば "%*%") をサポートするのは、BW システムバージョン 7.3 以降のみです。</p>
<code>multidimensional.services.preload.memberset.filter=true</code>	このフラグは、フィルタにある各ノードの下位ノードがプリフェッチされるかどうかを示します。
<code>multidimensional.services.enable.hana.default.date.format=false</code>	このパラメータにより、HANA 接続に対して HANA デフォルト日付書式 (yyyy-MM-dd) が有効になります。
<code>multidimensional.services.enable.bics.traces=false</code>	このフラグにより、BICS 低レベルトレーシングが有効になります。(トレースは標準 MDAS I ログファイルに出力されます。)
<code>multidimensional.services.enable.hana.format.from.pvl=false</code>	<p>このフラグにより、PVL からの HANA 日付/数値書式が有効になります (そしてプロパティ <code>multidimensional.services.enable.hana.default.date.format</code> が上書きされます)。</p>

パラメータ	説明
<code>multidimensional.services.skip.loading.bicsliceaxisdata=PARTIAL</code>	<p>このパラメータは、レポートが開くときに BicsSliceAxisData のロードをスキップするかどうかを示します。</p> <p>次の値を設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> NONE の場合、階層メンバの一覧がバックグラウンドフィルタから削除されます。 PARTIAL の場合、バックグラウンドフィルタ用にメンバのサブセットがロードされます。 COMPLETE の場合、メンバのリストがすべてロードされるので、メンバ数が正確になります。ただし、このオプションのほうがりソースが多く消費されます。 <p>値を NONE に設定すると、Excel にエクスポートされるレポートでバックグラウンドフィルタ情報を表示できません。</p>
<code>multidimensional.services.synchronize.connection.factory=false</code>	このフラグは、データベースに接続するメカニズムで問題が発生した場合に接続登録を同期するかどうかを示します。
<code>multidimensional.services.asynchronous.close.requests=true</code>	このフラグは、非同期クローズ依頼を許可して、Tomcat HTTP セッションクリーンアップメカニズムがブロックされるのを防止するかどうかを示します。
<code>multidimensional.services.bw.sso.cache.validity=90</code>	BW SSO キャッシュ有効期間 (秒)。(値を 0 に設定すると、キャッシュが無効化され、常に 110 秒未満を維持します。)
<code>multidimensional.services.drillthrough.maxqueries=16</code>	このプロパティにより、複数のメンバがフィルタコンテキストで 사용되는場合にドリルスルーアクションにおけるクエリ数の上限が定義されます。

関連情報

[セッションのタイムアウト設定 \[22 ページ\]](#)

[エクスポートの制限 \[21 ページ\]](#)

[SAP BW サーバで Analysis の統計を有効にする \[97 ページ\]](#)

7.6.2.2 mdas_oda.properties パラメータ

パラメータ	説明
<code>APPLICATION_NAME = SAP Analysis OLAP</code>	SQL Server Profiler を使用した MSAS イベントの監視時に、MSAS データソースにアクセスするクライアントアプリケーション (XMLA 経由の SAP Analysis OLAP など) を指定します。

パラメータ	説明
DRILL_THROUGH_SHORT_COLUMN_NAME = true	[ドリルスルー] ウィンドウで、ラベル列名の最初および最後の部分を表示または非表示にすることができます。
ENABLE_ORACLE_OLAP = true	デフォルトでは、このパラメータは無効です。このパラメータを有効にして true に設定すると、セントラル管理コンソールの OLAP 接続のプロバイダー一覧にある Oracle OLAP データプロバイダを有効にすることができます。
ENABLE_LEAF_MEMBERS_HIDING = false	true に設定した場合、このパラメータを使用してクロスタブに [リーフメンバー] をドラッグアンドドロップすることができます。

7.6.3 MDAS クライアント設定ファイル (mdaclient.properties)

mdaclient.properties ファイルには、以下のパラメータが含まれます。

- 別のサーバリクエストを行う前に返される行数
- 別のサーバリクエストを行う前に返される列数
- 行、列、およびセル数情報の可視性
- [ジャンプリンク] ダイアログボックスで常にメンバーキーが使用されるか、または [レイアウト] パネルの [表示方法] 設定が使用されるかを選択するための設定
- カスタムグループに追加できる階層の最大数
- アプリケーションが Internet Explorer で OpenDoc モードで開くときに quirks レンダリングモードを使用
- SAP BW および SAP HANA データソースの複合選択プロンプトで使用するデフォルトオペランド
- コメントの表示と編集の有効化
- 次の検索でデフォルトの検索タイプとして使用するための、ユーザ設定で階層ごとに最後に使用された検索タイプの保存





7.6.3.1 mdaclient.properties パラメータ

パラメータ	説明
crosstab.rowsize=199	サーバに対して新たに要求を行う前にクロスタブが要求する行数を設定します。0 ベースの値は、60 行を取得するとした場合、値は 59 に設定する必要があることを意味します。
crosstab.columnsize=23	サーバに対して新たに要求を行う前にクロスタブが要求する列数を設定します。0 ベースの値は、40 列を取得するとした場合、値は 39 に設定する必要があることを意味します。
crosstab.showcountinfo=true	クロスタブの上部での行、列、およびセル数の情報の可視性を設定します。このパラメータを有効にするには、値を true に設定します。

パラメータ	説明
<code>crosstab.jumplink.overridekey=true</code>	[ジャンプリンク] ダイアログボックスでユーザインタフェースに表示されるメンバー表示文字列ではなく、メンバーキーを使用するかどうかを設定します。値 <code>true</code> を設定すると、ダイアログボックスではキーが使用され、値 <code>false</code> を設定すると、ユーザインタフェースに表示される文字列が使用されます。このプロパティは、サーバでキーがサポートされている場合 (つまり、SAP BW) にのみ有効です。そうでない場合、ダイアログボックスでは常にユーザインタフェースの表示文字列が使用されます。
<code>customgroup.dialog.maxhierarchies=4</code>	カスタムグループに使用できる最大階層を設定します。
<code>opendoc.quirks.mode=false</code>	アプリケーションが Internet Explorer に OpenDoc モードで表示されている場合に、Quirks レンダリングモードを使用する必要があるかどうかを設定します。
<code>prompt.enable.default.operator = =</code>	複合選択プロンプトのデフォルトオペランドを設定します。デフォルトでは、オペランドは等しいに設定されます。 たとえば、オペランドをより大きくに変更するには、パラメータを <code>prompt.enable.default.operator = ></code> のように設定します。
<code>enable.cell.comments=true</code>	セルでのコメントの表示およびコメントの編集について設定します。
<code>enable.search.type.preferences=true</code>	階層での次の検索のデフォルトとして階層ごとに使用される、検索タイプのユーザ設定 (キーまたはテキスト) の保存について設定します。

7.7 MDAS プロパティおよびメトリクス

CMC では、MDAS メトリクスにアクセスし、MDAS プロパティを設定できます。メトリクスおよびプロパティにアクセスするには、以下の手順を実行します。

1.  CMC の [整理] エリアで、[サーバ] を選択します。
2.  サービスカテゴリ  *Analysis Services*  を選択します。
3. [Adaptive Processing Server] インスタンスをダブルクリックします。

これで、MDAS プロパティを設定、またはナビゲーション枠から [メトリクス] ページにアクセスできます。

7.7.1 プロパティページ[フロパティページ]

[プロパティ] ページには、Adaptive Processing Server の設定、および MDAS などの実行中のサービスが含まれます。

サーバプロパティの詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの「“サーバプロパティ”」に関する付録を参照してください。

Multi Dimensional Analysis Service プロパティ

- **クライアントセッションの最大数:** この設定では、指定した MDAS で同時に開くことができるセッションの最大数を定義します。開いているセッション数がこの値に達した場合、さらに別の Analysis セッションを起動すると、“サーバ使用不可”エラーメッセージが表示されます。この値を変更すると、自信のニーズと使用可能なハードウェアに応じて MDAS のパフォーマンスを最適化できます。ただし、この値を増やすと、MDAS とデータベースサーバの両方でパフォーマンスに問題が生じる場合があります。
- **クエリによって返される最大セル数:** この設定により、管理者は単一クエリでユーザーに返されるセルの最大数を制御することができます。ユーザーは、大量のセルを返したりメモリを大量に消費するクエリを実行できなくなります。ユーザーのクエリがこのセル限界を超えると、ユーザーがエラーメッセージを受信します。
- **フィルタリング時に返される最大メンバー数:** この設定により、管理者はメンバーでのフィルタリング時に取得するメンバー数を制御することができます。取得メンバー数が非常に多い場合は、メモリを大量に消費します。

以下のような場合に、多数のメンバーを取得できます。

- 大きなフラットリストを含む [“メンバー別フィルタ”] パネルを開く場合。
- 大きな階層を含む [“メンバー別フィルタ”] パネルを完全展開したツリーで開く場合。
- 多くの子を持つ親メンバーを展開する場合。
- リーフメンバーレベルを表示する場合。
- アスタリスクワイルドカード文字 “*” を使用してメンバーを検索する場合。

7.7.2 [メトリクス] ページ

[メトリクス] ページには、Adaptive Processing Server、および MDAS など実行中のサービスについての情報が表示されます。

サーバメトリクスの詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence Platform* 管理者ガイドの「“サーバメトリクス”」に関する付録を参照してください。

Multi Dimensional Analysis Service メトリクス

- **セッション数:** この設定は、Analysis クライアントから MDAS への現在の接続数を示します。クライアントが複数のワークスペースを開いている場合は、各ワークスペースがタイムアウトしていない接続を表します。
- **クエリ数:** Analysis クライアントとデータベースサーバ間で開かれているデータリクエスト数です。アクティブなクエリは、任意のアクティブなセッションと任意のアクティブなデータソースの間に成立します。
- **キューブ数:** この設定は、上のアクティブなセッション数で示した、タイムアウトしていない接続にデータを提供するために使用されているデータソースの数を示します。

8 データソース接続

8.1 OLAP データソース接続の作成

Analysis, edition for OLAP でビジネスデータを操作できるようにするには、Analysis ワークスペースに追加する OLAP データソースへの接続を作成する必要があります。

OLAP データソース接続は、Analysis が OLAP データソースに接続するために必要なすべての情報を含む BI プラットフォームリポジトリオブジェクトです。この接続オブジェクトは、Analysis ワークスペースにリンクされます。

各 OLAP キューブまたは SAP BW クエリ、または多くのキューブとクエリを含むデータソースシステムに接続を作成できます。ユーザがデータソースのシステム接続をワークスペースに追加する場合、システムから各キューブまたはクエリを選択する必要があります。

セントラル管理コンソール (CMC) で、新しい Analysis データソースの接続オブジェクトを作成し、既存の接続オブジェクトを管理します。接続は単一フォルダに保存、またはサブフォルダを作成して、接続オブジェクトと一緒にグループ化し、アクセス権を管理することができます。たとえば、SAP BW データソース接続用のフォルダと、Microsoft Analysis Services データソース接続用の別フォルダを作成し、ユーザにいずれかのフォルダのみのアクセス権を付与することができます。

データソース接続を作成すると、これらのデータソースは [Analysis Web クライアント](#) の [データソースを開く] ダイアログボックスのデータソースの一覧に表示され、ユーザが自分のワークスペースに追加できるようになります。

[[データソースを開く](#)] ダイアログボックスで、タブビューをデフォルトの [[検索](#)] タブから [[フォルダ](#)] タブに変更することができます。

⚠ 警告

BI プラットフォーム 4.3 には BICS3 コンポーネントが付属しています。BI プラットフォームは、SAP HANA および SAP HANA HTTP プロバイダとともに、SAP HANA 2.X プロバイダもサポートしています。ただし、アプリケーションで使用される JDBC コネクタは BICS3 コンポーネントに付属していないため、Analysis, edition for OLAP では SAP HANA HTTP プロバイダとの OLAP 接続のみがサポートされます。Analysis, edition for OLAP 4.3 では、SAP HANA または SAP HANA 2.X プロバイダを使用した OLAP 接続はサポートされていません。SAP HANA プロバイダとの OLAP 接続を使用する場合は、HTTP プロバイダを使用していることを確認してください。そうでない場合は、SAP HANA データソースに基づくワークスペースの接続設定を変更し、プロバイダを SAP HANA HTTP に変更してください。

接続設定を変更するには、[この節 \[86 ページ\]](#) を参照してください。

① 注記

Analysis クライアントアプリケーションでは、CMC でフォルダ別に整理する場合でもすべてのデータソースがフラットリストに表示されます。

① 注記

OLAP 接続は、SAP Crystal Reports、SAP BusinessObjects Web Intelligence、およびインフォメーションデザインツールなど、その他のアプリケーションと共有されます。



関連情報

[MSAS 接続用の IIS 設定 \[99 ページ\]](#)

[Analysis データソース接続の管理 \[84 ページ\]](#)

[\[データソースを開く\] ダイアログボックスでタブビューを変更する \[69 ページ\]](#)

8.1.1 データソースシステムの新規接続オブジェクトを作成する

1. セントラル管理コンソールを起動します。
たとえば、Windows の場合、**スタート** > **すべてのプログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。
2. セントラル管理コンソールにログオンします。
3.  CMC の [整理] エリアで、**[OLAP 接続]** を選択します。
4. 新規接続を格納するフォルダを選択します。
接続フォルダまたは任意のサブフォルダを選択するか、または新規サブフォルダを作成することができます。
5.  **[新しい接続]** をクリックします。
6. 接続の [名前] と [説明] (オプション) を入力します。
7. 次の一覧から OLAP プロバイダを選択します。
8. サーバ名など、プロバイダ固有のサーバ情報を入力します。
9. 認証の種類を選択します。
10. **[保存]** をクリックすると接続が作成されます。
これで、接続をワークスペースに追加できます。



関連情報

[データソース接続設定 \[73 ページ\]](#)

[キューブまたはクエリの検索 \[66 ページ\]](#)

[OLAP データソース接続の作成 \[64 ページ\]](#)

8.1.2 キューブまたはクエリの新規接続オブジェクトを作成する

1. セントラル管理コンソールを起動します。
たとえば、Windows の場合、**スタート** > **すべてのプログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。
2. セントラル管理コンソールにログインします。
3.  CMC の [整理] エリアで、[OLAP 接続] を選択します。
4. 新規接続を格納するフォルダを選択します。
接続フォルダまたは任意のサブフォルダを選択するか、または新規サブフォルダを作成することができます。
5.  [新しい接続] をクリックします。
6. 接続の [名前] と [説明] (オプション) を入力します。
7. 次の一覧から OLAP プロバイダを選択します。
8. サーバ名など、プロバイダ固有のサーバ情報を入力します。
9. [接続] をクリックします。
10. 必要に応じて認証情報を入力し、[OK] をクリックします。
11. [キューブブラウザ] で、この接続に使用するキューブまたはクエリを選択し、[選択] をクリックします。
キューブブラウザのフォルダから手動で参照してキューブまたはクエリを検索、またはキューブを検索することができます。
12. 認証の種類を選択します。
13. [保存] をクリックすると接続が作成されます。
これで、接続をワークスペースに追加できます。

関連情報

[データソース接続設定 \[73 ページ\]](#)

[キューブまたはクエリの検索 \[66 ページ\]](#)

[OLAP データソース接続の作成 \[64 ページ\]](#)

8.1.3 キューブまたはクエリの検索

キューブブラウザは、データソースシステム内のキューブまたは SAP BW クエリの検索に役立つ検索機能を提供します。

キューブブラウザでの検索

キューブブラウザの上部にあるテキストフィールドに検索文字列を入力して、キューブまたは SAP BW クエリを検索します。

① 注記

SAP BW データソースの場合は、データソースは [\[キャプション\]](#) または [\[名前\]](#) 別で表示できます。この選択は検索自体には影響しません。検索条件に関係しない検索結果を受け取る場合は、[\[名前\]](#) と [\[キャプション\]](#) を切り替えて、検索条件に関連する結果を表示します。

キューブまたはクエリが検索文字列に一致しない場合は、“キューブは検索されません。”というエラーメッセージが表示されます。



検索結果をクリアして完全データソースリストに戻るには、[\[キューブリストに戻る\]](#) ボタンを使用します。

Analysis は、一般的なインターネット検索エンジンと同じ検索方式を使用します。

検索文字列	検索結果
sales	sales reports および store sales など、 sales という単語を名前に含むキューブとクエリをすべて検索します。 <div><h3>① 注記</h3><p>sales を検索する場合、sales2008 というキューブは検索されません。sales2008 を検索するには、sales* を指定して検索します。検索でのワイルドカードの使用の節を参照してください。</p></div>
"sales reports"	引用符で囲まれるテキストが完全に名前に含まれるキューブのみを検索します。 <p>この例では、sales reports は検索されますが、sales and purchase reports は検索されません。</p>
sales reports	複数の単語には明示されない AND が含まれるため、この例の検索では、名前に sales および reports の両方が含まれるすべてのキューブとクエリを検索します。 <ul style="list-style-type: none">• sales reports• sales and purchase reports
sales OR reports	sales または reports という単語のいずれかが名前に含まれるキューブとクエリを検索します。 <p>OR は大文字にする必要があります。</p> <p>この例では、以下の名前のキューブとクエリが検出されます。</p> <ul style="list-style-type: none">• sales reports• purchase reports• reports• store sales

① 注記

検索する語では大文字と小文字が区別されません。**sales**を検索することは、**Sales**、**SALES**、**saLEs**を検索することと同じです。



検索でのワイルドカードの使用

ワイルドカード文字を検索文字列で 사용할 수 있습니다.

ワイルドカード	意味
---------	----

*	0 個以上の文字列を表します。たとえば、 sales* を検索すると、 sales と sales2008 の両方が検索されます。
---	--

8.1.4 接続オブジェクトをコピーする

1. セントラル管理コンソールを起動します。
たとえば、Windows の場合、▶ **スタート** ▶ **すべてのプログラム** ▶ **SAP Business Intelligence** ▶ **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** ▶ **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** ▶ をクリックします。
2. セントラル管理コンソールにログインします。
3.  CMC の [整理] エリアで、[**OLAP 接続**] を選択します。
4. コピーする接続を選択します。
5.  [**接続のコピー**] をクリックします。
6. 接続の [名前] と [説明] (オプション) を入力します。
コピーした接続をこの場で保存するか、接続の設定を変更するか選択できます。
7. [**保存**] をクリックすると接続が作成されます。
これで、接続をワークスペースに追加できます。

関連情報

[データソース接続設定 \[73 ページ\]](#)

8.1.5 【データソースを開く】ダイアログボックスでタブビューを変更する

[データソースを開く] ダイアログボックスで、タブビューをデフォルトの [検索] タブから [フォルダ] タブに変更することができます。

1. アプリケーションサーバ (例: Tomcat) を停止します。
2. <BOE INSTALL DIRECTORY>%SAP BusinessObjects%tomcat%webapps%BOE%WEB-INF%config%default に移動します。
3. **mdaclient.properties** を開き、次のプロパティを検索します。#For defed(true) and folder(false)
opendatasource.systemconnection.default.isFindTab=true
4. フォルダタブの表示を変更するには、プロパティを false に設定します。
opendatasource.systemconnection.default.isFindTab = false
5. 変更を保存して、アプリケーションサーバを起動します。

8.1.6 認証

ユーザが新しいワークスペースを作成したり既存のワークスペースにログオンしたりするときに使用する、認証の種類を設定できます。

CMC への Analysis 接続を作成するときに、以下の認証タイプから選択できます。

プロンプト

接続にこのタイプを選択すると、Analysis が接続を初期化するときにダイアログボックスが表示され、エンドユーザにユーザ名とパスワードの入力が要求されます。

① 注記

Analysis では、ユーザ名とパスワードを暗号化しません。ユーザ名とパスワードを保護するには、Web アプリケーションサーバで SSL を有効にする必要があります。

定義済み

これを選択すると、管理者が特定のユーザ名とパスワードを入力し、それが接続オブジェクトの一部として格納されます。この接続オブジェクトに Analysis からアクセスする際には、バックエンドサーバへの認証には常に格納されたユーザ名とパスワードが使用されます。シングルサインオンと同様、この認証タイプでもエンドユーザは Analysis にユーザ名とパスワードを入力する必要はありません。ただし、この接続を介してキューブにアクセスする各ユーザは同じ認証情報を使用しているので、このオプションが必ずしも適切であるとは限りません。

認証情報マッピング

管理者は、認証情報マッピング認証モードを使用して、特定のユーザ固有の認証情報を使用して認証を設定できます。Analysis, edition for OLAP がデータベースに接続する必要がある場合、アプリケーションは、データソース参照およびユーザに対応する認証情報に対して CMS をチェックします。

認証情報マッピングはデータソース参照とともに機能します。データソース参照は、OLAP 接続にリンクする単純なコンテナです。これは次のように機能します。データソース参照を作成し、OLAP 接続の認証モードを認証情報マッピングに設定し、関連するデータベース参照に関連付けます。完了したら、データベース参照にユーザを割り当てます。認証情報マッピングを使用して接続にアクセスしようとしても、データソース参照が割り当てられていない場合は、エラーメッセージが表示されます。

SSO(シングルサインオン)

シングルサインオンオプションを選択した場合、ユーザは一度 BI 起動パッドにサインオンすると、次はユーザ名とパスワードを再度入力しなくても、Analysis でバックエンドサーバに接続することができます。Analysis は、MDAS 経由で、現在の BI 起動パッドセッションから認証情報を自動的に取得し、サーバに渡します。

次の OLAP プロバイダは、シングル サインオンをサポートしています。

プロバイダ	認証
SAP BW	セキュアネットワークコミュニケーションを含む SAP 認証
Microsoft Analysis Services	Windows Active Directory
SAP BusinessObjects Planning and Consolidation	Enterprise
SAP BusinessObjects Extended Analytics (v10 のみ)	Windows Active Directory、LDAP、または Enterprise
SAP BusinessObjects Profitability and Cost Management	Enterprise
SAP HANA	Enterprise

Microsoft Analysis Services では、シングルサインオンは、次の条件が満たされるときにのみ動作します。

1. SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームが、Java 環境の Active Directory 認証に対して正しく設定されている。SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドおよび技術資料 *Configuring Active Directory Authentication using Java Application Servers* (英語のみ) を参照してください。
2. すべての CMS インスタンスおよび MDAS インスタンスは同じドメインアカウントで起動されている。このサービスアカウントは、Active Directory で委任に対して信頼されている必要があります。
3. ユーザが、Active Directory 認証プラグインを使用して、BI 起動パッド にサインオンしている。

SAP HANA では、シングルサインオンは SAML (Security Assertion Markup Language) を使用して実装されています。SAML は BI プラットフォームと SAP HANA の両方で設定する必要があります。BI プラットフォームユーザと SAP HANA ユーザ間とのユーザマッピングも、SAP HANA で設定する必要があります。

SAP HANA でのシングルサインオン設定の詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドの「SAP HANA のシングルサインオン設定」の節を参照してください。SAP HANA SAML

設定の詳細については、SAP HANA Security Guide の「“Authentication Using SAML Bearer Token”」の節を参照してください。これらのガイドは、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) にあります。

8.2 接続設定を変更する

1. セントラル管理コンソールを起動します。

たとえば、Windows の場合、**スタート** > **すべてのプログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。


2. セントラル管理コンソールにログインします。

3.  CMC の [整理] エリアで、[OLAP 接続] を選択します。

既存の接続の一覧が表示されます。

① 注記

接続の一覧が表示されない場合は、新しい OLAP 接続を作成して、データアナリストが Analysis ワークスペースで作業を開始できるようにする必要があります。

4.  編集する接続を選択し、[接続の編集] をクリックします。

① 注記

BI プラットフォームシステムで "オブジェクトをフォルダに追加する" 権限を持っていない場合、接続は編集できず、[接続の編集] ボタンは使用できません。

これで、フィールドの内容を変更し、OLAP 接続を再設定することができます。

5. [保存] をクリックして、新しい接続設定を保存します。

関連情報


[接続設定を変更する \[71 ページ\]](#)

[データソース接続設定 \[73 ページ\]](#)

8.2.1 接続設定を変更する

1. セントラル管理コンソールを起動します。

たとえば、Windows の場合、**スタート** > **すべてのプログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。

- セントラル管理コンソールにログインします。
-  CMC の [整理] エリアで、[OLAP 接続] を選択します。

既存の接続の一覧が表示されます。

① 注記

接続の一覧が表示されない場合は、新しい OLAP 接続を作成して、データアナリストが Analysis ワークスペースで作業を開始できるようにする必要があります。

-  編集する接続を選択し、[接続の編集] をクリックします。

① 注記

BI プラットフォームシステムで "オブジェクトをフォルダに追加する" 権限を持っていない場合、接続は編集できず、[接続の編集] ボタンは使用できません。

これで、フィールドの内容を変更し、OLAP 接続を再設定することができます。

- [保存] をクリックして、新しい接続設定を保存します。

関連情報

[接続設定を変更する \[71 ページ\]](#)

[データソース接続設定 \[73 ページ\]](#)

8.3 接続の削除

使用しなくなったデータソース接続は削除できます。


① 注記

ワークスペースで使用中の接続を削除すると、それらのワークスペースは正しく表示されません。したがって、接続を削除する前に、セントラル管理コンソールでその接続を使用しているワークスペースがないことを確認する必要があります。

関連情報

[データソース接続を使用するワークスペースの一覧の表示 \[85 ページ\]](#)


8.3.1 接続を削除する

1. セントラル管理コンソールを起動します。
たとえば、Windows の場合、[▶ スタート ▶ すべてのプログラム ▶ SAP Business Intelligence ▶ SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4 ▶ SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール](#) をクリックします。
2. セントラル管理コンソールにログオンします。
3.  CMC の [整理] エリアで、[\[OLAP 接続\]](#) を選択します。
既存の接続の一覧が表示されます。
4. 削除する接続を選択します。
5. メニューから、[▶ 管理 ▶ 削除](#) を選択します。

8.4 別のフォルダへの接続の移動

CMC のフォルダ間でデータソース接続を移動することができます。

8.4.1 接続オブジェクトを移動する

1. セントラル管理コンソールを起動します。
たとえば、Windows の場合、[▶ スタート ▶ すべてのプログラム ▶ SAP Business Intelligence ▶ SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4 ▶ SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール](#) をクリックします。
2. セントラル管理コンソールにログオンします。
3.  CMC の [整理] エリアで、[\[OLAP 接続\]](#) を選択します。
4. 移動する接続を選択します。
5. [▶ 整理 ▶ 移動先](#) をクリックします。
6. 出力先フォルダを選択し、[\[移動\]](#) をクリックします。

8.5 データソース接続設定

ここでは、サポートされているすべての OLAP データソースに対するプロバイダ固有の接続設定について説明します。

- [SAP Business Warehouse データソースの接続設定 \[74 ページ\]](#)
- [Microsoft Analysis Services データソースの接続設定 \[75 ページ\]](#)

- [Oracle Essbase データソースの接続設定 \[83 ページ\]](#)
- [SAP BusinessObjects Profitability and Cost Management データソースの接続設定 \[76 ページ\]](#)
- [SAP BusinessObjects Extended Analytics データソースの接続設定 \[77 ページ\]](#)
- [SAP BusinessObjects Planning and Consolidation データソースの接続設定 \[77 ページ\]](#)
- [SAP HANA データソースの接続設定 \[78 ページ\]](#)
- [Teradata データソースの接続設定 \[82 ページ\]](#)
- [Oracle OLAP データソースの接続設定 \[83 ページ\]](#)

詳細については、これらの製品のマニュアルを参照してください。

8.5.1 SAP Business Warehouse データソースの接続設定

アプリケーション サーバーへの接続

SAP BW アプリケーション サーバーに直接接続するには、[サーバーの種類] で [サーバー] を選択します。アプリケーション サーバーとの接続を確立するには、次の情報が必要です。

- システム: 3 文字の SAP システム ID
- サーバ: アプリケーションサーバの名前または IP アドレス
- システム番号
- クライアント: 3 桁のクライアント番号

ログオン グループへの接続

ログオン グループに接続して SAP 負荷分散を利用できます。ログオン グループに接続するには、[サーバーの種類] で [グループ] を選択します。ログオン グループとの接続を確立するには、次の情報が必要です。

- システム: 3 文字の SAP システム ID
- グループ名: ログオングループの名前
- メッセージサーバ: メッセージサーバの名前または IP アドレス
- クライアント: 3 桁のクライアント番号

言語の設定

[言語] フィールドには、2 文字の ISO 文字コードを入力できます。たとえば、英語の場合は **EN**、ドイツ語の場合は **DE**、フランス語の場合は **FR** を入力します。ここで入力する言語コードは、データソースを選択するためにサーバに接続するときに使用されます。

また、言語コードをデータソース接続オブジェクトの一部として保存するかどうかを選択できます。言語を保存するを選択すると、そのデータソースを参照するすべての Analysis ワークスペースは、指定した言語でログインします。

言語を保存しないを選択すると、そのデータソースを参照する Analysis ワークスペースは、ユーザのアクティブな BI プラットフォームセッションの言語でログインします。

認証の種類

SAP BW データ ソースでは、次の種類の認証がサポートされます。

- プロンプト
データ ソースへの認証に SAP ユーザー名とパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。
- SSO
ユーザが Analysis ワークスペースを開くと、アプリケーションはユーザの現在の BI プラットフォームセッションから SAP ログオン情報を取得します。ユーザは、ユーザ名やパスワードを入力する必要はありません。このオプションを使用するには、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームを SAP 認証用に正しく設定する必要があります。詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの「SAP 認証」の節を参照してください。
- 定義済み
接続時に保存された SAP ユーザ名とパスワードを使用してデータソースに接続します。

最大並列クエリ数

他の接続と並列に、特定の接続のデータにアクセスする最大数のクエリを実行します。

複数のデータプロバイダでドキュメントを最新表示すると、**最大並列クエリ数**設定によって、他の接続と同時かつ並列にデータにアクセスするクエリが実行されます。

クエリの並列最新表示の詳細については、『SAP BusinessObjects Web Intelligence ユーザガイド』を参照してください。

① 注記

最大並列クエリ数設定は CMC で編集可能ですが、Analysis, edition for OLAP では**最大並列クエリ数**設定は無視されます。

8.5.2 Microsoft Analysis Services データソースの接続設定

これらの接続設定は、Microsoft SQL Server 2012 Analysis Services などの Microsoft OLAP データ ソースで設定できます。

設定	説明
サーバ情報	<p>サーバの XMLA 要求を処理する IIS インスタンスに URL を提供することで、Analysis Services サーバ上でキューブに接続します。例:<code>http://<IIS_servername>/olap/msmdpump.dll</code>。ここでの <code><IIS_servername></code> は IIS サーバの名称です。すべてが 1 つのサーバにインストールされている場合は、<code>localhost</code> を IIS サーバ名として使用できます。</p>
認証の種類	<p>ユーザが新しいワークスペースを作成したり既存のワークスペースにログオンしたりするときに使用する、認証の種類を設定します。次のオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • プロンプト 常にユーザにログオン認証を要求します。 • SSO(シングルサインオン) ユーザが BI 起動パッドセッションにログオンするときに入力する認証情報を使用します。 • 定義済み 管理者が接続を作成したときに指定したユーザ名とパスワードを常に使用します。
言語	<p>一覧から言語を選択します。</p> <p>選択した言語は、データソースを選択するためにサーバに接続するときに使用されます。</p>
言語の保存	<p>言語をデータソース接続オブジェクトの一部として保存する場合は、このチェックボックスをオンにします。言語を保存するを選択すると、そのデータソースを参照するすべての Analysis ワークスペースは、指定した言語でログインします。</p> <p>言語を保存しないを選択すると、そのデータソースを参照する Analysis ワークスペースは、ユーザのアクティブな BI プラットフォームセッションの言語でログインします。</p>
最大並列クエリ数	<p>他の接続と並列に、特定の接続のデータにアクセスする最大数のクエリを実行します。</p> <p>複数のデータプロバイダでドキュメントを最新表示すると、最大並列クエリ数の設定によって、他の接続と同時かつ並列にデータにアクセスするクエリが実行されます。</p> <p>クエリの並列最新表示の詳細については、『SAP BusinessObjects Web Intelligence ユーザガイド』を参照してください。</p> <div style="background-color: #f0f0f0; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>① 注記</p> <p>最大並列クエリ数の設定は CMC で編集可能ですが、Analysis, edition for OLAP では最大並列クエリ数の設定は無視されます。</p> </div>

詳細については、Microsoft の Analysis Services に関するマニュアルを参照してください。このマニュアルは、Microsoft SQL Server Analysis Services と共に提供されるか、<http://msdn.microsoft.com/library/> の MSDN Web サイトで入手できます。

SQL Server 分析サービスへの HTTP アクセスの設定については、Microsoft の記事 <http://technet.microsoft.com/en-us/library/gg492140.aspx> を参照してください。

8.5.3 SAP BusinessObjects Profitability and Cost Management データソースの接続設定

以下の接続設定は、Profitability and Cost Management データソースで設定できます。

設定	説明
サーバ情報	サーバの XMLA 要求を処理する Web サーバに URL を提供することで、Profitability and Cost Management サーバ上でキューブに接続します。
認証の種類	<p>ユーザが新しいワークスペースを作成したり既存のワークスペースにログオンしたりするときに使用する、認証の種類を設定します。次のオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • プロンプト 常にユーザにログオン認証を要求します。 • SSO(シングルサインオン) ユーザが BI 起動パッドセッションにログオンするときに入力する認証情報を使用します。 • 定義済み 管理者が接続を作成したときに指定したユーザ名とパスワードを常に使用します。

詳細については、Profitability and Cost Management のマニュアルを参照してください。

8.5.4 SAP BusinessObjects Extended Analytics データソースの接続設定

次の接続設定は、Extended Analytics データソースで設定できます。

設定	説明
サーバ情報	サーバの XMLA 要求を処理する Web サーバに URL を提供することで、Extended Analytics サーバ上でキューブに接続します。
認証の種類	<p>ユーザが新しいワークスペースを作成したり既存のワークスペースにログオンしたりするときに使用する、認証の種類を設定します。次のオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • プロンプト 常にユーザにログオン認証を要求します。 • SSO (シングルサインオン) (Extended Analytics バージョン 10 のみで使用可能) ユーザが BI 起動パッドセッションにログオンするときに入力する認証情報を使用します。 • 定義済み 管理者が接続を作成したときに指定したユーザ名とパスワードを常に使用します。

詳細については、Extended Analytics のマニュアルを参照してください。

8.5.5 SAP BusinessObjects Planning and Consolidation データソースの接続設定

以下の接続設定は、Planning and Consolidation 7.5 および Planning and Consolidation 10, version for the Microsoft Platform データソースで設定できます。

設定	説明
サーバ情報	サーバの XMLA 要求を処理する Web サーバに URL を提供することで、Planning and Consolidation サーバ上でキューブに接続します。
認証の種類	<p>ユーザが新しいワークスペースを作成したり既存のワークスペースにログオンしたりするときに使用する、認証の種類を設定します。次のオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • プロンプト 常にユーザにログオン認証を要求します。 • SSO(シングルサインオン) ユーザが BI 起動パッドセッションにログオンするときに入力する認証情報を使用します。 • 定義済み 管理者が接続を作成したときに指定したユーザ名とパスワードを常に使用します。
最大並列クエリ数	<p>他の接続と並列に、特定の接続のデータにアクセスする最大数のクエリを実行します。</p> <p>複数のデータプロバイダでドキュメントを最新表示すると、最大並列クエリ数の設定によって、他の接続と同時かつ並列にデータにアクセスするクエリが実行されます。</p> <p>クエリの並列最新表示の詳細については、『SAP BusinessObjects Web Intelligence ユーザガイド』を参照してください。</p> <div> <p>① 注記</p> <p>最大並列クエリ数は NetWeaver のみを対象としています。</p> </div> <div> <p>① 注記</p> <p>最大並列クエリ数の設定は CMC で編集可能ですが、Analysis, edition for OLAP では最大並列クエリ数の設定は無視されます。</p> </div>

Planning and Consolidation 10, version for SAP technology への接続では、SAP Business Warehouse 接続と同じ設定が使用されます。詳細については、[SAP Business Warehouse データソースの接続設定 \[74 ページ\]](#)を参照してください。

詳細については、Planning and Consolidation のマニュアルを参照してください。

8.5.6 SAP HANA データソースの接続設定

⚠ 警告

BI プラットフォーム 4.3 には BICS3 コンポーネントが付属しています。BI プラットフォームは、SAP HANA および SAP HANA HTTP プロバイダとともに、SAP HANA 2.X プロバイダもサポートしています。ただし、アプリケーションで使用される JDBC コネクタは BICS3 コンポーネントに付属していないため、Analysis, edition for OLAP では SAP HANA HTTP プロバイダとの OLAP 接続のみがサポートされます。Analysis, edition for OLAP 4.3 では、SAP HANA または SAP HANA 2.X プロバイダを使用した OLAP 接続はサポートされていません。SAP HANA プロバイダとの OLAP 接続を使用する場合は、HTTP プロバイダを使用していることを確認してください。そうでない場合は、SAP HANA データソースに基づくワークスペースの接続設定を変更し、プロバイダを SAP HANA HTTP に変更してください。

接続設定を変更するには、[この節 \[86 ページ\]](#)を参照してください。

次の接続設定は、SAP HANA データソースで設定できます。

設定	説明
サーバ	サーバの名前を入力します。
インスタンス番号	接続用のインスタンス番号を入力します。
認証の種類	<p>ユーザが新しいワークスペースを作成したり既存のワークスペースにログオンしたりするときに使用する、認証の種類を設定します。次のオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none">• プロンプト 常にユーザにログオン認証を要求します。• SSO(シングルサインオン) SAML、および SAP HANA と BI プラットフォーム間のユーザマッピングを使用して認証します。• 定義済み 管理者が接続を作成したときに指定したユーザ名とパスワードを常に使用します。
拡張パラメータ	
言語	接続に使用する言語。
SSL を使用する	選択されている場合、ホストサーバへの接続に SSL プロトコルを使用します。
自動再接続	選択されている場合、接続に失敗すると、アプリケーションは自動的にホストサーバに再接続します。
フェッチサイズ	データベースからのフェッチごとに取得できる最大行数です。SAP HANA に対する OLAP 接続の推奨 [フェッチサイズ] は、7000 です。
最大セル数	1つのクエリから返されるセルの最大数です。この設定により、ユーザは大量のセルを返してメモリを大量に消費するクエリを実行できなくなります。ユーザのクエリがこのセル限界を超えると、ユーザがエラーメッセージを受信します。
クエリタイムアウト	データベースで実行されているクエリがタイムアウトになって強制終了されるまでの秒数です。
最大並列クエリ数	<p>他の接続と並列に、特定の接続のデータにアクセスする最大数のクエリを実行します。</p> <p>複数のデータプロバイダでドキュメントを最新表示すると、最大並列クエリ数の設定によって、他の接続と同時かつ並列にデータにアクセスするクエリが実行されます。</p> <p>クエリの並列最新表示の詳細については、『SAP BusinessObjects Web Intelligence ユーザガイド』を参照してください。</p>

① 注記

拡張パラメータは CMC で編集可能ですが、Analysis, edition for OLAP では拡張パラメータ設定が無視されます。

詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で提供されている SAP HANA のドキュメントを参照してください。

8.5.7 SAP HANA HTTP の接続設定

次の接続設定は、SAP HANA HTTP で設定できます。

設定	説明
サーバ	サーバの名前を入力します。
認証の種類	<p>ユーザが新しいワークスペースを作成したり既存のワークスペースにログオンしたりするときに使用する、認証の種類を設定します。次のオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none">• プロンプト 常にユーザにログオン認証を要求します。• SSO (シングルサインオン) SAML、および SAP HANA と BI プラットフォーム間のユーザマッピングを使用して認証します。• 事前定義済み 管理者が接続を作成したときに指定したユーザ名とパスワードを常に使用します。

詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で提供されている SAP HANA のドキュメントを参照してください。

8.5.7.1 SAP HANA HTTP の設定

SAP HANA appliance software を使用すると、Analysis で HTTP 接続を通して SAP HANA データソースを分析することができます。http(s) プロトコルを利用して SAP HANA プラットフォームに接続し、SAP HANA サーバと通信します。SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームを介して HTTP 接続で SAP HANA プラットフォームに接続することができます。この接続は、SAP BusinessObjects BI プラットフォームの CMC で直接作成することができます。

BI プラットフォームで SAP HANA HTTP 接続を作成するには、以下の前提条件を満たしている必要があります。

- SAP HANA プラットフォーム SPS09 以上のバージョンを使用している。
- デリバリユニット HCO_INA_SERVICE を使用した SAP HANA Info Access Service (InA) が HANA プラットフォームにデプロイされている。
詳細については、『SAP HANA 検索開発者ガイド』の [Info Access Service のインポート](#) の章を参照してください。
ロールはデリバリユニット HCO_INA_SERVICE に含まれています。権限 Schema_SYS_BIC、Schema_SYS_BI、および Schema_SYS_RT が選択されていることを確認してください。詳細については、SAP ノート [2097965](#) を参照してください。
- ロール `sap.bc.ina.service.v2.userRole::INA_USER` が割り当てられている。

8.5.7.2 BI プラットフォームでの SAP HANA HTTP 接続の作成

mdas.properties ファイルには MDAS プロパティ

multidimensional.services.enable.hana.http.connections が含まれています。

mdas.property ファイル内の MDAS プロパティのデフォルトパラメータは "true" です。

設定ファイルは、Windows の場合は <Install_Dir>\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI

4.0\java\pjs\services\MDAS\resources\com\businessobjects\multidimensional\services

に、Unix の場合は <Install_Dir>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/pjs/services/MDAS/resources/com/businessobjects/multidimensional/services にあります。

BI プラットフォームでは、セントラル管理コンソールで SAP HANA サーバへの HTTP 接続を作成することができます。

BI プラットフォームで SAP HANA HTTP 接続を作成するには、以下の手順に従います。

1. セントラル管理コンソール (CMC) にログインします。
2. [\[OLAP 接続\]](#) を選択します。
3. [\[新しい接続\]](#) を選択します。
4. 名前と説明を入力します。説明はオプションです。
5. [\[SAP HANA http\]](#) プロバイダを選択します。
6. [\[サーバ情報\]](#) として、以下の構造を持つ URL を入力します。

スキーマとして HTTPS を使用することをお奨めします。

SAP HANA XS のデフォルトの HTTP および HTTPS ポート設定には、以下の SAP HANA インスタンス番号が含まれています。

- HTTP: 80<SAP HANA instance>
- HTTPS: 43<SAP HANA instance>

例:

- SAP HANA インスタンスが 01 である場合、SAP HANA XS のデフォルトの HTTP ポートは 8001 です。
- SAP HANA インスタンスが 01 である場合、SAP HANA XS のデフォルトの HTTPS ポートは 4301 です。

このデフォルト設定を変更して、SAP HANA XS Web サーバ HTTP (80) または HTTPS (43) へのクライアントアクセスに標準ポート 80 および 43 が使用されるようにするといったことも可能です。

詳細については、『SAP HANA 管理ガイド』の [SAP HANA XS での標準 HTTP ポート番号の更新](#)の章を参照してください。

7. [\[認証\]](#) のタイプを選択します。

- [プロンプト](#)
接続にこのタイプを選択した場合、エンドユーザにユーザ名とパスワードの入力を求めるダイアログボックスが表示されます。
- [SSO \(シングルサインオン\)](#)
シングルサインオンオプションを選択した場合、ユーザは 1 回だけサインオンする必要があります。この接続の認証方法は SAML 2.0 です。
詳細については、『SAP HANA 管理ガイド』の [ユーザ認証およびシングルサインオン](#)および [SAP HANA XS アプリケーションのシングルサインオンの更新](#)の章を参照してください。

- **事前定義済み**

このオプションを選択した場合、管理者が特定のユーザとパスワードを入力し、それが接続オブジェクトの一部として格納されます。シングルサインオンと同様、この認証タイプでもエンドユーザはユーザ ID とパスワードを入力する必要はありません。

8. [保存] を選択して接続を作成します。

関連付けられているユニバースは SAP HANA HTTP 接続では無視されます。

新しい接続は [OLAP 接続] の一覧に表示されます。

このダイアログで既存の SAP HANA 接続を編集したり、削除したりすることもできます。

8.5.7.3 SAP HANA HTTP 接続のトラブルシューティング

SAP HANA HTTP 接続の URL の検証

1. 接続対象のサーバ名およびポートを含む URL を入力します。http(s)://
<server>:<port>/sap/bc/ina/service/v2/GetServerInfo
2. ブラウザを開き、URL を貼り付けます。
3. 以下のいずれかの応答があります。
 - HTTP 404 - not found
これは、サーバに到達できないこと (サーバの停止やファイアウォールによる保護などが原因)、または SAP HANA Info Access Service (InA) がデプロイされていないことを示しています。
 - ユーザとパスワードの入力を求めるダイアログが表示されます。
SSO アクセスを設定している場合、これはログオンの失敗を示しています。
 - サーバ機能に関する情報を含む JSON 形式の応答が返されます。
これはログオンの成功を示しています。

基本データベースアクセス権限の検証 (インデックスサーバ)

1. 接続対象のサーバ名およびポートを含むテスト用 URL を入力します。http(s)://
<server>:<port>/sap/bc/ina/service/v2/GetResponse?Request={%22Metadata%22:%22Expand%22:[%22Cubes%22]}}
2. ブラウザを開き、URL を貼り付けます。
3. エラーなしで応答が表示されることを確認します。

8.5.8 Teradata データソースの接続設定

次の接続設定は、Teradata OLAP データソースで設定できます。

設定	説明
サーバ情報	XMLA 要求を処理する Teradata サーバの URL を入力します。
認証の種類	<p>ユーザが新しいワークスペースを作成したり既存のワークスペースにログオンしたりするときに使用する、認証の種類を設定します。次のオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • プロンプト 常にユーザにログオン認証を要求します。 • 定義済み 管理者が接続を作成したときに指定したユーザ名とパスワードを常に使用します。

詳細については、Teradata のマニュアルを参照してください。

8.5.9 Oracle Essbase データソースの接続設定

次の接続設定は、Oracle Essbase データソースで設定できます。

設定	説明
サーバ情報	Essbase サーバの URL を入力します (必要であればポートを含めます)。ポートを指定しない場合、デフォルトポートの 1423 が使用されます。
認証の種類	<p>ユーザが新しいワークスペースを作成したり既存のワークスペースにログオンしたりするときに使用する、認証の種類を設定します。次のオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • プロンプト 常にユーザにログオン認証を要求します。 • 定義済み 管理者が接続を作成したときに指定したユーザ名とパスワードを常に使用します。

関連情報

[Essbase OLAP 接続のために BI プラットフォームを設定する \[17 ページ\]](#)

8.5.10 Oracle OLAP データソースの接続設定

次の接続設定は、Oracle OLAP Data Provider for SAP BusinessObjects Business Intelligence に接続するデータソースを使用して設定できます。

① 注記

このタイプのデータソース接続を作成する前に Oracle OLAP Data Provider をインストールして設定する必要があります。

設定	説明
サーバ情報	サーバの XMLA 要求を処理する Web サーバへの URL (<code>http://<server>:<port>/M40XmlaWebService/services/XmlaWebService/</code> など) を入力し、Oracle OLAP サーバのキューブに接続します。
認証の種類	<p>ユーザが新しいワークスペースを作成したり既存のワークスペースにログオンしたりするときに使用する、認証の種類を設定します。次のオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • プロンプト 常にユーザにログオン認証を要求します。 • 定義済み 管理者が接続を作成したときに指定したユーザ名とパスワードを常に使用します。

詳細については、Oracle OLAP のマニュアルを参照してください。

関連情報

[Oracle OLAP Data Provider for SAP BusinessObjects Business Intelligence \[24 ページ\]](#)

[Analysis に対して Oracle OLAP Data Provider を有効にする \[39 ページ\]](#)

8.6 Analysis データソース接続の管理

セントラル管理コンソール (CMC) は、Analysis のデータソース接続およびワークスペース、ユーザアカウント、アクセス権、フォルダ、サーバ設定、およびライセンスキーを管理する Web ベースの管理ツールです。CMC にアクセスするためには、BI プラットフォーム管理者である必要があります。


CMC へのログオン情報については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

CMC では、保存済み Analysis データソース接続オブジェクトのプロパティを変更することができます。データソースを使用するワークスペースの一覧も表示できます。

8.6.1 Analysis データソース接続のタイトルおよび説明の編集

CMC では、保存済み Analysis データソース接続オブジェクトのタイトルおよび説明プロパティを変更することができます。


8.6.1.1 既存のデータソース接続オブジェクトのプロパティを変更する

1. セントラル管理コンソールを起動します。
たとえば、Windows の場合、**スタート** ➤ **すべてのプログラム** ➤ **SAP Business Intelligence** ➤ **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** ➤ **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。
2. セントラル管理コンソールにログインします。
3.  CMC の [整理] エリアで、[OLAP 接続] を選択します。
すべてのデータソース接続の一覧が表示されます。
4. 接続をダブルクリックして、その [プロパティ] ページを開きます。
5. 必要な変更を行い、[保存] をクリックします。

8.6.2 データソース接続を使用するワークスペースの一覧の表示

Analysis データソース接続は複数のワークスペースで 사용할 수 있습니다。接続을 削除する 전에、その接続을 使用している 워크스페이스의 一覧가 空であることを 確認してください。


8.6.2.1 データソース接続を使用するワークスペースの一覧を表示する

1. セントラル管理コンソールを起動します。
たとえば、Windows の場合、**スタート** ➤ **すべてのプログラム** ➤ **SAP Business Intelligence** ➤ **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** ➤ **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。
2. セントラル管理コンソールにログインします。
3.  CMC の [整理] エリアで、[OLAP 接続] を選択します。
4. データソース接続を選択し、**アクション** ➤ **ワークスペース** を選択します。
または、接続を右クリックし、[ワークスペース] を選択します。
現在、そのデータソース接続を使用しているワークスペースの一覧が表示されます。

8.6.3 Analysis データソース接続へのアクセス権の変更

데이터소스 연결을 BI 플랫폼에 保存すると、CMC を使用してその 액세스권을 変更できます。

8.6.3.1 データソース接続へのアクセス権を変更する

1. セントラル管理コンソールを起動します。
たとえば、Windows の場合、**スタート** > **すべてのプログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。
2. セントラル管理コンソールにログインします。
3.  CMC の [整理] エリアで、[OLAP 接続] を選択します。
4. データソース接続を選択し、**管理** > **ユーザセキュリティ** をクリックします。
または、データソース接続を右クリックし、[ユーザセキュリティ] を選択します。
5. アクセス権を変更するユーザ名またはグループ名をクリックして、次に [セキュリティの割り当て] をクリックします。
6. 適切なアクセスレベルまたはアクセス権を割り当て、[OK] をクリックします。

① 注記


いずれかの継承チェックボックスがオンになっている場合には、割り当てたアクセスレベルまたはアクセス権よりも継承アクセス権が優先されます。アクセス権およびアクセスレベルの割り当ての詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドの「アクセス権の設定」の節を参照してください。

8.6.4 Analysis データソース接続の置換

場合によっては、ワークスペースで使用されている接続を別の接続に置換することがあります。データソースの置換理由は、以下のとおりです。

- ワークスペースで使用されていたデータソースが削除され、ワークスペースを開くことができない場合。
- たとえば、異なるサーバへの接続など、一部のデータソース接続の詳細は編集するが、既存のデータソース接続オブジェクトは変更しない場合。代わりに、新しいデータソース接続を作成し、この接続を使用するようにワークスペースを更新する場合。

8.6.4.1 データソース接続を置換する

1. セントラル管理コンソールを起動します。
たとえば、Windows の場合、**スタート** > **すべてのプログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。
2. セントラル管理コンソールにログインします。
3.  CMC の [整理] エリアで [フォルダ] または [個人用フォルダ] を選択します。

4. 必要に応じてフォルダを展開し、接続を置換するワークスペースを検索します。
5. ワークスペースを選択し、[アクション]メニューから[接続]を選択します。
6. 接続一覧のページの一番上にある[接続を置換]をクリックします。
7. [現在の接続]列で置換する接続を検索し、[置換]列で接続名の右にある矢印をクリックして使用できる接続の一覧を開きます。
8. この一覧から置換に使用する接続を選択します。
9. 同じ接続を使用するすべてのワークスペースに変更を適用する場合は、[すべてのワークスペースに変更を適用]オプションを選択します。
10. [保存]をクリックし、次に[閉じる]をクリックします。

接続を置換したら、BI 起動パッド でワークスペースを開き、ワークスペースが新しい接続にリンクされていることを確認します。

① 注記

現在の接続と新しい接続には、同じデータレイアウトを指定する必要があります。

① 注記

Analysis ワークスペースでは、すべての接続が異なっている必要があります。複数の接続を同一の新しい接続に置換する場合は、すべての接続が異なっていることを確認する必要があります。すべての接続が異なっていないと、ワークスペースは開きません。

① 注記

[すべてのワークスペースに変更を適用]オプションを選択しても、すでに新しい接続を使用しているワークスペースは変更されません。

8.7 レポート間インタフェースの接続の設定

8.7.1 レポート間インタフェースの SAP BW クエリターゲットの有効化

ユーザがレポート間インタフェース (RRI) を使用して SAP BW データソースターゲットにアクセスできるようにするには、RRI が設定された SAP BW データソースをホストするデータソースシステムへの接続を作成する必要があります。特定のクエリへの接続では、ユーザは RRI 経由でクエリにアクセスできません。そのため、システムへの接続を利用する必要があります。この接続を追加した後、ユーザは、クロスタブメンバーを右クリックして[ジャンプ]リストでクエリターゲットを選択することで、新しいデータソースを分析に追加できます。

RRI リンクは SAP BW の Business Explorer (BEx) クエリデザイナーで設定します。詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で SAP technology のドキュメントを参照してください。

関連情報

[OLAP データソース接続の作成 \[64 ページ\]](#)

8.7.2 RRI のシングルサインオンの有効化

Analysis のレポート間インタフェースでは、適切に設定することでシングルサインオン (SSO) を利用できます。

たとえば、ユーザが SAP Enterprise Portal にログオンしてから、Analysis ワークスペースを開くとしします。この場合、SAP Enterprise Portal、BI プラットフォーム、および認証を必要とする RRI ターゲットで SSO を設定する必要があります。

たとえば、ERP トランザクションなどの、SAP GUI for HTML 経由でアクセス可能な RRI ターゲットに対して SSO を設定できます。Analysis ユーザが SAP Enterprise Portal にログオンしている場合、認証情報を再入力せずに、RRI 経由で ERP トランザクションを開くことができます。

SAP BW データソース接続に対して SSO を有効化する場合は、SAP BW システムの認証の種類を SSO に設定する必要があります。詳細については、[データソース接続設定 \[73 ページ\]](#)を参照してください。

これらのコンポーネントに対する SSO の設定に関する詳細については、*Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの“SAP 認証”の節、および SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で提供されている SAP Technology Library のポータルセキュリティガイドを参照してください。

9 ワークスペースの管理

9.1 概要

セントラル管理コンソール (CMC) は、Analysis のデータソース接続およびワークスペース、ユーザアカウント、アクセス権、フォルダ、サーバ設定、およびライセンスキーを管理する Web ベースの管理ツールです。CMC にアクセスするためには、BI プラットフォーム管理者である必要があります。

CMC から、保存された Analysis ワークスペースのプロパティを変更できます。

9.2 Analysis ワークスペースのタイトル、説明、およびキーワードの編集

CMC または BI 起動パッドを使用して、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームに公開されている Analysis ワークスペースのタイトル、説明、およびキーワードを編集できます。

9.2.1 CMC で Analysis ワークスペースのタイトル、説明、およびキーワードを編集する

1. セントラル管理コンソールを起動します。

たとえば、Windows の場合、**スタート** ➤ **すべてのプログラム** ➤ **SAP Business Intelligence** ➤ **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** ➤ **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。

2. セントラル管理コンソールにログインします。



3. CMC の [整理] エリアで [フォルダ] または [個人用フォルダ] を選択します。

4. 必要に応じてフォルダを展開し、プロパティを編集するワークスペースを検索します。ワークスペースのタイトルをダブルクリックすると、[プロパティ] ページが開きます。

5. 必要な変更を行い、[保存] をクリックします。


9.2.2 BI 起動パッドで **Analysis** ワークスペースのタイトル、説明、およびキーワードを編集する

1. BI 起動パッドを起動してログオンします。
たとえば、Windows の場合、**スタート** > **すべてのプログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。
2. [ドキュメント] タブをクリックします。
3. 必要に応じてフォルダー一覧を展開し、プロパティを編集するワークスペースを検索し、ワークスペースのタイトルを選択します。
4. **表示** > **プロパティ** をクリックし、[プロパティ] ページを開きます。
5. 必要な変更を行い、[OK] をクリックします。

9.3 ワークスペースとリンクした接続の一覧の表示

Analysis ワークスペースは、複数のデータソース接続オブジェクトにリンクすることができます。

9.3.1 ワークスペースとリンクした接続オブジェクトの一覧を表示する

1. セントラル管理コンソールを起動します。
たとえば、Windows の場合、**スタート** > **すべてのプログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール** をクリックします。
2. セントラル管理コンソールにログオンします。
3.  CMC の [整理] エリアで [フォルダ] または [個人用フォルダ] を選択します。
4. 必要に応じてフォルダー一覧を展開し、接続を表示するワークスペースを検索します。
5. ワークスペースを選択し、**アクション** > **接続** をクリックします。
そのワークスペースとリンクしたすべての接続オブジェクトの一覧が表示されます。

10 ワークスペースの共有

10.1 OpenDocument URL を使用したワークスペースの共有

Analysis ワークスペースは、一意のドキュメント ID を含む OpenDocument URL を使用して共有できます。BI ラウンチパッドによってワークスペースを開く代わりに、ユーザは URL をクリックしてワークスペースに直接ジャンプできます。OpenDocument の詳細については、SAP ヘルプポータル (<http://help.sap.com>) にある *OpenDocument* によるドキュメントの表示を参照してください。

管理者は OpenDocument URL を使用して、よく使用される Analysis ワークスペースへの容易なアクセス手段を提供できます。たとえば、SAP Enterprise Portal で URL iView を作成し、Enterprise Portal、BI プラットフォーム、さらに必要であれば BEx クエリデータソースとの間でシングルサインオンを設定することができます。ユーザはこの iView を使用して、何度も認証情報を入力しなくても、Enterprise Portal から Analysis ワークスペースにアクセスできます。

10.1.1 パラメータ付き OpenDocument URL を使用したプロンプト値の設定

OpenDocument URL が SAP BW データソースをベースとするワークスペースを指し示している場合、ワークスペースを開く前に、ユーザに変数値の指定を求めるプロンプトが表示されることがあります。この手順をスキップするために、ワークスペースの必須の変数について値を指定するためのパラメータを URL に追加できます。適切にパラメータが付加された URL をユーザがクリックした場合は、[プロンプト] ダイアログボックスは表示されず、ユーザはすぐにワークスペースを表示できます。必要な場合は、ワークスペースを開いた後にプロンプトの値を変更できます。

1 つの OpenDocument URL で、異なるデータソースからの異なる種類の複数の変数に関する値を指定できます。ただし、SAP HANA データソースのパラメータ付き URL は、本リリースではサポートされていません。

変数の詳細については、SAP ヘルプポータル (<http://help.sap.com>) にある *SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP* ユーザガイドの「SAP BW データソースのプロンプト」の節を参照してください。

10.1.2 パラメータ付き OpenDocument URL の作成

パラメータ付き URL を作成するには、次の要素が必要になります。

URL 要素	説明	リファレンス
ベース URL	OpenDocument URL にパラメータを追加する前に、ワークスペースのベース URL をコピーする必要があります。こ	SAP ヘルプポータル (http://help.sap.com) にある <i>SAP BusinessObjects Analysis, edition for</i>

URL 要素	説明	リファレンス
	の URL は、BI ラウンチパッドの [ドキュメント] タブか、Analysis クライアントから確認できます。	OLAP ユーザガイドの「ワークスペースの URL を取得する」の節を参照してください。
変数および変数値の技術名	OpenDocument URL の変数および値は、技術名を使用して識別します。 SAP BW の場合、これらの技術名については BEx Query Designer で確認できます。	SAP BW については、SAP Help Portal (http://help.sap.com) で提供されている SAP technology のドキュメントを参照してください。
OpenDocument URL の構文	パラメータを追加する際には、特定の構文に従う必要があります。	SAP ヘルプポータル (http://help.sap.com) にある <i>OpenDocument</i> によるドキュメントの表示を参照してください。

11 スケーリングとパフォーマンス

11.1 MDAS インスタンスのクラスタ化

Multi-Dimensional Analysis Service は、本来メモリバウンドです。ユーザ数が増加すると、処理が必要なクエリ数も増加するため、MDAS のメモリ要件も増大します。

そのため、複数の MDAS インスタンスを一緒にクラスタ化する必要があります。Analysis は、追加の設定なしで、クラスタ化された MDAS インスタンスを自動的に識別して使用します。

MDAS を含め、BI プラットフォームサーバおよびサービスのクラスタ化の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

メモリ最適化の詳細については、*SAP BusinessObjects BI Sizing Companion Guide* を参照してください。

11.2 負荷分散

他の BI プラットフォームサービスと同様、複数の MDAS インスタンスをインストールすることができます。1 つのマシンに MDAS をインストールすると、セントラル管理コンソールを使用してそのマシンに複数の MDAS インスタンスを作成できるようになります。

別のマシンに MDAS をインストールして、負荷を分散することもできます。

MDAS を含め、BI プラットフォームサーバおよびサービスのクラスタ化の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

関連情報

[サーバフェールオーバー \[12 ページ\]](#)

[MDAS インスタンスのクラスタ化 \[93 ページ\]](#)

11.3 パフォーマンスの最適化

Analysis のパフォーマンスは、以下の *SAP BusinessObjects BI Sizing Companion Guide* の推奨事項に従って最適化することができます。

11.4 Essbase 11 データソースに対するスケーラビリティを確保するための Analysis の設定

この節では、Analysis, edition for OLAP を使用して Essbase 11 データソースに接続するときのスケーラビリティの向上と、接続エラーの回避を実現するための推奨設定について説明します。

Analysis を使用して Essbase 11 データソースに接続する場合、同時接続ユーザ数が 15 を超えると、パフォーマンスが低下する可能性があります。正しく設定されていれば、同時接続ユーザ数が 15 を超えても、APS 接続エラーが発生することなく、Analysis は正常に機能し続けますが、パフォーマンスが大幅に低下する可能性があります。

70 パーセントのユーザが Analysis でデータを使用し、30 パーセントのユーザがデータを分析している状態が、この同時接続ユーザの最適な負荷だと想定されます。

Essbase クライアントインタフェースで、Essbase サーバに TCP/IP 接続するために多くのエフェメラルポートが使用され、マシンのポート数が不足することが原因でスケーラビリティが制限されます。

使用可能なエフェメラルポートがなくなると、Essbase クライアントは、タイムアウトエラーで接続に失敗します。Essbase JAPI 例外がスローされ、APS ログでキャプチャされます。以下に、エラーの例を示します。

`com.essbase.api.base.EssException: アクティブなアプリケーションまたはキューブを設定できません。Essbase Error(1042006): ネットワークエラー [10061]:[<machine.domain.com>:1423] に接続できません。TCP/IP を使用する Essbase Agent への接続を待機中のクライアントがタイムアウトしました。ネットワーク接続を確認してください。同時にサーバおよびポートの値が正しいことを確認してください。`

APS ログで接続エラーが発生した場合、次の推奨事項を記載されている順に実装します。

1. 使用可能なエフェメラルポートを増やす
2. TIME_WAIT 状態を減らす
3. 接続再試行回数を増やす

ビジネス要件によっては、一部の手順は必要ない場合があります。たとえば、エフェメラルポート数を増やすことで、想定されるユーザの負荷に十分対応できる場合、残りの 2 つの手順は省略できます。

11.4.1 使用可能なエフェメラルポートの増加

MDAS を実行している APS マシンの使用可能なエフェメラルポート数を増やすことで、スケーラビリティを向上させることができます。最大推奨ポート範囲は、5000 ~ 65535 です。

Windows 7 および Windows Server 2008 の場合:

- 以下のコマンドを使用して、現在の動的ポート範囲を表示します。`netsh int ipv4 show dynamicport tcp`
- 以下のコマンドを使用して、動的ポート範囲を設定します。`netsh int ipv4 set dynamic tcp start=5000 num=65535`

Linux の場合

- 以下のコマンドを使用して、現在の動的ポート範囲を表示します。`cat /proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range`
- 以下のコマンドを使用して、動的ポート範囲を設定します。`echo "5000 65535" > /proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range`

ポート数を増やすとスケーラビリティは向上しますが、それでも APS でクライアント接続エラーが発生する可能性があります。

詳細については、以下の記事を参照してください。 <http://support.microsoft.com/kb/929851> ➡

11.4.2 TIME_WAIT 状態の削減

終了した接続を TCP で解放して、そのリソースを再利用できるようになるまでの経過時間を減らすことで、スケーラビリティを向上させることができます。この時間は、TIME_WAIT 状態と呼ばれます。この時間を最小値 (30 秒) に設定することをお勧めします。

たとえば、Windows の場合、10 進数値の 30 になるように次のレジストリエントリを編集します。

```
HKLM\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\Tcpip\Parameters\TcpTimedWaitDelay
```

Linux の場合、次のコマンドを使用して、tcp_fin_timeout パラメータを 30 秒に設定します。

```
echo 30 > /proc/sys/net/ipv4/tcp_fin_timeout
```

TIME_WAIT 状態を削減するとスケーラビリティは向上しますが、それでも APS でクライアント接続エラーが発生する可能性があります。

詳細については、次の記事を参照してください。

- Windows の場合: <http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc938217.aspx> ➡
- Linux の場合: http://pic.dhe.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r0/index.jsp?topic=%2Fcom.ibm.websphere.express.doc%2Finfo%2Fexp%2Fae%2Ftprf_tunelinux.html ➡

11.4.3 接続再試行回数の増加

接続再試行回数は、Essbase クライアントが Essbase サーバへの接続を試行する回数です。

接続再試行回数を増やすことで、APS から Essbase サーバへのクライアント接続エラーを削減できます。接続再試行回数を増やしても、スケーラビリティは向上しません。

Essbase JAPI をロードする JVM の `olap.server.netConnectRetry` Java プロパティを使用して、接続再試行回数を設定できます。最大推奨設定は、8000 です。

12 モニタリングとロギング

12.1 監査

監査とは、BI プラットフォームの機能で、管理者はデータソース接続のオープンやワークスペースの変更など、BI プラットフォームサーバおよびアプリケーションに関する重要なイベントのレコードを保持することができます。記録された情報により、アクセスしている情報、そのアクセスおよび変更方法、操作を実行中のユーザを確認することができます。

Analysis は、以下の操作のいずれかが実行されると、常に監査イベントを登録します。

- 新しいワークスペースまたは分析ビューが作成された場合。
- ワークスペースまたは分析ビューが保存された場合。
- ワークスペースまたは分析ビューが削除された場合。
- ワークスペースまたは分析ビューが表示された場合。
- ワークスペースまたは分析ビューが別のフォーマットにエクスポートされた場合。
- MDAS への接続が確立された場合。
- MDAS への接続が切断された場合。
- データソースへの接続が確立された場合。
- データソースへの接続が切断された場合。

監査の詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの「「監査」」の節を参照してください。

12.2 トレースログ[トレースログ]

システム管理者およびサポート担当者は、トレースにより BI プラットフォームコンポーネント (サーバおよび Web アプリケーション)、および監視対象コンポーネント内で発生するアクティビティを監視することができます。

トレースとは、監視対象コンポーネントの操作中に発生するイベントのレコードです。BI プラットフォームサーバによって生成されるシステムレベルのメッセージがトレースされ、ログファイルに書き込まれます。これらのログファイルは、システム管理者がパフォーマンスの監視または問題のデバッグ用に使用します。

トレースの詳細については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの「「BI プラットフォームコンポーネントのトレース」」の節を参照してください。

12.3 SAP BW サーバで Analysis の統計を有効にする

SAP BW サーバで、Analysis, edition for OLAP に関する統計を有効にするには、以下の手順を実行する必要があります。

1. ログを作成する統計を含む BEx クエリまたはインフォプロバイダについて、SAP BW サーバで統計を有効にします。
2. BI プラットフォームサーバで、mdas.properties ファイルを開きます。

Windows システムの場合、mdas.properties ファイルは以下のディレクトリにあります。

```
<BOE_INSTALL_DIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI  
4.0%java%pjs%services%MDAS%resources%com%businessobjects%multidimensional%servic  
es%
```

ここで、<BOE_INSTALL_DIR> は、インストールディレクトリのファイルパスです (デフォルトでは C:%Program Files (x86)%SAP BusinessObjects%)。

UNIX システムの場合、mdas.properties ファイルは以下のディレクトリにあります。

```
<BOE_INSTALL_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/pjs/services/MDAS/resources/com/  
businessobjects/multidimensional/services/
```

3. multidimensional.services.bics.profilng.enabled プロパティの値を false から true に変更します。ファイルを保存して閉じます。
4. セントラル管理コンソールを開いて、Multi-Dimensional Analysis Service (MDAS) をホストする Adaptive Processing Server を再起動します。
5. SAP Logon で、RSDDSTAT トランザクションを使用して統計スイッチをオンにし、BEx クエリまたはインフォプロバイダでのログ作成を設定します。
6. 統計を有効にしたクエリを使用して、Analysis, edition for OLAP で目的のワークフローを実行した後、統計データにアクセスするには、SE16 トランザクションを使用して RSDDSTAT_OLAP テーブルを確認します。
詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com/>) で提供されている SAP technology のドキュメントを参照してください。たとえば、SAP technology 7.3 の場合は、SAP technology ライブラリの機能関連ビューを開いて、▶ *Business Warehouse* ▶ *Generic Tools and Services* ▶ *BW Statistics* ▶ をクリックします。

SAP BW サーバで Analysis の統計ログを作成する必要がなくなった場合は、これらの変更を元に戻す必要があります。BEx クエリまたはインフォプロバイダの統計を無効にします。

multidimensional.services.bics.profilng.enabled プロパティを false に戻し、MDAS をホストする Adaptive Processing Server を再起動します。SAP Logon で、RSDDSTAT トランザクションを使用して統計スイッチをオフにします。

関連情報

[MDAS サーバの設定ファイル \[56 ページ\]](#)

[Multi-Dimensional Analysis Service の再起動 \[55 ページ\]](#)

12.4 Analysis ワークスペースによって使用される接続、キューブ、およびクエリの識別

各種の Analysis ワークスペースによるデータソースの使用を特定するために、OLAP 接続とカタログ、Analysis ワークスペースで参照されるキューブとクエリを表示できます。

OLAP ワークスペースの Analysis エディションごとに、CMS ではこれらの詳細が SI_DATASOURCE_URIS という名前のプロパティバッグに格納されます。この情報は、たとえばクエリビルダで取得できます。

プロパティバッグには、データソースあたり 1 つのエLEMENT が格納されます。各ELEMENT には、選択したキューブ、クエリ、またはビューのパスが含まれています。たとえば、パス ATuTkMo9ChOjYFi.uFGCKQ/TEST_CUBE/QRy_BEX_SAMPLE は以下の内容を示しています。

- 1 番目にELEMENT の OLAP 接続の CUID: ATuTkMo9ChOjYFi.uFGCKQ
- 2 番目に BW インフォキューブの名前: TEST_CUBE
- 3 番目にワークスペースが参照する BEX クエリ – カタログ/キューブ – クエリ/ビューの名前: QRy_BEX_SAMPLE

13 Microsoft Analysis Services の考慮事項

13.1 MSAS 接続用の IIS 設定

MSAS 接続用に IIS を設定するには、次の手順を実行します。

① 注記

以下は Microsoft Windows Server 2008 R2 に基づく手順です。Microsoft Windows Server 2003 における IIS の設定については、Microsoft TechNet の記事 (<http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc917711.aspx>) を参照してください。

1. 必要なファイルのコピー [99 ページ]
2. アプリケーションプールの作成 [100 ページ]
3. 仮想ディレクトリの作成 [100 ページ]
4. セキュリティの設定 [100 ページ]
5. Web サービス拡張の設定 [101 ページ]

以下の手順を完了すると、MSAS データソースへの新しい接続を作成できます。

関連情報

[OLAP データソース接続の作成 \[64 ページ\]](#)

[データソース接続設定 \[73 ページ\]](#)

13.1.1 必要なファイルのコピー

Windows Server がすでに Web Server (IIS) ロール用に設定されていることが前提です。このロールはサーバーマネージャを使って確認または追加できます。▶ [スタート](#) ▶ [ファイル名を指定して実行](#) をクリックして、「**ServerManager.msc**」と入力します。

1. c:\inetpub\wwwroot 内に olap という名前の新しいフォルダを作成します。
2. SSAS isapi フォルダ内のフォルダとファイルを、IIS olap フォルダへコピーします。
たとえば、SQL Server 2008 R2 がインストールされている場合、c:\program files\microsoft sql server\msas10.mssqlserver\olap\bin\isapi の中身すべてを c:\inetpub\wwwroot\olap へコピーします。この時点で、olap フォルダには Resources フォルダと 2 つのファイル (msmdpump.dll および msmdpump.ini) が含まれています。
3. ▶ [スタート](#) ▶ [ファイル名を指定して実行](#) をクリックして、「**inetmgr**」と入力し、IIS マネージャを起動します。

4. [接続] パネルで、["サイト"] > ["既定の Web サイト"] の順に展開し、olap という名前のフォルダが追加されていることを確認します。

13.1.2 アプリケーションプールの作成

1. [接続] パネルで、["アプリケーション プール"] を右クリックして、["アプリケーション プールの追加"] を選択します。
2. ["アプリケーション プールの追加"] ダイアログボックスで、次の情報を入力して [OK] をクリックします。

名前	olap
.NET Framework バージョン	.NET Framework v2.0.50727
マネージ パイプライン モード	Classic
アプリケーション プールを直ちに開始する	選択するオプション

3. [接続] パネルで、["アプリケーション プール"] をクリックし、["アプリケーション プール"] パネルに "olap" アプリケーションプールが表示されていることを確認します。
4. "olap" アプリケーションプールを右クリックし、["詳細設定"] を選択します。
5. ["全般"] カテゴリで、["32 ビット アプリケーションの有効化"] を ["False"] に設定します。
6. ["モデルの処理"] カテゴリで、"ID" を ["NetworkService"] に設定して、[OK] をクリックします。

13.1.3 仮想ディレクトリの作成

1. IIS マネージャがまだ起動していない場合は、▶ **スタート** ▶ **ファイル名を指定して実行** ▶ をクリックして、「inetmgr」と入力します。
2. [接続] パネルで、["サイト"] > ["既定の Web サイト"] の順に展開します。
3. [olap] フォルダを右クリックし、["仮想ディレクトリの追加"] を選択します。
4. ["仮想ディレクトリの追加"] ダイアログボックスで、次の情報を入力して [OK] をクリックします。

エイリアス	olap
物理パス	c:\inetpub\wwwroot\olap

5. [接続] パネルで、["olap"] フォルダを右クリックして ["アプリケーションへの変換"] を選択します。
6. [アプリケーションの追加] ダイアログボックスで、"olap" を "アプリケーションプール" に選択して [OK] をクリックします。

13.1.4 セキュリティの設定

複数の認証オプションを使用できます。

- デフォルトでは匿名認証が有効になっていますが、SSAS セキュリティ機能を使う予定がない場合を除き、これを無効にする必要があります。匿名認証が有効になっている場合、SSAS では異なるユーザを区別すること

ができません。ただし、匿名認証を有効にしておく、接続に関する問題をトラブルシューティングする際に便利です。

- 基本認証では、ユーザ名とパスワードの入力が必要です。CMC で OLAP 接続を定義する場合は、基本認証が有効になっていることが必須です。接続を定義したら、基本認証は無効にできます。
 - Windows 認証は最もセキュリティの高い認証であり、推奨されます。シングルサインオン (SSO) を設定するには、Windows 認証を有効にする必要があります。
1. [接続] パネルで、“olap” アプリケーションを選択します。
これは、「仮想ディレクトリの作成」の手順でアプリケーションに変換したフォルダです。
 2. 機能ビューを選択し、[“IIS”] 機能カテゴリの [“認証”] を開きます。
 3. [“匿名認証”] を無効にし、[“基本認証”] と [“Windows 認証”] を有効にします。

13.1.5 Web サービス拡張の設定

1. [接続] パネルで、“olap” アプリケーションを選択します。
2. 機能ビューを選択し、[“IIS”] 機能カテゴリの [“ハンドラー マッピング”] を開きます。
3. 何も選択していない状態で空白の領域を右クリックし、[“スクリプト マップの追加”] を選択します。
4. [“スクリプト マップの追加”] ダイアログボックスで、次の情報を入力して [OK] をクリックします。

要求パス	*.dll
実行可能プログラム	c:\inetpub\wwwroot\olap\msmdpump.dll
名前	olap

5. [“要求の制限”] をクリックし、[動詞] タブで [“すべての動詞”] を選択します。
6. ISAPI 拡張の許可を求められたら、[はい] をクリックします。

13.2 Analysis, edition for OLAP および Analysis Services のセキュリティ

ここでは、Microsoft Analysis Services の認証を有効にするために SAP BusinessObjects サービスを設定する方法について説明します。

13.2.1 Analysis Services のロールセキュリティ

SQL Server Analysis Services のセキュリティアーキテクチャは、Microsoft Windows 認証を元に構築されています。Analysis Services のデータにアクセスするには、Microsoft Windows で認証可能なアカウントを使用して接続する必要があります。Analysis Services では、組み込み管理者のアカウント“sa”など、ネイティブの SQL Server データベース(リレーショナル)エンジンのセキュリティシステムで作成されたユーザアカウントは認識されません。ユーザの認証後、Analysis Services はユーザが属しているセキュリティロールを確認し、キューブ、ディメンション、メンバー、およびセルの戻り値を判断します。

ユーザが Analysis Services キューブのデータを Analysis で表示できるようにするには、まずターゲットのキューブに適切なセキュリティロールを定義する必要があります。

13.2.1.1 Analysis Services 2008 または 2012 でセキュリティロールを定義する

1. Microsoft SQL Server Management Studio を開き、Analysis Services インスタンスに接続します。
2. データベースのフォルダ構造を展開します。
3. [ロール]フォルダを右クリックし、[新しいロール]を選択します。
4. [ロール名]フィールドにロールの名前を入力し、[定義の読み取り]チェックボックスを選択して、ユーザに読み取り権限を付与します。
5. 左の枠で[メンバーシップ]をクリックし、[追加]をクリックして、データベースへの読み取りアクセス権を付与されるドメインユーザー一覧を追加します。

① 注記

ユーザ数が多い場合は、Active Directory 内で OLAP アクセスのグループを作成し、そのグループにすべてのユーザを追加して、グループを一覧に追加するほうがより効率的な場合もあります。

6. [データソース]、[キューブ]、[セルデータ]、[ディメンション]、[ディメンションデータ]、[マイニング構造]をクリックして適切なユーザ権限を選択し、ユーザが読み取りアクセス権を所有する領域を指定します。

① 注記

ユーザがアクセス権を所持するデータ量の範囲は、作成されるレポートと所属組織のセキュリティにより異なり、セキュリティはこれに応じて策定する必要があります。

13.2.2 より詳しい情報の検索

Analysis Services のセキュリティおよび認証

- Kerberos の詳細については、<http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc753173%28WS.10%29.aspx> を参照してください。
- トラブルシューティング用に Kerberos のイベントログを有効にするためのガイド: <http://support.microsoft.com/kb/q262177/>
- データの追跡に SQL プロファイラを使用する方法に関する情報: <http://msdn2.microsoft.com/en-us/library/ms187929.aspx>
- SQL Server 2008/Analysis Services サービスパックのダウンロード: <http://support.microsoft.com/kb/968382>
- SQL Server 2008 R2/Analysis Services サービスパックのダウンロード: <http://support.microsoft.com/kb/2527041>

計算の解決順序

- Analysis Services の解決順序に関する Microsoft の説明: <http://msdn2.microsoft.com/en-us/library/ms145539.aspx> ➡

13.3 リレーショナルデータのドリルスルーを設定する

ドリルスルー結果に表示される最大行数や、認可されるクエリの最大数を変更するために、`mdas.properties` ファイルで該当するプロパティ値を修正することができます。

1. システムの `mdas.properties` ファイルに移動します。

システム ディレクトリのファイルパス

Windows	<code><BOE_INSTALL_DIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%java%pjs%services%MDAS%resources%com%businessobjects%multidimensional%services</code>
UNIX	<code><BOE_INSTALL_DIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/java/pjs/services/MDAS/resources/com/businessobjects/multidimensional/services</code> 。ここで <code><BOE_INSTALL_DIR></code> はインストールディレクトリのファイルパスです。

2. 以下のいずれかを実行します。

- ドリルスルー結果に表示される最大行数を変更するには、`multidimensional.services.drillthrough.maxrows` の値を必要な値に設定します。デフォルトでは、この値は 10000 に設定されています。
- 認可されるクエリの最大数を変更するには、`multidimensional.services.drillthrough.maxqueries` の値を必要な値に設定します。デフォルトでは、この値は 16 に設定されています。

④ 注記

`mdas.properties` ファイルへの変更を適用するために、MDAS をホストする Adaptive Processing Server のすべてのインスタンスを再起動する必要があります。

14 Analysis へのワークスペースの変換

14.1 Voyager から Analysis, edition for OLAP へのワークスペースの変換

Voyager から Analysis, edition for OLAP へ移動する場合は、アップグレード管理ツールを使用して、Voyager ワークスペースを Analysis 形式に変換します。アップグレード管理ツールは、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームに同梱されています。

① 注記

Voyager XI Release 2 または XI 3.0 を使用している場合は、XI 3.1 にアップグレードしてから Analysis の最新バージョンに変換する必要があります。

アップグレード管理ツールには、完全アップグレードまたは増分アップグレードの 2 つのオプションが用意されています。

- アップグレードの完了
完全アップグレードプロセスは、すべてのタイプのオブジェクトを変換します。最低限の作業と対話が必要ですが、プロセスの完了には何時間も要します。
- インクリメンタルアップグレード
増分アップグレードプロセスでは、変換するオブジェクトを選択することができます。たとえば、すべての Voyager ワークスペースを選択できるように、オブジェクトはタイプ別にグループ化されます。

Analysis データソース接続のフォーマット化は Voyager 接続と異なるため、完全アップグレードを実行すると、Voyager オブジェクトは変換できません。したがって、Voyager ワークスペースを変換する前に、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.2 に Voyager データソース接続を手動で再設定する必要があります。

アップグレードは、以下の 2 つの方法のいずれかで実行できます。

- まず、完全アップグレードを実行します。すべての Voyager オブジェクトの変換は失敗しますが、他のオブジェクトは正常に移行されます。完全アップグレードが終了したら、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.2 の CMC に Voyager データソース接続を手動で再設定します。次に、Voyager ワークスペースの増分アップグレードを実行します。
- SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.2 の CMC に Voyager データソース接続を手動で再設定します。次に、完全アップグレードを実行します。

① 注記

手動でデータソース接続を再設定する場合、4.2 で使用する Analysis 接続名は、XI 3.1 で使用する Voyager 接続名と同じである必要があります。

詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) にある *SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームアップグレードガイド*、および SCN の SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP コミュニティスペースにある *Converting Voyager Workspaces to Analysis Edition for OLAP Workspaces* ホワイトペーパーを参照してください。

15 ワークスペースの翻訳

15.1 翻訳のための **Analysis** ワークスペースの準備

Analysis ワークスペースは、バージョン 4.1 SP4 以降でトランスレーションマネジメントツールを使用して翻訳できます。



以前のバージョンの Analysis で作成されたワークスペースは、Analysis, edition for OLAP バージョン 4.1 SP4 以降で開いて、保存する必要があります。

Analysis ワークスペースの翻訳の詳細については、SAP ヘルプポータル (<http://help.sap.com>) にあるトランスレーションマネジメントツールユーザガイドを参照してください。

重要免責事項および法的情報

ハイパーリンク

リンクの一部は、アイコンやマウスオーバーテキストで分類されています。これらのリンクから、追加の情報を得ることができます。アイコンについて。

-  このアイコンが付いたリンク: SAP がホストしているものではない Web サイトに移動します。これらのリンクを使用することで、お客様は (お客様と SAP との契約書に別段の明示的な記載がない限り) 以下のことに同意することになります。
 - リンク先のサイトのコンテンツが SAP のドキュメンテーションではないこと。お客様は、この情報に基づいて SAP に対する製品クレームを推断することはできません。
 - SAP が、リンク先のサイトのコンテンツについて同意することも反対することもなく、また SAP がその利用可能性や正確性について保証しないこと。SAP は、かかるコンテンツの使用により発生した損害が、SAP の重大な過失又は意図的な違法行為が原因で発生したものでない限り、その損害に対して一切責任を負いません。
-  このアイコンが付いたリンク: 当該の特定の SAP 製品又はサービスのドキュメンテーションから離れ、SAP がホストしている Web サイトに移動します。これらのリンクを使用することで、お客様は (お客様と SAP との契約書に別段の明示的な記載がない限り)、この情報に基づいて SAP に対する製品クレームを推断することはできないことに同意します。

外部プラットフォームでホストされているビデオ

一部のビデオは、サードパーティのビデオホスティングプラットフォームに置かれている場合があります。SAP では、これらのプラットフォームに保存されているビデオが将来にわたって利用できると保証することはできません。また、これらのプラットフォームにホストされている、いかなる広告またはその他のコンテンツ (関連ビデオまたは同じサイトでホストされている別のビデオに移動する場合など) については、SAP の管理外であり責任を負いません。

ベータおよびその他の試験的機能

試験的機能は、SAP が将来のリリースを保証する正式に提供される機能の範囲外です。これは、試験的機能は、SAP により通知なく理由の如何を問わず随時変更される場合があることを意味します。試験的機能は、本稼働使用のためのものではありません。お客様は、試験的機能を実際の運用環境で、又は十分なバックアップがとられていないデータとともに、デモンストレーション、テスト、試験、評価その他の方法で使用してはなりません。

試験的機能の目的は、早期にフィードバックを得ることで、それに応じて顧客の皆様やパートナーが将来の製品に影響を与えることを可能にすることです。SAP コミュニティなどにおいてフィードバックを提供することで、お客様は、投稿物や二次的著作物の知的財産権が SAP の独占的所有物であり続けることを承認することになります。

コード例

ソフトウェアのコーディングやコードスニペットはすべて、例です。それらは、本稼働使用のためのものではありません。コード例は、構文や表現規則を分かりやすく説明し視覚化することのみを目的としています。SAP は、コード例の正確性や完全性について保証しません。SAP は、コード例の使用により発生した過誤や損害が、SAP の重大な過失又は意図的な違法行為が原因で発生したものでない限り、損害に対して一切責任を負いません。

偏見のない表現

SAP は、ダイバーシティ & インクルージョンの文化を支持しています。SAP の文書では、可能な限り、文化、民族性、ジェンダー、および障がいの有無を問わず、すべての人々に対する偏見を伴わない表現を採用します。

© 2024 SAP SE or an SAP affiliate company. All rights reserved.

本書のいかなる部分も、SAP SE 又は SAP の関連会社の明示的な許可なくして、いかなる形式でも、いかなる目的にも複製又は伝送することはできません。本書に記載された情報は、予告なしに変更されることがあります。

SAP SE 及びその頒布業者によって販売される一部のソフトウェア製品には、他のソフトウェアベンダーの専有ソフトウェアコンポーネントが含まれています。製品仕様は、国ごとに変わる場合があります。

これらの文書は、いかなる種類の表明又は保証もなしで、情報提供のみを目的として、SAP SE 又はその関連会社によって提供され、SAP 又はその関連会社は、これら文書に関する誤記脱漏等の過失に対する責任を負うものではありません。SAP 又はその関連会社の製品及びサービスに対する唯一の保証は、当該製品及びサービスに伴う明示的保証がある場合に、これに規定されたものに限られます。本書のいかなる記述も、追加の保証となるものではありません。

本書に記載される SAP 及びその他の SAP の製品やサービス、並びにそれらの個々のロゴは、ドイツ及びその他の国における SAP SE（又は SAP の関連会社）の商標若しくは登録商標です。本書に記載されたその他のすべての製品およびサービス名は、それぞれの企業の商標です。

商標に関する詳細の情報や通知については、<https://www.sap.com/japan/about/legal/trademark.html> をご覧ください。